

奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和56年度

昭和57年

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査報告書

昭和56年度



序

私たちの住む奈良市の地下には、かつて天平文化の華咲きほこった奈良の都平城京の遺跡が、約1200年ものあいだ眠り続けております。この平城京跡が当時の人々の生活や経済、文化を今に伝える貴重な遺跡であることは申すまでもありません。この歴史的遺産を受け継ぎ、そこに学び、さらに子孫に引き継ぐことは、私たちに課せられた重要な任務でありましょう。

奈良市では、こうした遺産を保護すべく調査活動をすすめており、その成果は、各年度に分かって調査報告書としてまとめてきております。本書は、昭和56年度中に行なった発掘調査の報告をとりまとめて公表するものです。ここに示した成果を幾分なりとも御利用、御活用願えれば幸に存じます。しかしながら、内容その他まだまだ不備不足の点がお目にとまるかと存じます。御批判、御教示をおよせいただきますようお願い致します。

最後になりましたが、発掘調査及び調査報告書の作成にあたりまして御指導、御協力を賜りました奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめとする関係諸機関の方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

昭和 57 年 3 月

奈良市教育委員会

教育長 藤 井 宗 治

例 言

1. 本書は、昭和56年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告を集録したものである。

なお、昭和56年度には平城京左京三条四坊十坪および東市推定地についても発掘調査を行なっているが、この報告については本書に収録せず、別に刊行を予定している。

1. 本書に集録した報告は、下記の目次に記したとおりである。なお、調査地の位置は次頁の調査地一覧および発掘調査地点位置図に示している。

1. 本書は、田辺征夫（文化財課課長）の指導の下に調査担当者全員が作成し、各報告の目次あるいは例言にその文責を明らかにした。全体の編集は西崎卓哉が行なった。

目 次

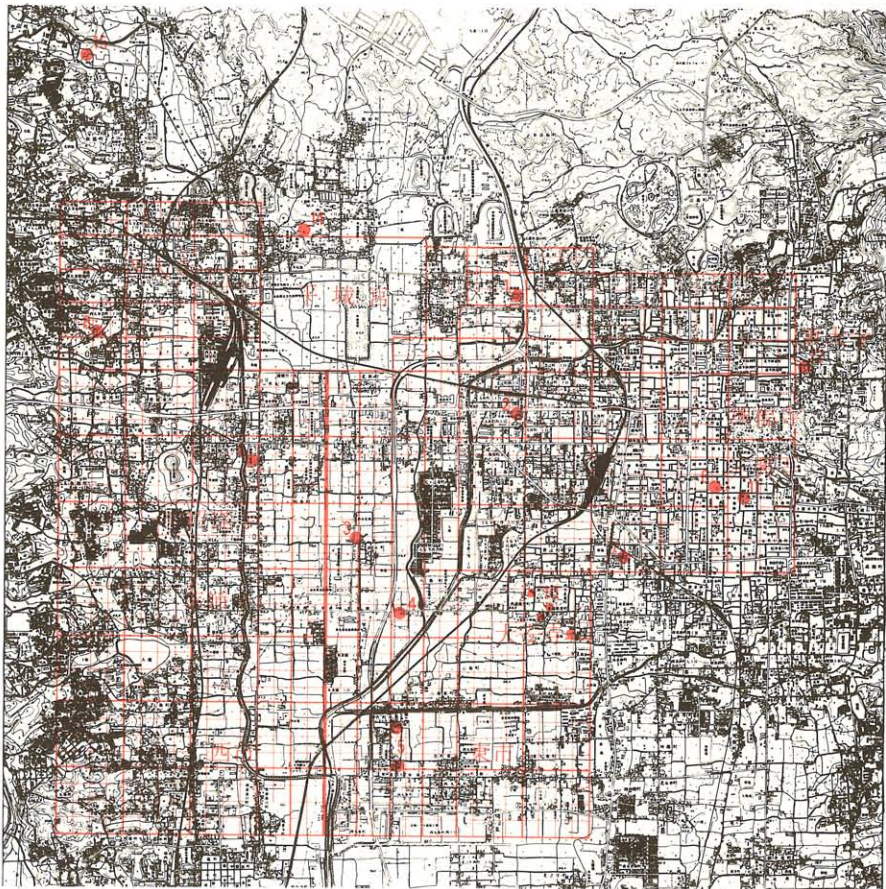
平城京左京一条三坊十三坪発掘調査報告	1
平城京左京三条三坊十四坪発掘調査報告	19
平城京左京五条一坊七坪発掘調査報告	31
平城京左京六条二坊三坪発掘調査報告	43
平城京左京八条二坊二・四坪発掘調査報告	61
平城京左京（外京）四条六坊十四坪発掘調査概要報告	89
平城京左京（外京）五条五坊坊間路発掘調査報告	105
平城京右京二条四坊七坪発掘調査報告	115
平城京右京四条二坊二坪発掘調査報告	123
大安寺旧境内発掘調査報告	141
元興寺旧境内発掘調査報告	167
東大寺旧境内発掘調査報告	175
平城京のその他の調査	199
平城宮北辺地域発掘調査報告	217
京北条里推定地発掘調査報告	225

調 査 地 一 覧

	遺 跡 名	調 査 地	概 要	担 当 者
1	平城京 左京一条三坊十三坪	法華寺町1400番地他	奈良時代の建物8棟、溝1条を検出	西 崎 卓 哉 篠 原 豊 一
2	平城京 左京三条三条十四坪	大宮町4の236番地	奈良時代の塀4条、建物4棟、溝1条と弥生時代の溝1条を検出	中 井 公
3	平城京 左京五条一坊七坪	柏木町44の1、 45の3番地	五条条間路北側溝、井戸1基、土壌を検出	篠 原 豊 一
4	平城京 左京六条二坊三坪	八条町字三道寺 404の1番地	奈良時代の柱列3条、建物9棟、溝2条、井戸1基、土壌を検出	森 下 恵 介
5	平城京 左京八条二坊二・四坪	杏中町401の1番地 杏南町79の1、 80の1番地	奈良時代の建物1棟、溝1条、井戸1基、中世の柱列1条、建物8棟、溝5条、井戸1基、落ち込みを検出	森 下 恵 介 篠 原 豊 一
6	平城京左京（外京） 四条六坊十四坪	脇戸町、東城戸町	奈良時代の井戸1基、中・近世の塀、建物、溝、井戸、石組竪穴、土壌などを検出	西 崎 卓 哉
7	平城京左京（外京） 五条五坊坊間路	西木辻町67番地	五坊坊間路とその両側溝を検出	森 下 恵 介
8	平城京 右京二条四坊七坪	青野町191の1番地	旧谷地形を確認	森 下 恵 介
9	平城京 右京四条二坊二坪	四条大路5丁目 6の1番地	奈良時代の井戸2基、中世の粘土採取土壌を検出	篠 原 豊 一
10	大安寺旧境内	大安寺町1237の1番地 大安寺町1147番地 大安寺町1042番地 大安寺町1154の1番地 大安寺町1120番地	大安寺旧境内で実施した5箇所 の調査 大安寺講堂北辺の延石 列の他、建物、杉山古墳の周濠 などを検出	森 下 恵 介 西 崎 卓 哉 篠 原 豊 一
11	元興寺旧境内	中新屋町29番地	元興寺鐘楼に用いられていたと 思われる礎石を検出	西 崎 卓 哉 中 井 公 篠 原 豊 一

12	東大寺旧境内	水門町35の5番地 水門町37番地 水門町36の1番地	東大寺旧境内で実施した3箇所の調査 中世の築地、井戸などを検出	森下 恵介 篠原 豊一
13	平城京のその他の調査	八条町281番地 柏木町411の47番地 八条町725の1番地 柏木町494の2~5番地	平城京内で実施した4箇所の小規模な調査	森下 恵介 西崎 卓哉 中井 公
14	平城宮北辺地域	佐紀町2859番地	古墳を検出	西崎 卓哉
15	京北条里推定地	秋篠町1333番地	中世の溝などを検出	中井 公

※ 調査地はいずれも奈良市内で、番号は発掘調査地点位置図と対応する。



発掘調査地点位置図

平城京左京一条三坊十三坪

発掘調査報告

例 言

1. 本書は、奈良市法華寺町1400番地他において実施した奈良市立一条高等学校校舎改築に伴う事前発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年9月11日から同年11月4日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財課が行い、西崎卓哉、篠原豊一が現地を担当した。
なお、調査補助員として行天優貴子、谷沢 仁、長谷川一英、服部芳人の各君の協力があった。
1. 本書の執筆、編集は調査担当者の討議をもとに西崎卓哉が行った。

目 次

I はじめに.....	3
II 検出遺構.....	4
III 出土遺物.....	6
IV まとめ.....	8

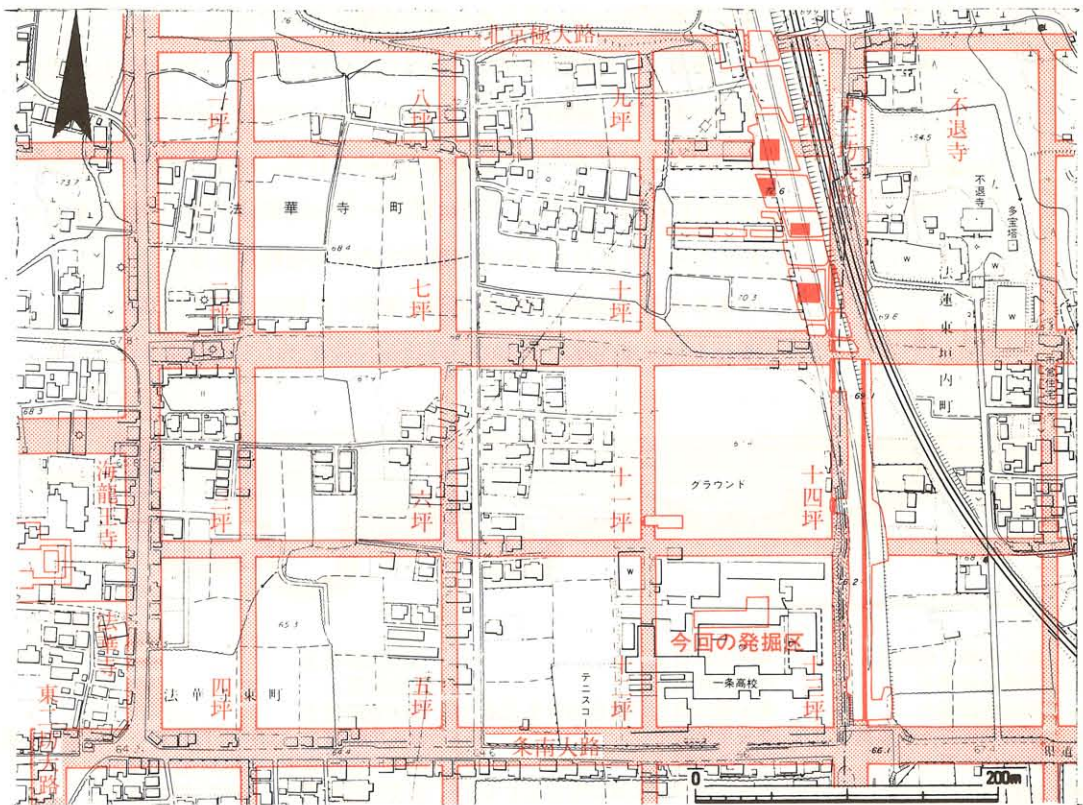
I はじめに

今回の発掘調査は、奈良市立一条高等学校の木造校舎老朽化に伴う校舎建替えの事前調査として実施した。現在の一条高校の敷地は、平城京の条坊では左京一条三坊の中でも十三、十四坪の全域と十一、十二坪の一部を占めている。このうち、今回の調査地は十三坪の北半部に当ると推定される地点である。調査は昭和56年9月11日に開始し、同年11月4日に現地での日程を終了した。調査面積は720㎡である。

これまでに、一条高校内あるいはその周辺ではいくつかの発掘調査が実施されてきている。校地の東を通る国道24号線バイパス建設工事の際に実施された十五、十六坪と東三坊大路の調査では、十五、十六坪が一括して利用された大規模な宅地であったことが判明し、長屋王の作宝宮であった可能性が指摘されている。また、一条高校体育館建設に伴う調査では十四坪の西限を画する施設とも考えられる柵列を検出している。^{注1)}

注1) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VI(平城京左京一条三坊の調査)』1974

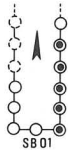
注2) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和54年度 1980



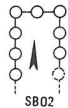
第1図 発掘区の位置と周辺の条坊(1/5000)

II 検出遺構

調査地が木造校舎跡地であったため、旧木造校舎基礎工事の際の掘削により遺構面は大きく削平され、部分的に遺構が完全に破壊されていた。検出した主な遺構には建物、石敷、溝がある。これらの遺構は地山である黄色粘土面および整地土である灰色礫層面で検出した。いずれも奈良時代に属するものである。以下、種別ごとに各遺構について記す。



SB01 発掘区北端で検出した桁行5間(1.28m)以上、梁行2間(5.4m)の南北棟。柱間は桁行が8.5尺等間、梁行が9尺等間である。方位が北で西にふれる。



SB02 発掘区東端で検出した桁行3間(7.2m)以上、梁行2間(5.4m)の南北棟。柱間は桁行、梁行ともに8尺等間である。



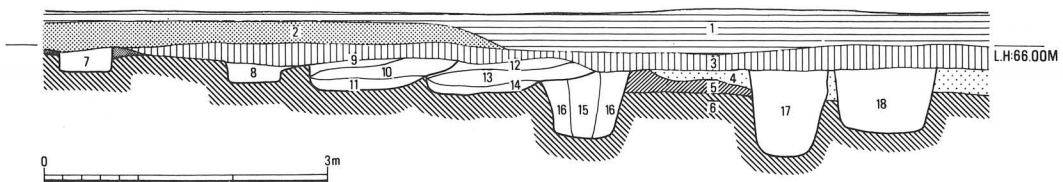
SB03 発掘区中央、SB02西方で検出した東西2間(4.2m)以上、南北3間(7.2m)の総柱の建物。柱間は東西の柱筋が7尺等間、南北の柱筋が8尺等間である。建物の東側部分が大きく破壊され、南は発掘区外へのびるため全体の規模は不明である。



SB04 発掘区中央部で検出した桁行6間(14.4m)以上、梁行不明の東西棟。南面に庇(2.7m)をもつ。柱間は身舎桁行8尺等間。庇の出は9尺である。方位が北で西にふれる。建物の南側をとりかこむように石敷が広がる。石敷は径3~5cm程度の小礫を一面に敷きつめたもので、SB04に伴う施設である可能性がある。

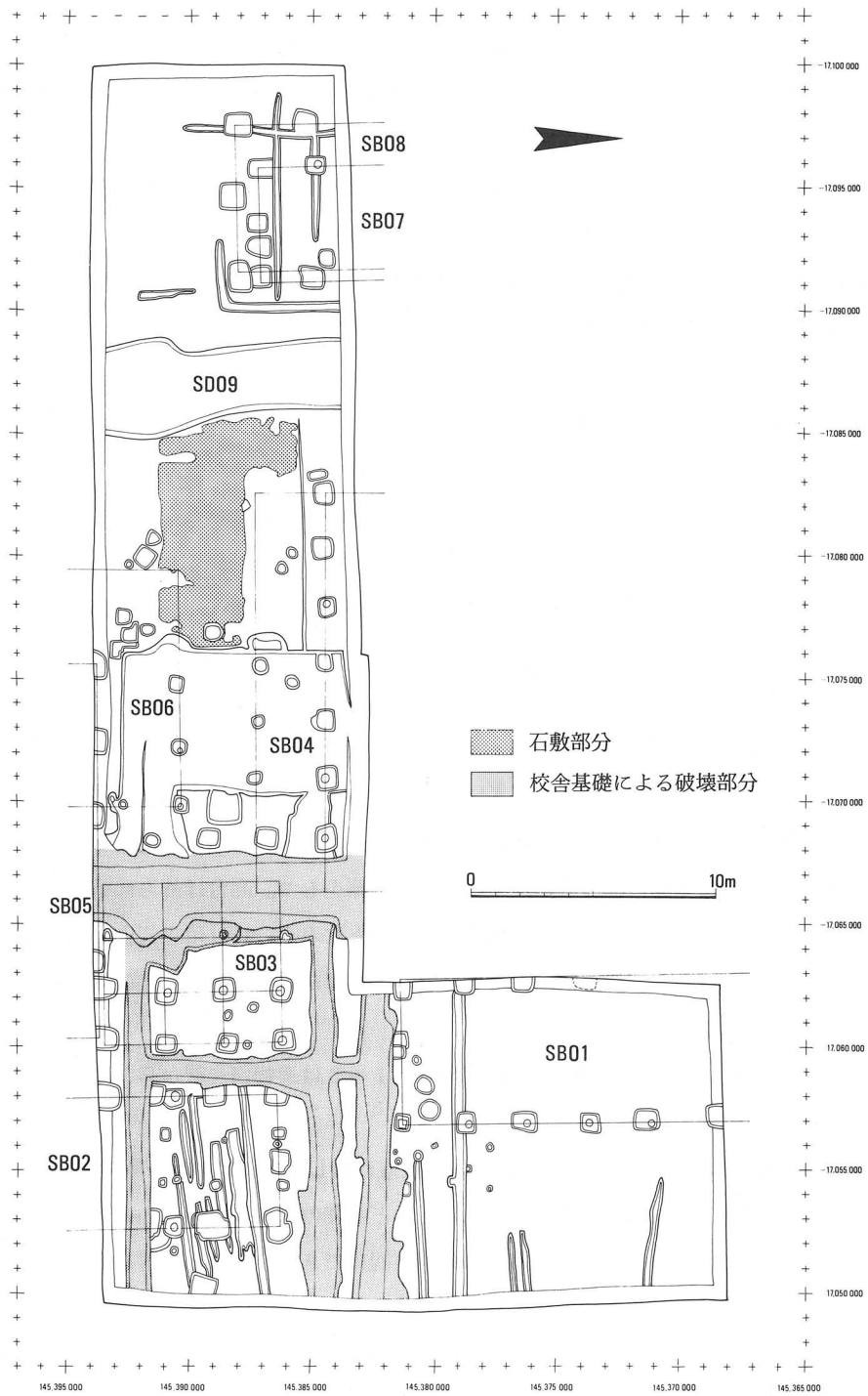


SB05 発掘区中央部南端で検出した桁行4間(12.0m)以上、梁行不明の東西棟。東妻の一柱穴がSB03により破壊されている。



- | | | |
|----------------|---------------------|------------------------------|
| 1. 黄白色砂(造成土) | 7. 茶灰色砂質土 | 13. 茶灰色砂質土 |
| 2. 茶黒色砂質土 | 8. 茶灰色砂質土 | 14. 灰色砂質土 |
| 3. 茶灰色砂質土 | 9. 茶灰色砂質土(黄色粘土まじる) | 15. 黄灰色砂質土 |
| 4. 茶灰色砂質土(整地土) | 10. 茶灰色粘質土 | 16. 黄灰色砂質土(SB03柱穴埋土, 15より砂質) |
| 5. 黄白色砂質土 | 11. 茶灰色砂質土 | 17. 茶黒灰色砂質土(SB03柱穴埋土) |
| 6. 黄色粘土(地山) | 12. 茶灰色砂質土(黄色粘土まじる) | 18. 黄茶灰色砂質土(SB05柱穴埋土) |

第2図 発掘区南壁積土層図(1/80)



第 3 図 検出遺構配置図 (1/300)



SB06 発掘区中央部で検出した桁行4間(9.6m)以上、桁行1間(2.4m)以上の東西棟。



SB07 発掘区西部で検出した桁行1間(2.4m)以上、梁行2間(4.8m)の南北棟。柱間は桁行が8尺、梁行8尺等間である。柱穴の重複関係からSB08より古いことがわかる。



SB08 SB07とほぼ同位置で検出した桁行1間(2.7m)以上、梁行2間(6.0m)の南北棟。柱間は桁行9尺、梁行10尺等間。

SD09 発掘区東半部で検出した南北方向の溝。幅2.9~4.0m、深さ0.2~0.3mを測る。内部に灰色砂および黄色粘土が堆積し、灰色砂は土器、瓦などの遺物を含む。

Ⅲ 出土遺物

遺構面を覆う遺物包含層および遺構中から土器、瓦などが出土した。ここでは図示できる土器類について記す。

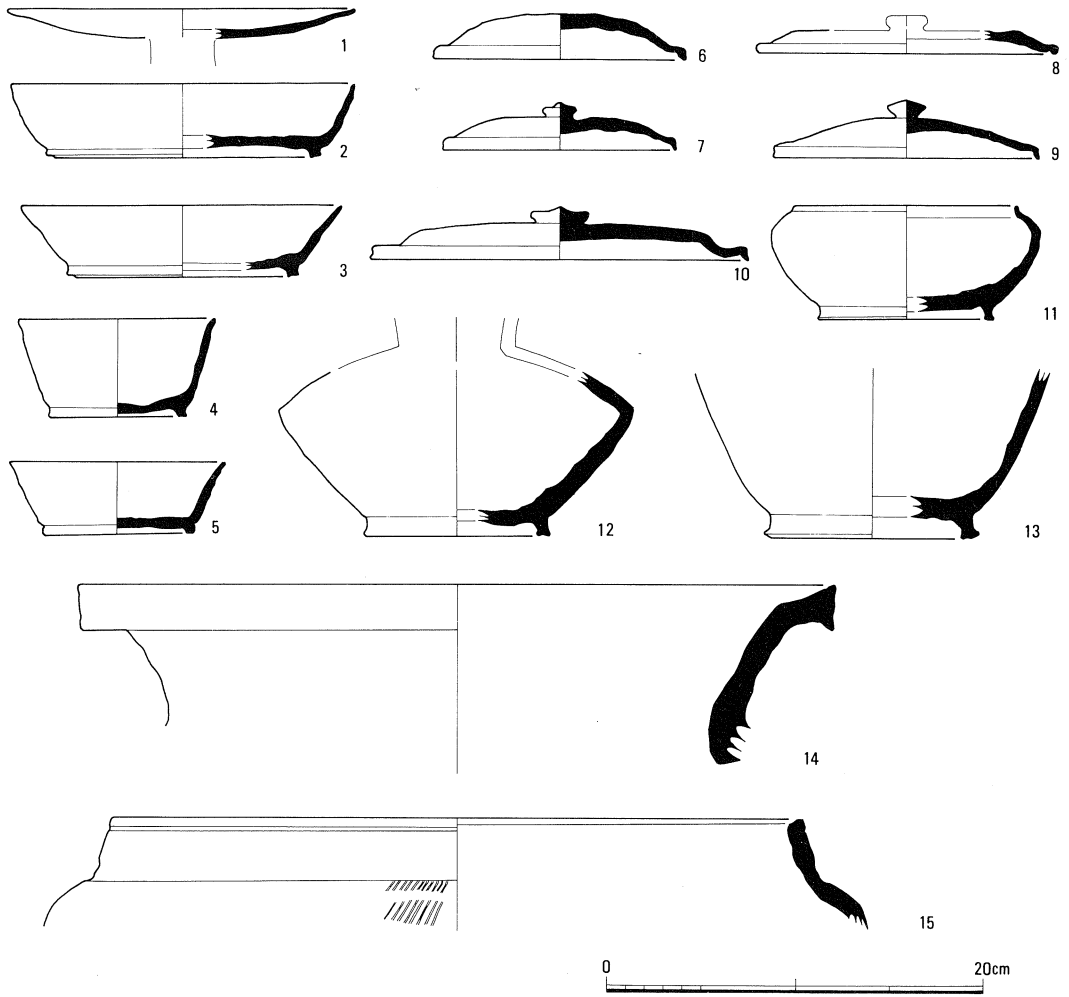
土器 須恵杯B(3)、杯B蓋(6・8)、甕A(14)がSD09から、その他は遺物包含層から出土した。

1は土師器高杯。脚部を欠き、杯部のみが残る。残存状態が悪く調整手法などは観察し難い。復元径は約18.5cm。2~5は須恵器杯B。2・3は口径が大きく、杯部の浅いもの。高台は外方にのび、脚端面は内傾する。4・5は口径の小さいものである。6~10は須恵器杯B蓋。6は頂部につまみをもたず、削り、ナデともに施していない。口径により、7~9と10に区別することができる。11は須恵器壺D。偏平な体部に、わずかに立ち上る口縁部をもつ。高台は外方に張り出し、脚端部は水平である。12は須恵器壺K。長い口縁部をもつものとなろう。13は須恵器壺。高台は大きく外方にのびる。14は須恵器甕A。口縁部が大きく外反し、端部は垂直である。15は須恵器甕C。大きく張った肩に短く立ち上る口縁部をもつ。

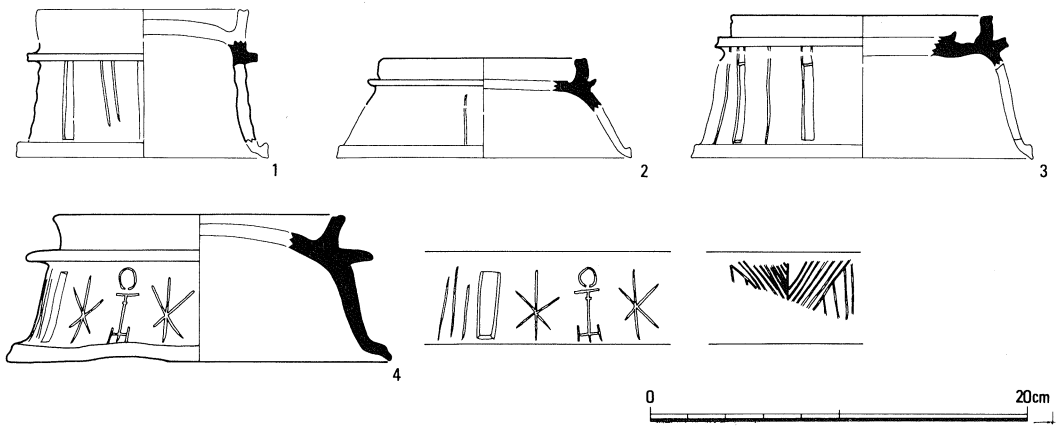
陶硯 硯が4点ある。いずれも圈脚円面硯であり、1~3は遺物包含層から、4はSD09から出土した。

1は硯部を欠き脚部のみが出土した。幅0.6cmの長方形透し孔の間にタテ方向の直線が2条刻まれている。2は外提部と脚基部のみ出土した。ほとんど海陸の区別のないものとなろう。透し孔の有無は明らかではないが、わずかにタテ方向の刻線が観察できる。3は海陸界に断面三角形の内提を設ける。脚部は長方形透し孔の間にタテ方向の刻線を配するものに復元できる。4は海陸の区別のないもの。外提下端に水平にのびる突帯をもつ。脚部には幅約1cmの長方形透し孔の間に線刻による文様を配する。

※ 土器の器種名などは、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅱ~Ⅺ』に準拠した。



第 4 图 出土土器 (1/4)



第 5 图 出土陶甗 (1/4)

IV ま と め

以上、今回の調査で検出した遺構、遺物について記した。ここでは、これまでの周辺の調査成果と併せて、各遺構の坪内で占める位置を検討しまとめとしたい。

十三坪の東を限る東三坊大路については、その幅員こそ確定できないまでも、東側溝が明らかにされている。この成果をもとに東三坊大路東側溝心と平城宮朱雀門心の距離を求めると、国土方眼位を介して1599.630mであることがわかる。しかし、平城京の造営方位は朱雀大路で国土方眼位に対してN15'41"W振れていることが知られているので、この振れをとり、修正を加えると両者心々間の距離は1602.369mとなる。この距離を両者間の造営計画尺5440尺〔5400尺（3坊幅）+40尺（推定東三坊大路1/2幅）〕で除すと、この場合の造営単位尺は0.2946mとなる。

ところで、今回検出したSD09心の位置を求めると、東三坊大路東側溝心から国土方眼位を介して西へ100.070mにあたるのがわかる。これに、同様の修正を加えると心々距離は100.067mとなる。一方、SD09が十三坪の東西3等分割線上にあると仮定した場合の東三坊大路東側溝心からの造営計画距離340尺〔300尺（ $\frac{2}{3}$ 坪幅）+40尺（東三坊大路 $\frac{1}{2}$ 幅）〕に、先に求めた造営単位尺0.2946mを乗ずると100.164mとなる。ここで、この計画距離と上記の心々距離とを比較すると、ごく近似した数値となることがわかる。このことは、SD09が十三坪の東西3等分割線上に位置する可能性が高いことを示しているものであろう。さらに同様の操作をSB03に対して行なうと、SB03は十三坪の東西の中軸線上に位置することがわかる。

以上の結果、十三坪は、少なくともSB03の存続期間中は、一町を分割することなく全域を一括利用した家地であった可能性が高いことが指摘できよう。また、これまでの平城京内の調査などでは、一坪を三等分割した上でそれぞれを別の宅地としている例は知られておらず、この点からSD09が坪内の地割溝としての性格をもつ可能性は少ないと言える。むしろ、十三坪全域を分割することなく一括利用する敷地内の排水用の溝などとしての性格を考えることが妥当ではなかろうか。

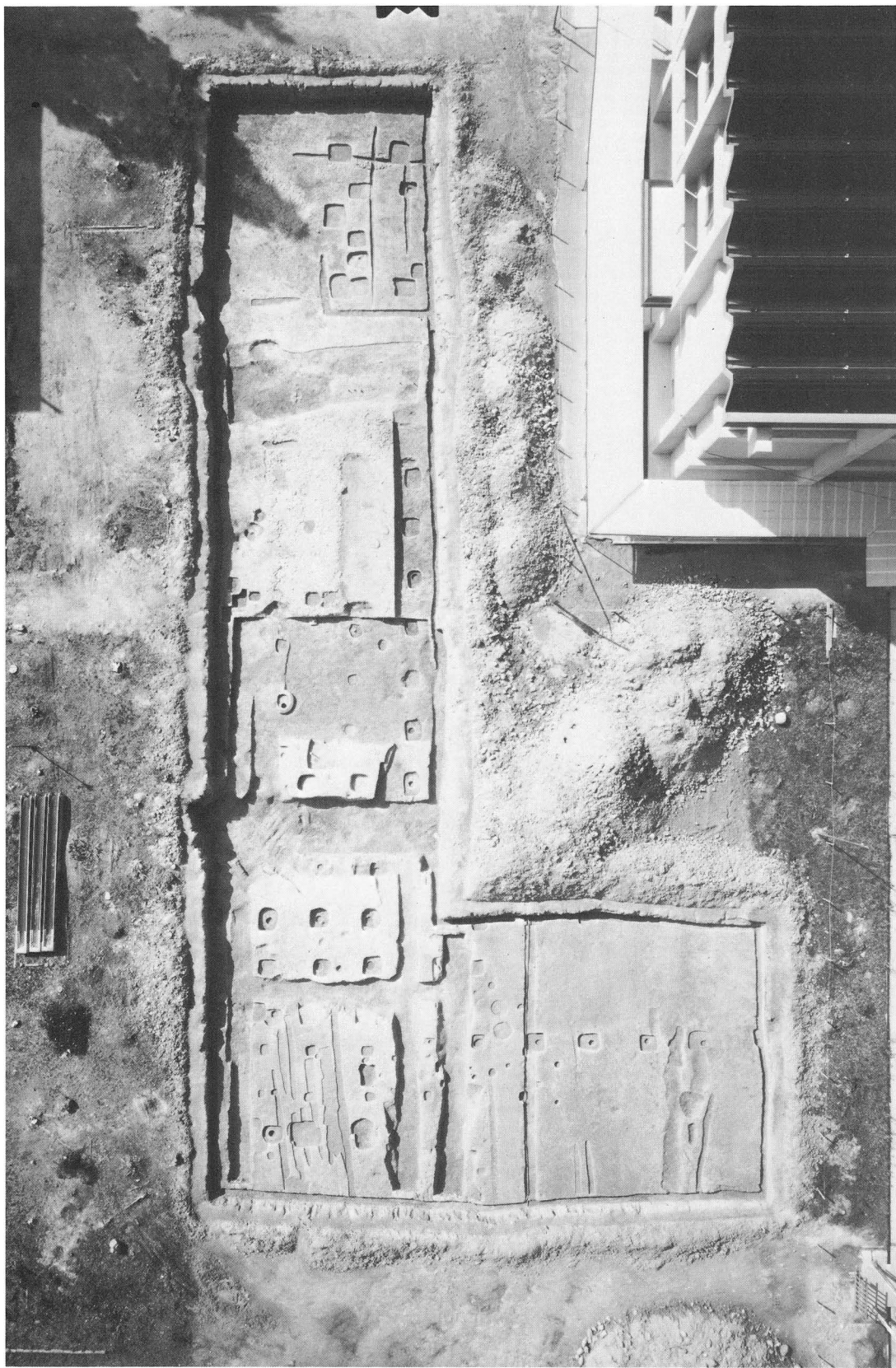
地 点	X	Y	備 考
SD09心	— 145,390,400	— 17,086,750	今回の調査
東三坊大路東側溝心	— 145,390,420	— 16,986,680	『平城宮発掘調査報告VI』から算出
平城宮朱雀門心	— 145,994,490	— 18,586,310	

第 1 表 計 測 座 標 表

注1) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VI（平城京左京一条三坊の調査）』1975

注2) 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974

图版 1 发掘区(1)



发掘区全景航空写真

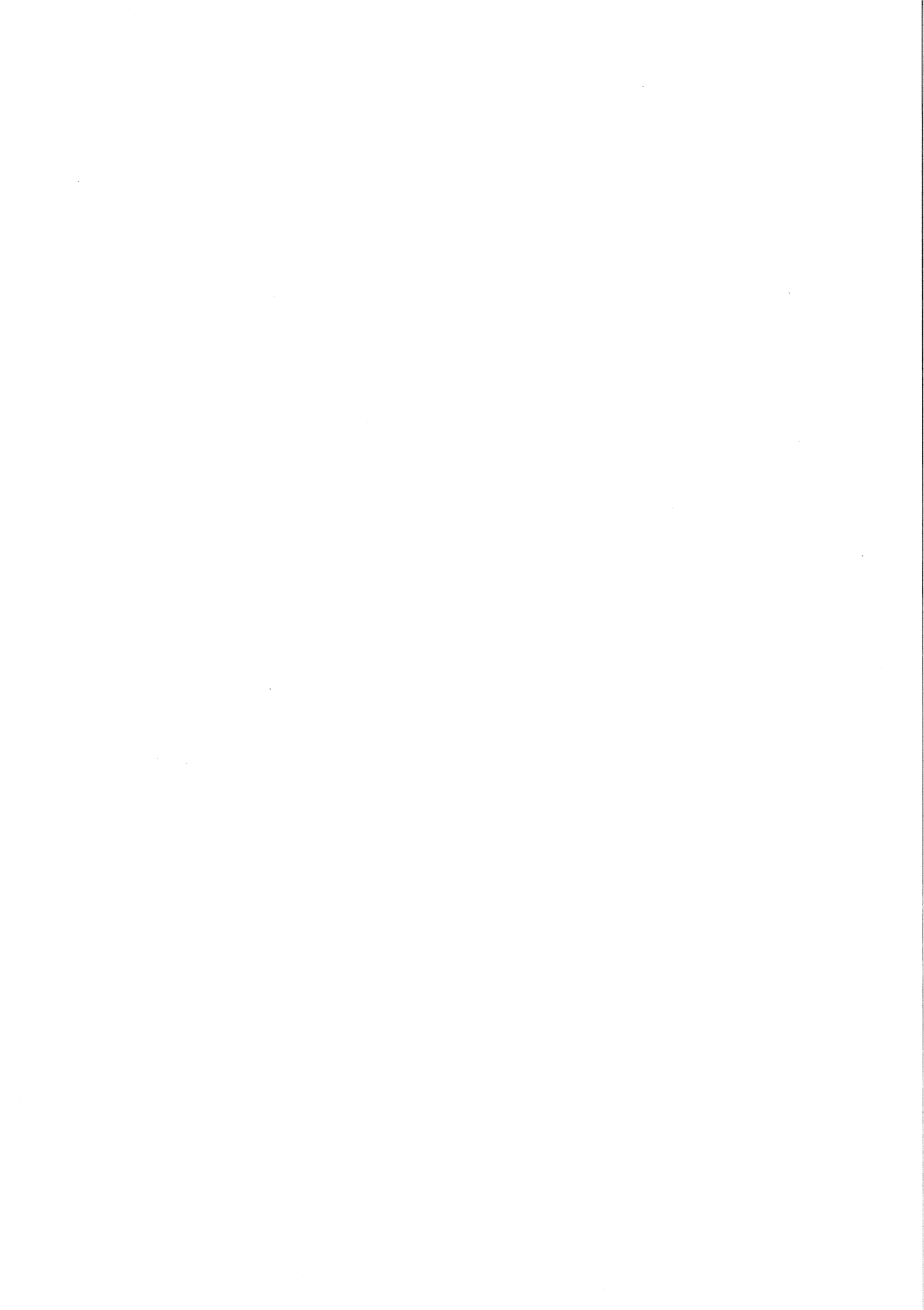




1. 発掘区全景（南西から）

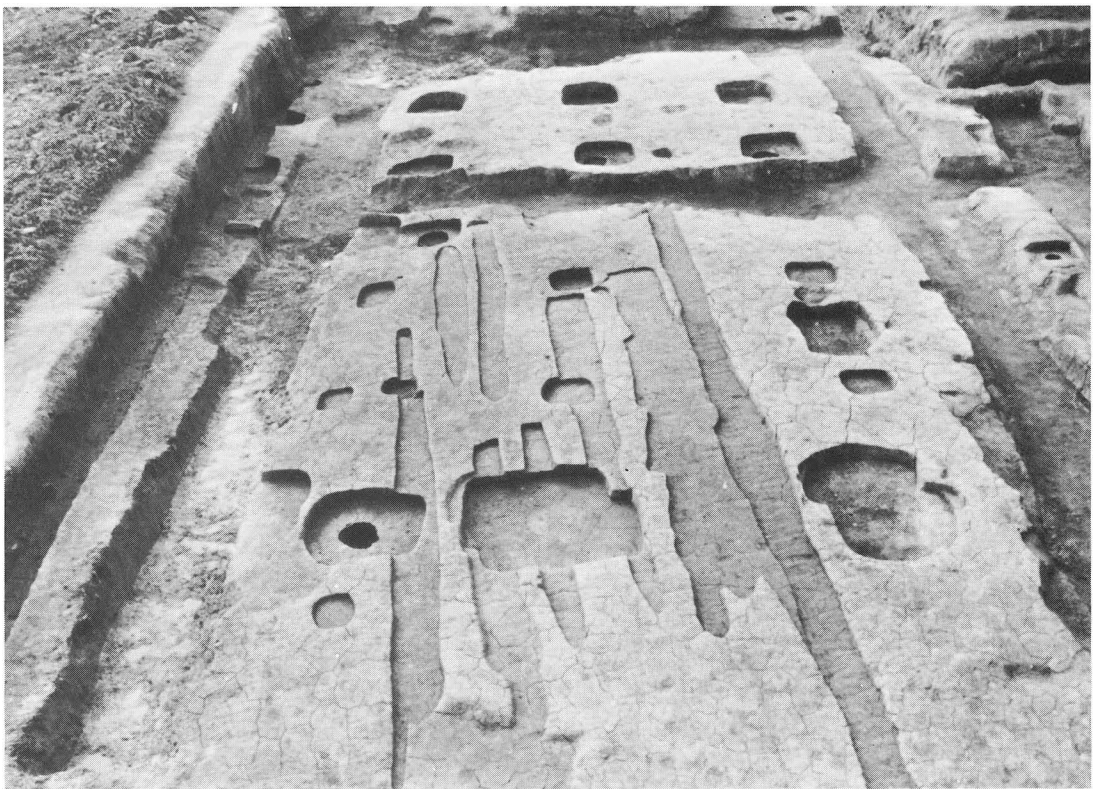


2. 発掘区全景（東から）

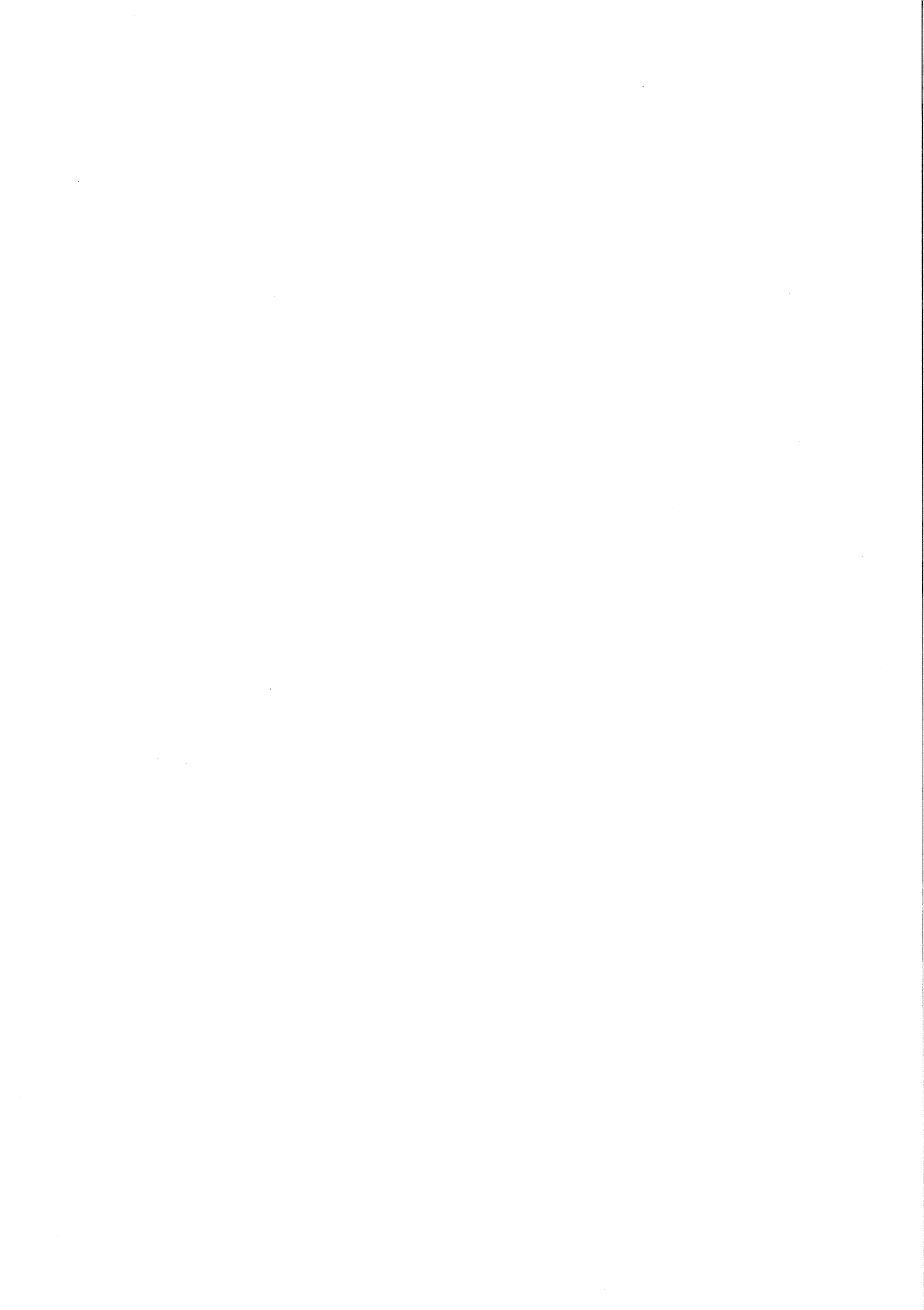


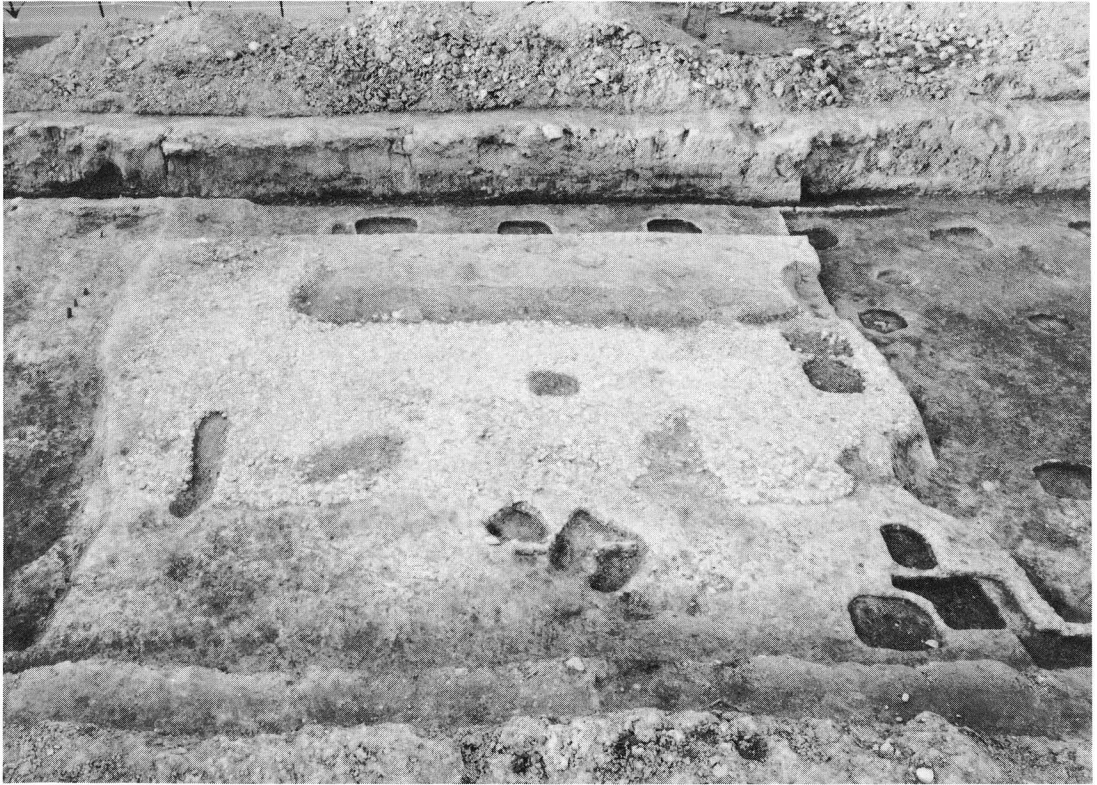


1. 発掘全景（南から）



2. SB02（東から）

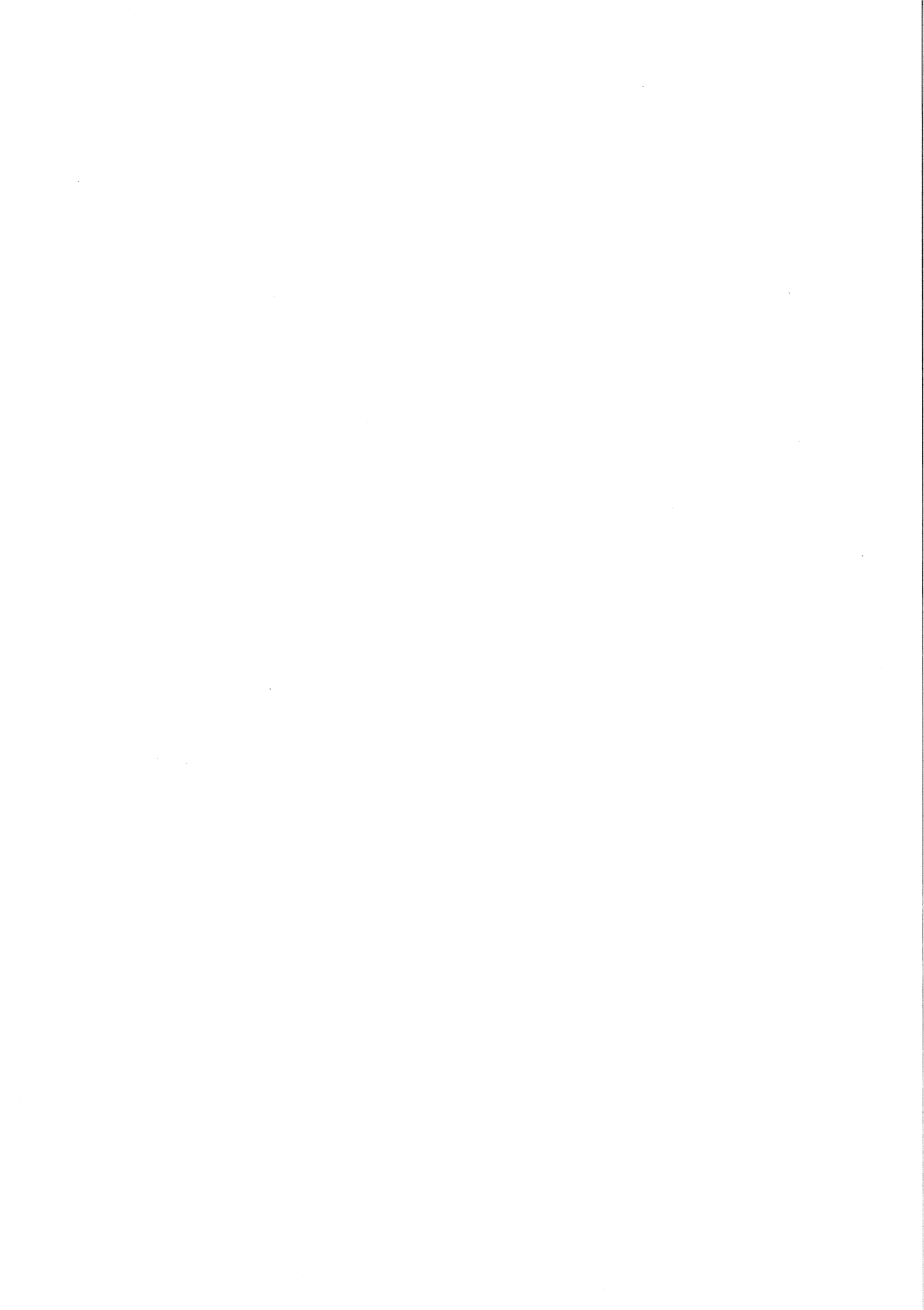




1. SB04 (南から)



2. SD09 (南から)

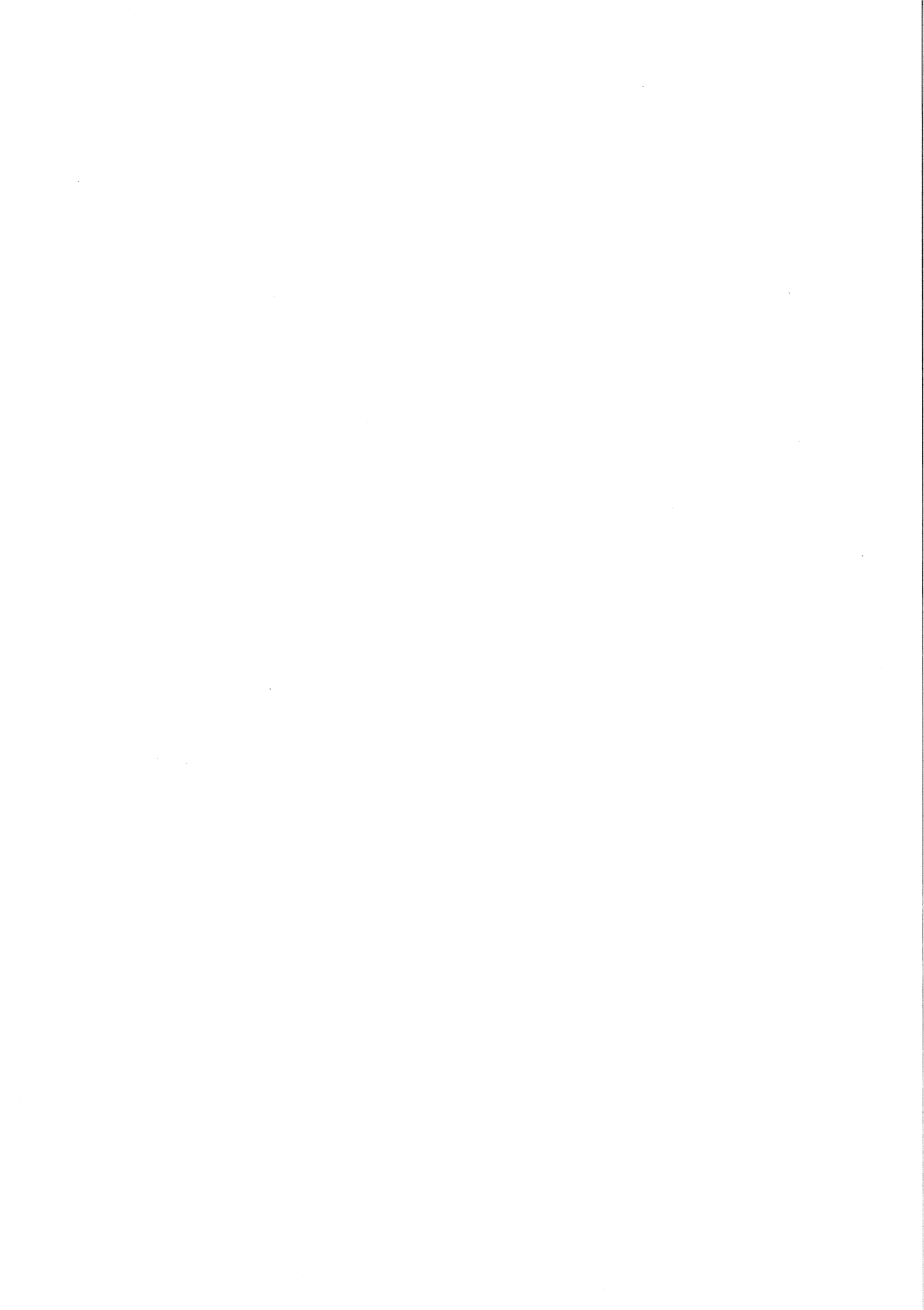




1. SB03 (南から)



2. SB07・08 (南から)



平城京左京三条三坊十四坪

発掘調査報告

例 言

1. 本書は、奈良市大宮町4-236において実施した、奈良市立大宮小学校の校舎増築工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年6月15日から同年7月10日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財課が行ない、中井 公が現地調査を担当した。
1. 発掘調査にあたっては、調査補助員として下記の奈良大学学生諸氏の参加があった。
奈良美穂、千代田秋充、鄭 喜斗、草野誠二、長沢豊文、長谷川一英
1. 本書の執筆ならびに編集は中井 公が行なった。

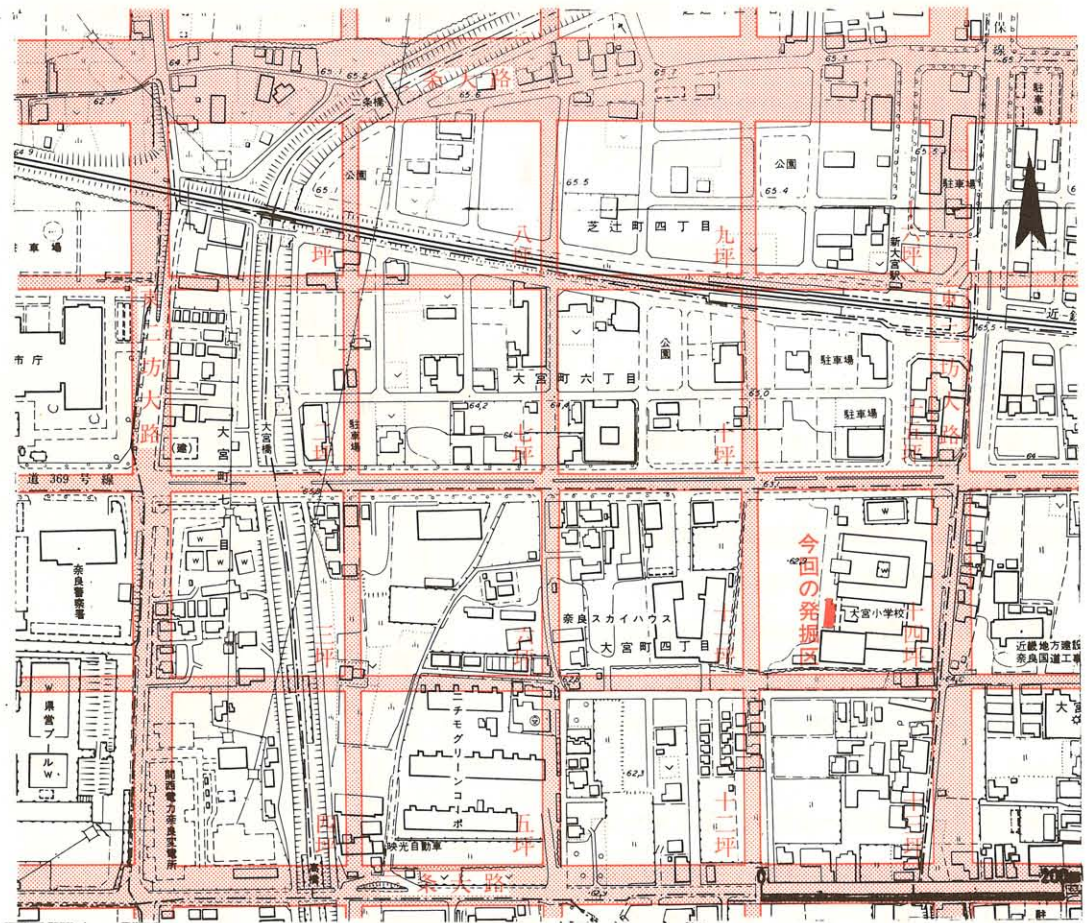
目 次

I はじめに	21
II 検出遺構	22
III 出土遺物	23

I はじめに

奈良市内でも、新大宮一帯は、とりわけて宅地化が急激なところのひとつである。これに伴う児童、生徒数の増加に対応すべく、奈良市では、昭和56年度事業の一環として、市立大宮小学校（奈良市大宮町4-236所在）の校舎増築工事を計画した。同校の敷地は、平城京の条坊では左京三条三坊十四坪の全域を占めており、奈良市教育委員会では遺跡の重要性に鑑みて、関係諸機関と協議の上、事前に発掘調査を実施することにした。

調査は昭和56年6月15日に開始し、この間に、奈良時代の建物や溝などの遺構が検出され、また若干の瓦と土器類の出土をみた。このため、調査期間中には、学校の依頼で高学年を対象に現地説明会を開くなどして、調査の全日程を終えたのは同年7月10日であった。なお、校舎計画床面積350㎡に対し、実際の発掘面積は140㎡である。



第 1 図 発掘区の位置と周辺の条坊 (1/5000)

Ⅱ 検出遺構

検出された遺構は、堀4条、建物4棟、溝2条である。以下、各遺構ごとに簡単に説明する。

堀SA01 東西方向の堀。1間分を検出し、発掘区外へのびる。柱間は9尺(2.7m)。建物SB05・06梁行と柱筋を揃え、柱穴の重複関係からSB05よりは新しいことがわかる。

堀SA02 東西方向の堀。1間分を検出し、発掘区外へのびる。柱間は8尺(2.4m)。

堀SA03 東西方向の堀。2間分を検出し、発掘区外へのびる。柱間は7尺(2.1m)等間。柱穴の重複関係から堀SA04の前身の堀であったことがわかる。

堀SA04 東西方向の堀。2間分を検出し、発掘区外へのびる。柱間は7尺(2.1m)等間。堀SA03の後身の堀で、柱位置をわずかに北西へずらしている。1柱穴に柱根の残存があった。

建物SB05 東西棟。全体の規模は不明であるが、桁行柱間は9尺(2.7m)、梁行は13尺(3.9m)で2間6.5尺等間となろう。建物SB06と梁行の柱筋を揃える、柱穴の重複関係からはSA01よりも古いことがわかる。

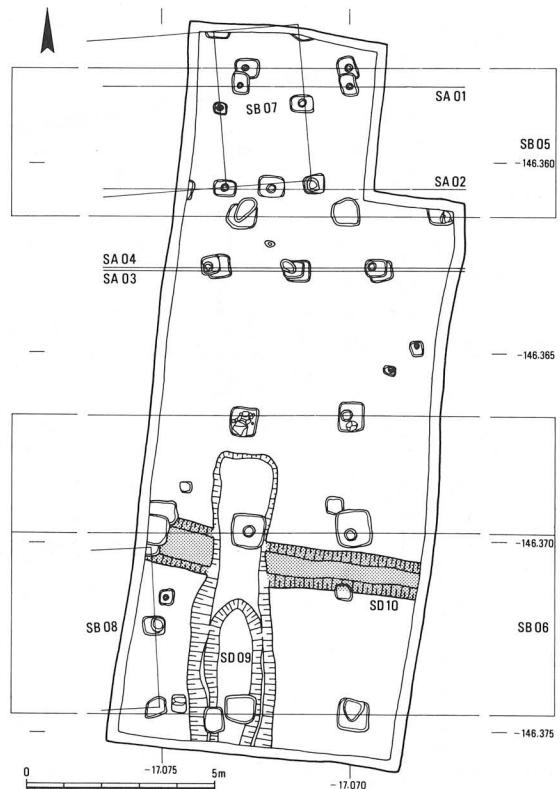
建物SB06 北庇付きの東西棟。全体の規模は不明であるが、桁行柱間は9尺(2.7m)、身舎梁行は16尺(4.8m)で2間8尺等間となろう。庇の出は10尺(3.0m)。建物SB05と梁行の柱筋を揃える。庇の1柱穴には礎板が残存し、いま1柱穴の柱抜き跡からは軒平瓦の出土があった。

建物SB07 東西棟。東妻を検出したのみで全体の規模は不明である。桁行柱間は8尺(2.4m)、梁行は2間で7尺(2.1m)等間で、東から1間目の柱筋に間仕切りの柱穴をもつ。方位が東で若干北に振れる。

溝SD08 南北2間分の柱穴を検出したが、東西棟東妻を考慮しておく。柱間は7尺(2.1m)等間。建物SB07同様に方向が振れる。

溝SD09 幅1.5~2.3m、深さ10~35cmの南北溝。奈良時代の土師器、須恵器が出土。

溝SD10 幅1.0~1.3m、深さ30cm前後の東西溝。弥生時代中頃の土器片若干が出土。



第2図 検出遺構配置図(1/200)

Ⅲ 出土遺物

瓦類 建物SB06の柱抜取り跡から出土した軒平瓦1点、隅平瓦1点と通常の丸・平瓦若干がある。

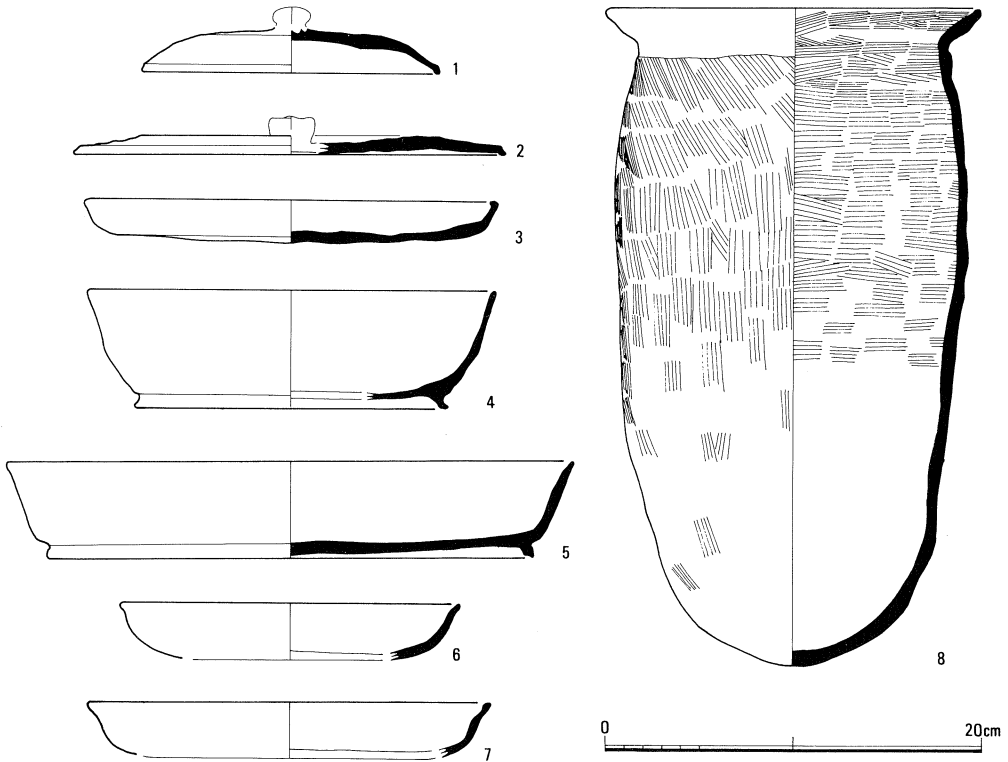
軒平瓦(第3図)は、中心飾りの左右それぞれに3回反転する均整唐草文を内区主文とし、外区には珠文を巡らす。平城宮6668-A型式と同範で、平城宮出土軒瓦編年では第Ⅱ期(養老5年~天平17年)に位置付けられている。



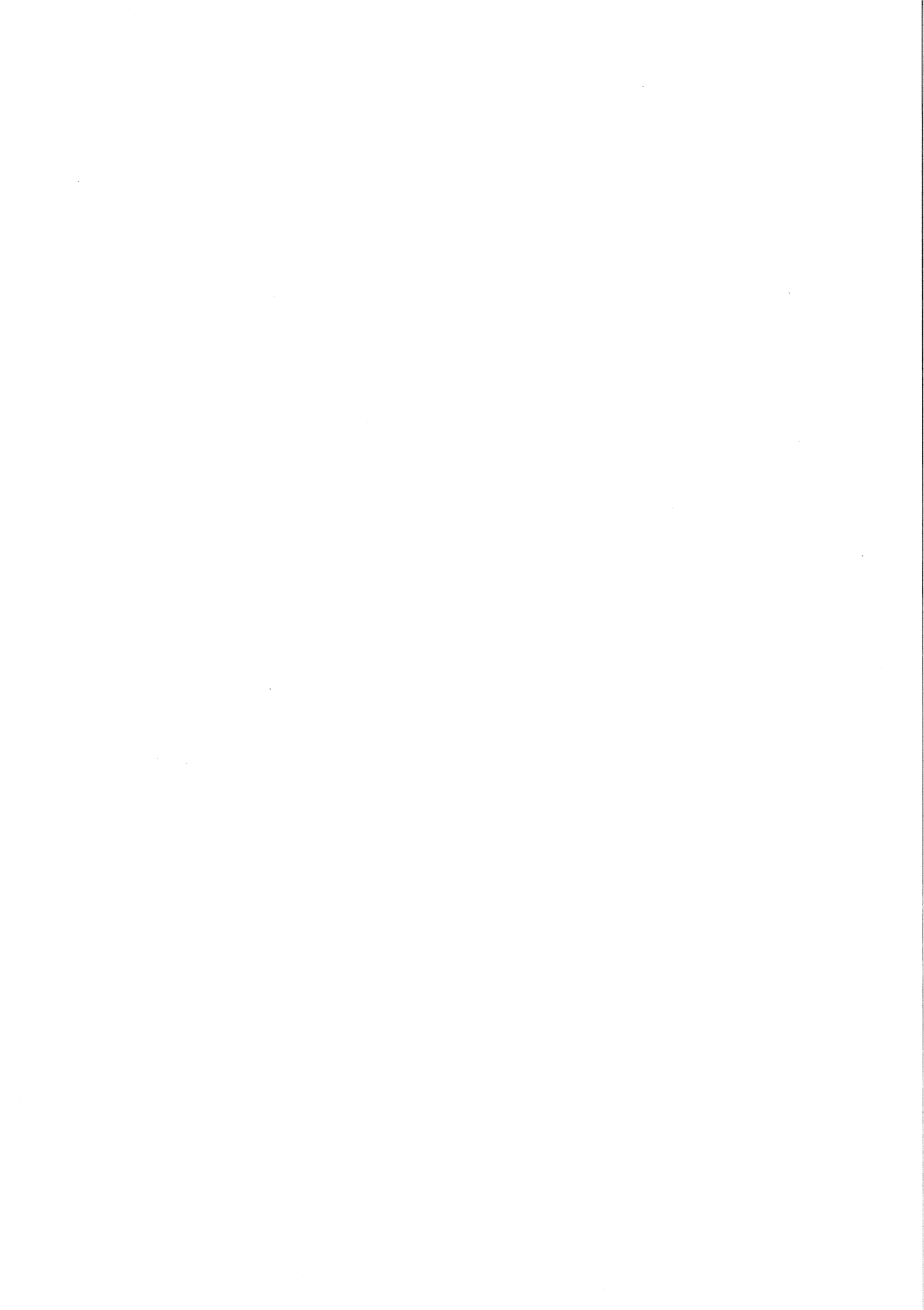
第3図 出土軒平瓦(1/3)

土器類 溝SD10から出土した土師器皿・甕、須恵器杯・杯蓋・皿がある。

土師器皿Aは、口縁部全体が内彎するもの(6)と、口縁部下半が内彎し上半が外彎するもの(7)とがある。甕C(10)は、長手丸底の器体に斜め上に開く口縁部を付ける。いわゆる近江系と称されるもの。須恵器杯B(4)は、外方にふんばった高台をもつ。杯B蓋は、頂部が丸く笠形を呈するもの(1)と、平らな頂部をもつもの(2)とがある。皿A(3)は、平底と短い口縁部とからなり、口縁部は内側に巻き込み肥厚する。皿B(5)は皿Aに高台をつけたもの。



第4図 出土土器(1/4)

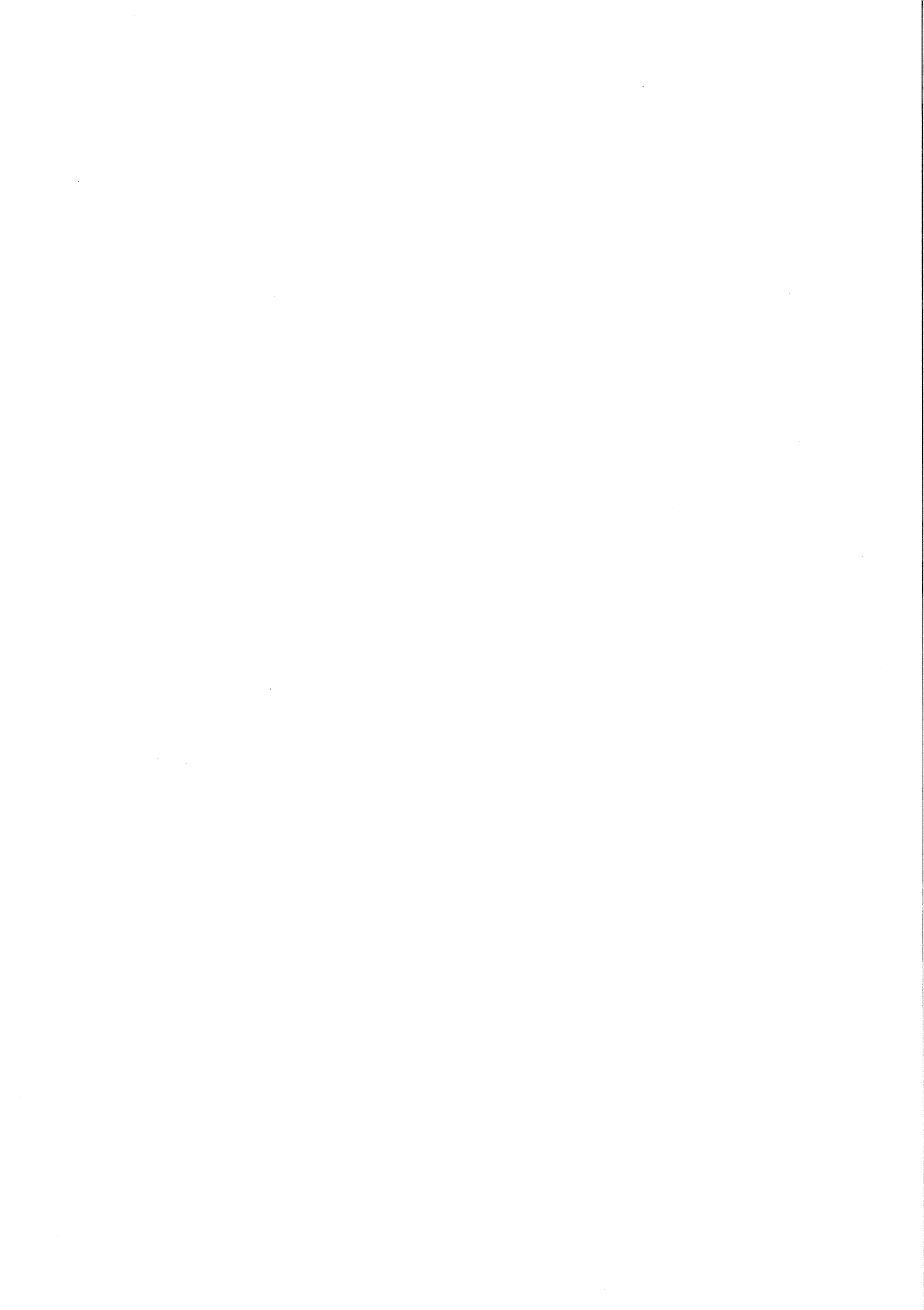




1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（南から）



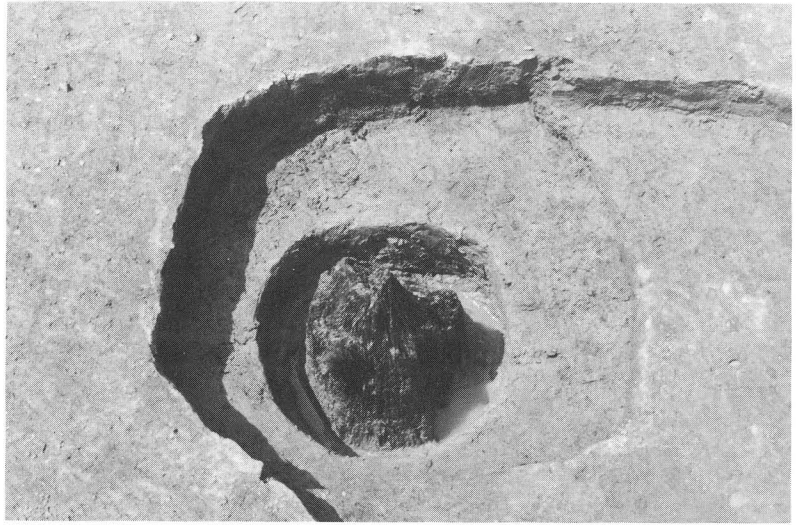


1. 南半部（北から）

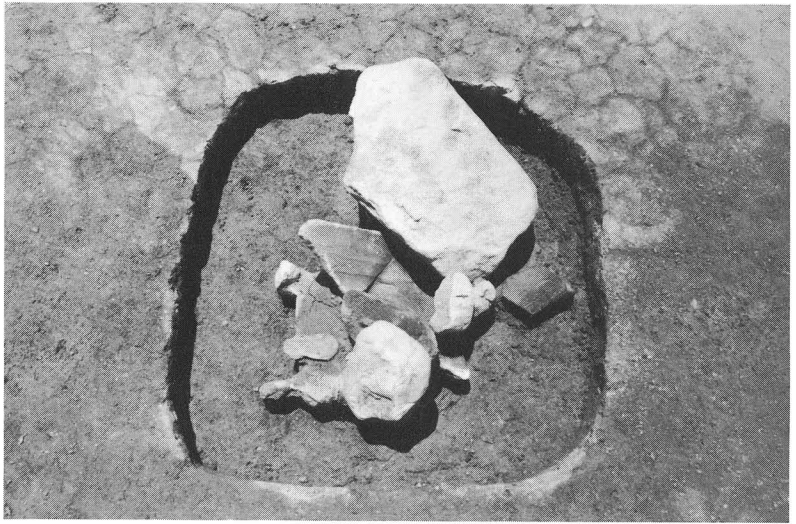


2. 北半部（南から）

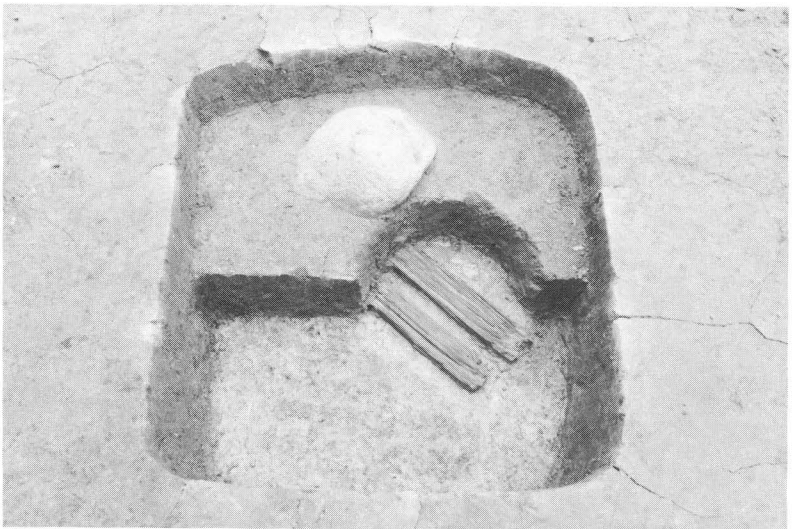




1. 柱根 (SA04)



2. 柱抜き痕跡 (SB06)



3. 礎板 (SB06)



平城京左京五条一坊七坪

発掘調査報告

例 言

1. 本書は、奈良市柏木町44-1、45-3番地の民家新築に伴う事前発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年度国庫補助金の交付を受けて実施した。
1. 発掘調査は、昭和57年2月5日から同年3月2日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財課が実施し、篠原豊一が調査を担当した。なお調査補助員としては西田辰博、谷沢仁、中野和浩、平田博幸、霜鳥純一、鈴木雅也（以上奈良大学）諸氏の参加があった。
1. 発掘調査にあたっては、土地所有者である福井正義氏の御理解と御協力を得た。記して感謝する。
1. 本書の執筆ならびに編集は篠原豊一が行なった。

目 次

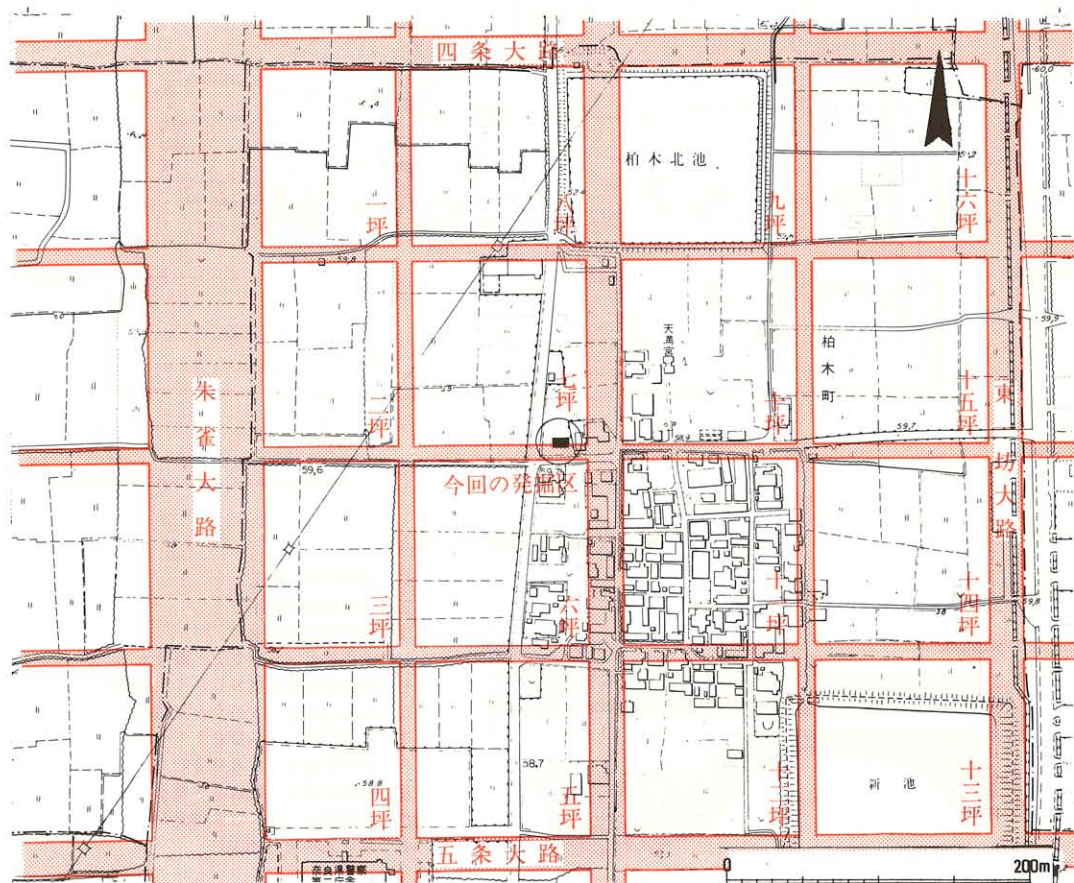
I はじめに	33
II 検出遺構	34
III 出土遺物	35
IV まとめ	40

I はじめに

今回の調査地は現在の行政区分では奈良市柏木町44-1、45-3番地である。調査は民家新築に伴う事前発掘調査として実施したものである。調査地は平城京の条坊では左京五条一坊七坪の南東隅にあたり、東一坊坊間路と五条条間路の交差する付近に推定されている。発掘区はこの交差点部分で東一坊坊間路西側溝、五条条間路北側溝の確認を目的とした、東西11m、南北7mの東西トレンチを設定したもので調査面積は約77㎡である。調査期間は昭和57年2月5日から同年3月2日までである。

これまでの周辺の調査例として、奈良国立文化財研究所が行なった平城京左京五条一坊四坪、五坪^{注)}の調査があるが、この調査では奈良時代の建物、井戸、溝などが数多く検出されている。

注) 奈良国立文化財研究所『昭和49年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1975

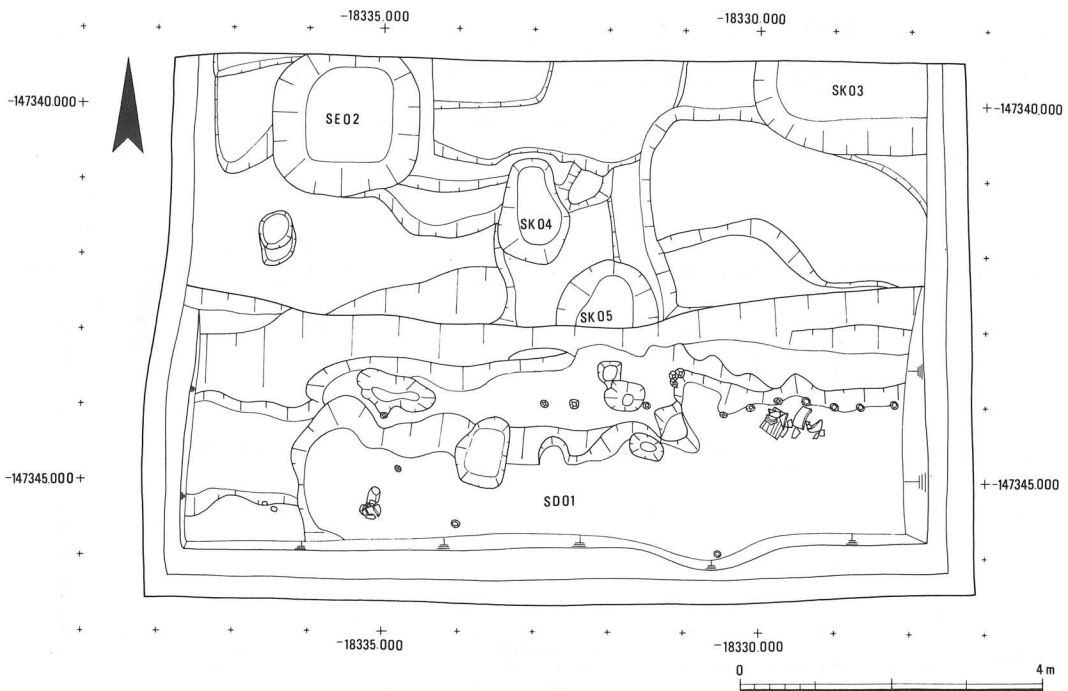


第 1 図 発掘区の位置とその周辺の条坊 (1/5000)

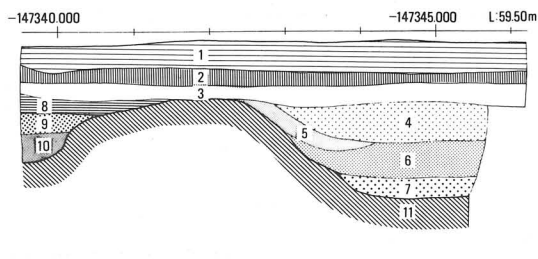
II 検出遺構

今回の調査で、検出した遺構は溝、井戸、土牆などである。発掘区内の土層堆積状態は地表面から約20cmにわたって耕土である黒色土が堆積し、その下層に暗灰褐色砂質土、淡灰褐色砂質土が堆積する。淡灰褐色砂質土は瓦器片などの遺物を含んでいる層である。地山は黄灰色粘土層で今回の遺構はすべてこの地山面で検出した。

SD 01 発掘区の南側で検出した東西溝で五条条間路北側溝と考えられる溝である。上面幅3.2



第 2 図 発掘区平面図 (1/100)



1. 黒灰色土 (耕土)
2. 暗灰褐色砂質土
3. 淡灰褐色砂質土
4. 灰色粘土 (SD 01 上層埋土)
5. 明黄色砂質土 (SD 01 上層埋土)
6. 灰褐色粘土 (SD 01 上層埋土)
7. 暗灰色砂土 (SD 01 下層埋土)
8. 淡灰色粘土 (SK 03 埋土)
9. 灰色砂質土 (SK 03 埋土)
10. 灰色粘土 SK 03 埋土)
11. 黄灰色粘土 (地山)

第 3 図 発掘区東壁堆積土層図 (1/100)

m以上、底部幅1.3m、深さ1.3mを測り、11m分を検出した。溝の底部は西から東へ傾斜しており、東から9m部分は一段低くなっている。その部分の北側には40cm間隔で木杭（径約5cm）が一行に並ぶ。この木杭列は溝の護岸用に用いられたものと考えられる。

溝内の土層堆積状態は大きく2層に区分できる。上層は灰色粘土、明黄色砂質土、灰褐色粘土である。下層は暗灰色砂土で、この層からは多量の土師器、須恵器が出土し、また最下層からは土器と共に、銭貨、金属製品なども出土した。

SE 02 発掘区の北西隅で検出した井戸である。隅丸方形の掘方（一辺2.0m、深さ2.5m）をもつ。井戸枠は抜き取られ残存しない。埋土から井戸枠の一部と考えられる角材が四本出土した。

SK 03 発掘区の北東隅で検出した土擴（東西2.8m、南北1.2m、深さ0.8m）である。

SK 04 発掘区の中央で検出した不整形の土擴（東西0.8m、南北1.4m、深さ0.3m）である。

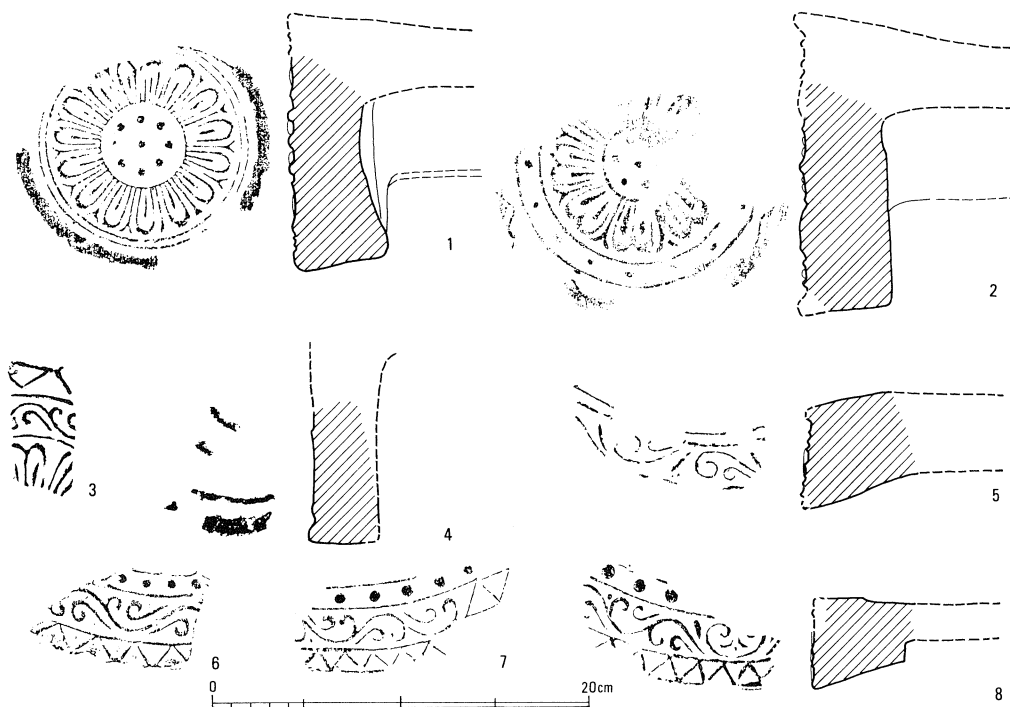
SK 05 発掘区の中央で検出した土擴（東西1.4m、南北1.0m、深さ0.6m）である。

Ⅲ 出土遺物

出土した遺物には弥生時代から中世にかけてのものがあるが、奈良時代の遺物が大部分をしめる。遺物のほとんどはS D01から出土したものである。以下、軒瓦、土器類、墨書土器、銭貨・金属製品、土製品・石製品の順に記述する。

軒瓦（第4図）発掘区内から軒丸瓦4点、軒平瓦7点が出土した。

1は単弁15弁蓮華文軒丸瓦。瓦当面の上端を欠損しており、中房は1+8の蓮子をもつもので蓮子は蓮弁より盛上る。蓮弁は細弁で子葉も細長く、間弁はYの字状に開く。外区には2本の圈線を巡らす。包含層出土。2は復弁8弁蓮華文軒丸瓦。瓦当面の上端を欠損する。内区中房は1+6の蓮子をもつもので、間弁と蓮弁の中央延長線上に珠文を割り付ける。周縁は線鋸齒文がわずかに残る。平城宮6311型式に属するものと考えられる。S D01出土。3は復弁8弁蓮華文軒丸瓦。瓦当面上半の一部が残る。外区に唐草文を巡らし、周縁に線鋸齒文を飾る。平城宮6348型式に属するものと考えられる。S D01出土。4は重圏文軒丸瓦。瓦当面向下半の一部が残る。三重の圈線がわずかに残る。包含層出土。5は均整唐草文軒平瓦。瓦当面向左半が残る。2重圏線縁で、曲線顎をもつもの。平城宮6663型式に属するものと考えられる。S D01出土。6は偏行唐草文軒平瓦。瓦当面向中央の一部が残る。外区上端には珠文を、下端には線鋸齒文を飾る。平城宮6640型式に属するものと考えられる。S D01出土。7・8は均整唐草文軒平瓦。瓦当面向って7は右半、8は左半が残る。中心飾りは逆C字状の中葉に短い基軸をもち、端部はハの字状にひろがる花頭をもつもの。唐草文は3回反転するものですべてにつばみをもつ。外区下端と右左両端には線鋸齒文、上端にはやや大ぶりの珠文を飾る。同型式の瓦が他に2点出土した。S D01出土。



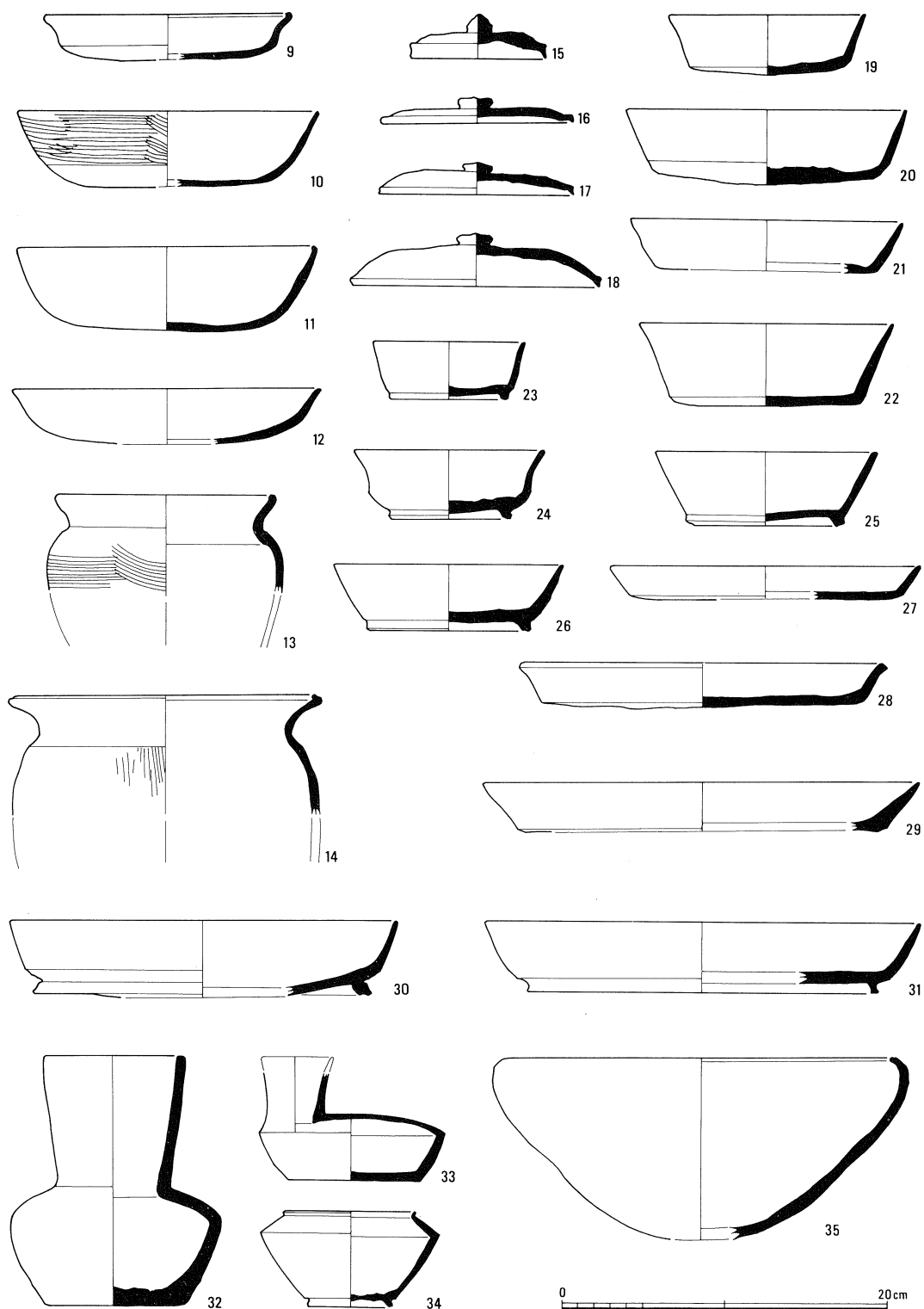
第 4 図 出土軒瓦 (1/4)

土器類 (第 5 図) 土器の大部分は S D 01 から出土したもので、弥生土器片、古墳時代の須恵器、奈良時代の土師器・須恵器などがある。奈良時代中期から後半にかけての土器が大部分をしめる。19・20 は S E 02 出土。他は S D 01 出土。

土師器には杯 A (9~11)、皿 A (12)、甕 A (13・14) などがある。9 は平底で、口縁部外面を強くよこなです。bo 手法。10 は平らな底部に外反する口縁部からなり、端部は丸くおさめる。b₁ 手法。11 の口縁端部は内側に巻き込む。12 は丸底ぎみの底部と外反する口縁部からなり、端部は外側に肥厚する。bo 手法。13・14 は内彎する胴部と外反する口縁部からなる。13 は口縁端部が上方に肥厚する。胴部外面は横方向のはげ目を、口縁部内外面にはよこなでを施す。

須恵器には蓋 (10~18)、杯 A (19~22)、杯 B (23~26)、皿 A (27・29)、皿 B (30・31)、皿 C (28)、壺 X (32)、平瓶 (33)、壺 E (34)、鉢 (35) などがある。15 は小型の蓋で宝珠状のつまみをもつもの。頂部は平坦で縁部は屈曲する。16 は転用硯。17・18 はやや丸みをおびる頂部と屈曲しない縁部とからなる。縁部と内面はロクロナデを施す。19~22 は平坦な底部と外反する口縁部からなり、端部は尖りぎみにおさめる。19・20 はやや深い器形である。20・22 の底部外面にはロクロケズリを施す。23~24 は杯 A に高台が付くもの。24 は佐波理器を模倣したもので口縁部下半はやや直立しながらたちあがり上半で外反する。端部は丸くおさめる。27・29 は平坦な底部に外反す口縁部をもち、端部は丸くおさめる。30・31 は皿 A に高台を付くもの。23 は平坦な底部に外彎ぎ

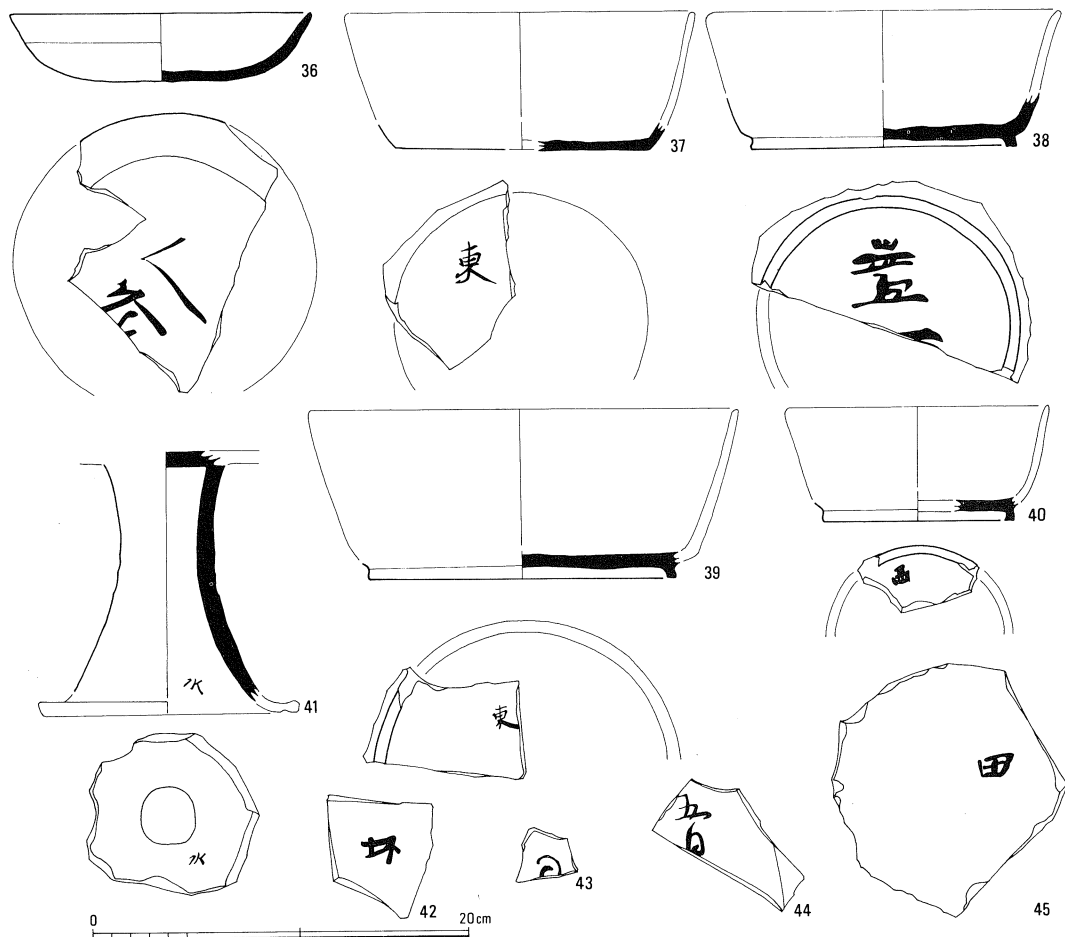
※) 土器の器種名および調整手法は、奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告 VII』に準拠した。



第 5 图 SD01・SE02 出土土器 (1/4)

みの口縁部をもち、端部は平坦におさめる。27~31の底部外面はロクロケズリ、内面と口縁部外面はロクロナデを施す。32は平坦な底部に外反する胴部をもち、肩部は直角に内折する。肩部の稜は丸みをおびる。口縁部は細長く直立させ、端部は平坦におさめる。肩部外面には自然釉が付着する。33は小型の平瓶で把手はつかない。平坦な底部と外反する体部からなり、上面は丸みをおびる。口縁部は直立し、体部は稜角をなす。34は底部に高台が付くもの。底部は平底で、胴部は平底で、胴部は外反する。肩部は直に内折させ、口縁部は上方に直立する。35は丸底の底部に外反する体部と内彎する口縁部からなる。端部は平坦におさめる。

墨書土器 (第6図) S D01から10点出土。土師器碗D (36) は平坦な底部と外反する口縁部からなり、端部は丸くおさめる。e o 手法。底部外面に「人參」と墨書がある。須恵器杯A (37) の底部外面には「東」と墨書がある。須恵器杯B (38~40) で底部外面に墨書がある。38は2字の墨書が残るが判読できない。39は「東」、40は「西」と墨書がある。須恵器高杯 (41) で脚部内面に

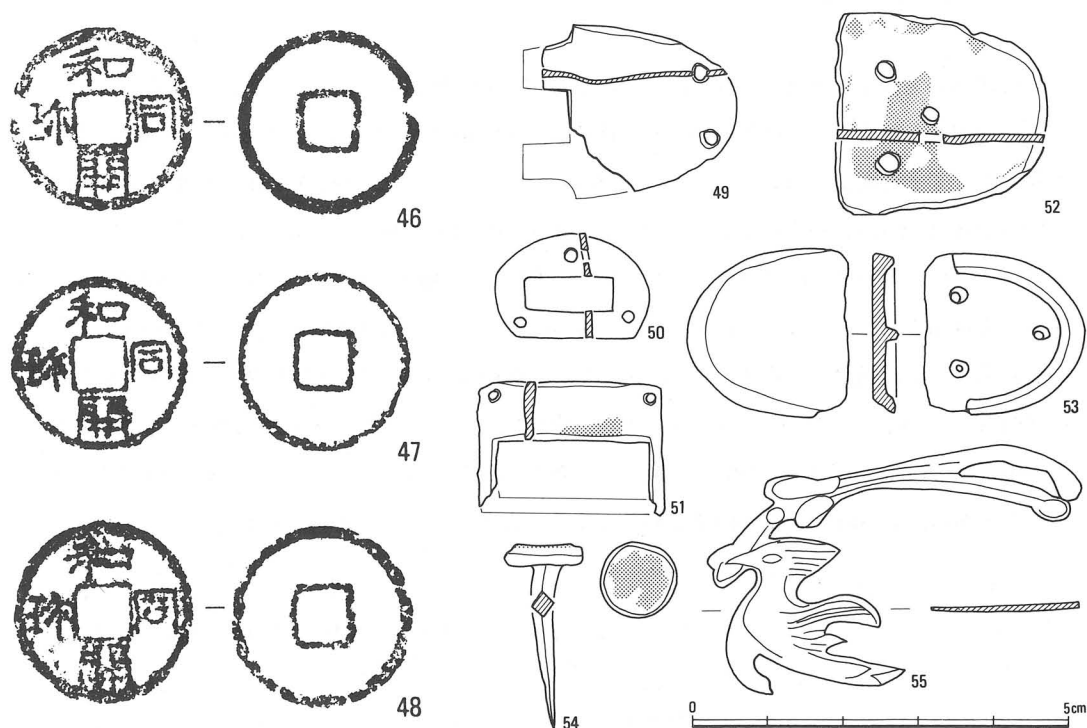


第 6 図 墨書土器 (1/4)

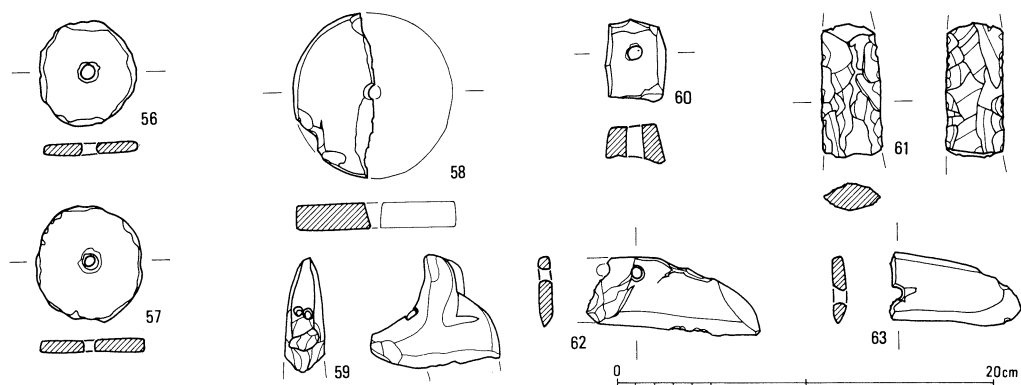
「水」と墨書がある。42は厚手の須恵器片で外面に「坏」と墨書がある。43は薄手の須恵器片で内面に一回転する渦巻状の墨書がある。44は須恵器杯Aの底部で外面に「五日」と墨書があり、内面に墨が付着する。45は須恵器片で外面に「田」と墨書がある。

銭貨・金属製品（第7図） S D01から和銅開称（41～48）、帯金具（49～53）、銅鋌（54）金銅製飾金具（55）などが出土した。

和銅開称は総数6点、そのうち完形は4点である。すべて鑄上げはよく鑄文は全体に角ばり、画線は細く、開を「開」につくる特徴をもつ。46は1.9g、47は1.8g、48は2.2gを量る。帯金具には帯の絞具（49）、丸柄（50）、巡方（51）、鉈尾（52・53）がある。49は外枠を欠損する二鋌留の板金具片。重さ21gを量る。50は三鋌留の裏金具で楕円形の下辺を直截した形状を呈する。重さ1.0gを量る。下部を欠損する裏金具で、上端2ヶ所に鋌穴がある。表面には漆膜が残る。重さ1.4gを量る。52は完形の裏金具で、平面形を半隋円形につくる。3ヶ所に鋌穴がある。表面には漆膜が残る。重さ4.6gを量る。53は三鋌留の表金具である。鋌足の先端を欠き、端部内縁に断面三角形の稜もつ。重さ3.7gを量る。54は円形の頭と断面四角形の脚を一体に銭出した飾鋌である。頭表面に漆膜が残る。頭径1.1cm、長さ2.0cm、重さ1.6gを測る。55は薄い板状の銅板を花喰い鳥型に型ぬきしたもの。目、口ばし、羽、枝などを線刻によって描いている。表面の一部には僅かな鍍金痕跡をとどめている。厚さ0.1cm、重さ2.4gを測る。



第7図 銭貨・金属製品（1/1）



第 8 図 土製品・石製品 (1/4)

土製品・石製品 (第 8 図) 土製紡錘車 (56・58)、円板形土製品 (58)、土馬 (59)、砥石 (60)、石槍 (61)、石包丁 (62・63)、石鏃などがある。61・63は包含層、他は S D 01 出土。

紡錘車は 3 点出土し、完形は 2 点である。土師器片を円板状に打ち欠き、中央に小孔を穿つもの。56は 29.5g、57は 20.5g を量る。58は軟質の須恵器片を円板状に研磨し、中央に小孔を穿つ。60は黄灰色砂岩系の砥石で上端の一部が残り、小孔を穿つ。61はサヌカイト製の石槍。62・63 は縁泥変岩製の石包丁。

IV ま と め

今回の調査で検出した溝 S D 01 が平城京の条坊区画の中で占める位置について考えてみる。S D 01 心は国土方眼位を介して朱雀門心から南に 1,350.110m の位置にある。しかし、平城京の条坊は朱雀大路で国土方眼位に対し、北で西へ $0^{\circ} 15' 41''$ 振れている。この振れで修正を加えると両者心々間の距離は 1,351.050m となる。ここで S D 01 を五条条間路北側溝と仮定すると、朱雀門心から五条条間路心までの計画尺は 4,580 尺 (二条大路 $1/2$ 幅 + 2 条幅 + 2 坪幅) となる。条間路の幅は今までの発掘調査で 2 丈と 3 丈の幅をもつものが知られており、五条条間路幅を 2 丈と仮定した場合の北側溝までの計画尺は 4,570 尺、3 丈の場合は 4,565 尺となる。先の実距離を計画尺で除すると 0.2954m (2 丈幅)、0.2959m (3 丈幅) という単位尺となる。これまでの発掘調査から得られた造営単位尺は 0.2950~0.2960m の範囲に落ち着く傾向にあり、今回の単位尺もこの範囲内におさまる。このことから、S D 01 を五条条間路北側溝とすることが妥当であると考えられる。

地 点 名	X	Y	備 考
平城宮朱雀門心	- 145,994.490	- 18,586.310	平城宮 16 次調査『平城宮発掘調査報告 IX』
五条条間路北側溝心	- 147,334.600	- 18,337.000	今回の調査

第 1 表 方位計測座標表

注) 奈良市『平城京朱雀大路発掘報告』1974



1. 発掘区全景（東から）



2. 井戸SE02（南から）



平城京左京六条二坊三坪

発掘調査報告

例 言

1. 本書は、奈良市八条町三道寺において実施した、奈良市消防本部庁舎新設に伴う事前発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は昭和56年12月3日から昭和57年1月30日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財課が行い、現地を森下恵介が担当した。
1. 発掘調査にあたっては、調査補助員として、霜鳥純一、長沢豊文、橋本雅裕、長谷川一英、服部芳人をはじめとした奈良大学学生諸氏の参加があった。
1. 本書の作成に伴う遺物整理、図面作成にあたっては、行天優貴子（四天王寺女子大学卒業生）、奈良俊哉（奈良大学学生）の各氏の協力を得た。
1. 本書の執筆ならびに編集は、森下恵介が行った。

目 次

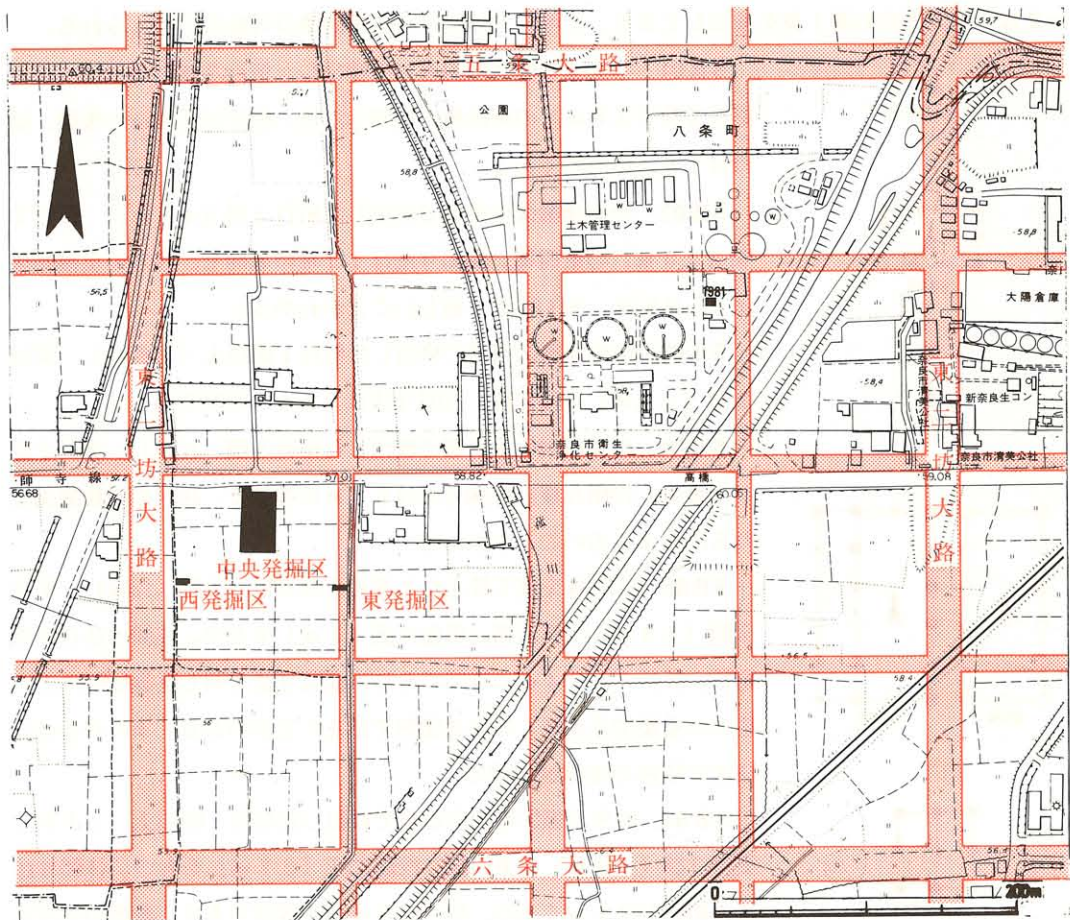
I	はじめに	45
II	検出遺構	46
III	出土遺物	49
IV	まとめ	51

I はじめに

今回の調査は、奈良市が計画した奈良市消防本部建設に伴い、その予定地について行った事前発掘調査である。

調査地は、奈良市八条町字三道寺の水田であり、平城京の条坊では、左京六条二坊三坪に相当する。消防庁舎の用地は、この三坪に相当する水田のうち、坪の北側約 $\frac{1}{2}$ を占めるものであり、六条条間路の位置を踏襲する県道京終停車場薬師寺線がその北側を東西に走っている。

発掘調査は、昭和56年12月3日より昭和57年1月30日にかけて実施した。発掘面積は 1080m^2 である。発掘区は、庁舎建物予定位置を考慮に入れ、敷地のほぼ中央に中央発掘区として、南北 40m 、東西 25m の規模で設定し、敷地の南寄りの東西に $4\text{m} \times 10\text{m}$ のトレンチ（東発掘区、西発掘区）をこれに加えた。

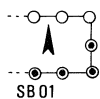


第 1 図 発掘区の位置と周辺の条坊 (1/5000)

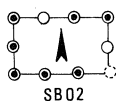
II 検出遺構

中央発掘区の基本的な堆積土層は、旧耕土の下暗灰色粘質土、淡青灰色粘質土層があり、さらにこの下層に淡黄褐色粘質土および黄褐色粘質土の堆積がある。遺構の検出は黄褐色粘質土層の上面で行った。しかしながら、その上層の淡黄褐色粘質土層中には、遺物の包含は少なく、遺構面は全体にかなりの削平を受けていることが考えられる。東発掘区における土層の状況は、ほぼ中央発掘区と同様であるが、西発掘区においては、淡青灰色粘質土の下層にはその全域に砂層が広がっており、遺構面は検出できなかった。

検出した遺構は、中央発掘区においては、建物9棟、柱列3条、溝2条、土壇、井戸などである。建物、柱列は掘立柱によるものであり、井戸SE01は掘形のみで井戸枠の残存もなく、出土遺物もほとんどない。また溝2条については、奈良時代以前の自然流路と考えられる。なお東発掘区においては、南北方向の溝1条を検出しており、三坪、六坪間の小路西側溝の可能性が考えられる。



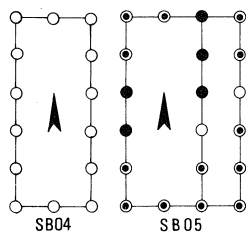
SB01 中央発掘区北部西寄り検出した桁行2間以上(4.2m)、梁行2間(3.6m)の東西棟。柱間寸法は、桁行が2.1mの等間、梁行は1.8mの等間である。



SB02 中央発掘区中央部で検出した桁行3間(4.5m)、梁行2間(3.0m)の東西棟。柱間寸法は1.5mの等間で、柱穴の重複関係より、SB04、SB05より新しいことがわかる。

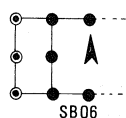


SB03 中央発掘区南端で検出した桁行1間以上(1.8m)、梁行2間(3.6m)の南北棟。柱間寸法は1.8mの等間である。



SB04 中央発掘区中央部で検出した桁行5間(12m)、梁行2間(4.8m)の南北棟。柱間寸法は2.4mの等間で、柱穴の重複関係よりSB05より古いことがわかる。

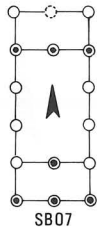
SB05 SB04を建て替えたと考えられる桁行5間(12m)、梁行2間(4.8m)の南北棟。東面に庇(3m)をもつ。柱間寸法は身舎桁行、梁行とも2.4mの等間であり、柱間寸法も同じ建物SB04との柱穴の重複関係よりこの後身建物であることがわかる。また身舎の5柱穴に柱根の残存があった。



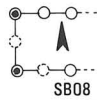
SB06 中央発掘区南端東寄り検出した桁行1間以上(2.1m)、梁行2間(4.8m)の東西棟。西面に庇(2.7m)をもつ。柱間寸法は、桁行が2.1mであり、梁行は2.4mの等間である。身舎の柱穴すべてに柱根の残存があった。



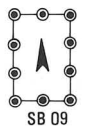
第 2 図 中央発掘区検出遺構配置図 (1/250)



SB07 中央発掘区西寄りで検出した桁行5間(11.4m)、梁行2間(4.8m)の南北棟。南北それぞれ2番めの柱筋に間仕切りの柱穴を設け、建物を中央3間と南北両側の1間とに分ける。柱間寸法は、梁行は2.4mの等間であるが、桁行は、北側1間のみ1.8mを測り、他は2.4mの等間である。柱列SA01~03はこの建物と柱筋が揃っており、同時期の存在が考えられる。



SB08 中央発掘区北寄りで検出した桁行2間以上(4.2m)の建物で梁行は2間(3.6m)と考えられる東西棟である。柱間寸法は、桁行が2.1m、梁行が1.8mの等間と考えられる。



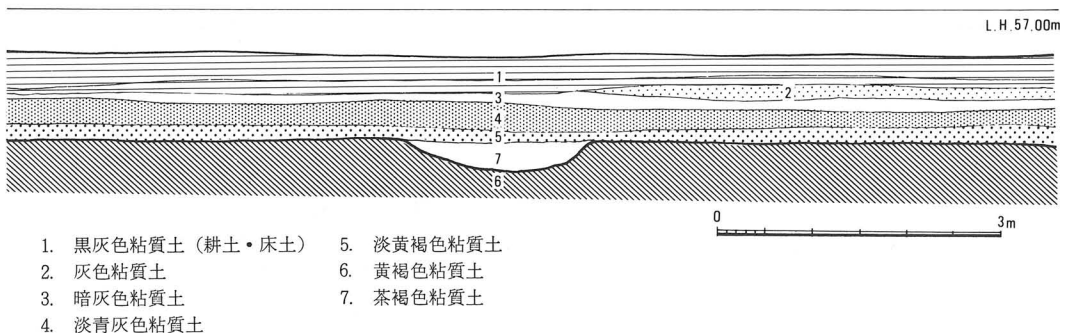
SB09 中央発掘区の中央やや東寄りで検出した桁行3間(5.4m)、梁行2間(4.2m)の南北棟。柱間寸法は桁行が1.8mの等間、梁行が2.1mの等間である。柱穴の重複関係よりSB05より新しいことがわかる。

SA01 中央発掘区西北で検出した南北方向の塀。1間(2.7m)を検出。柱筋が建物SB07と揃っており、同時期と考えられる。

SA02 中央発掘区西北、SB07の北側2.7m隔てて検出した東西方向の塀。1間(1.8m)を検出。SA01と同じく建物SA07と柱筋が揃うことから同時期と考えられる。

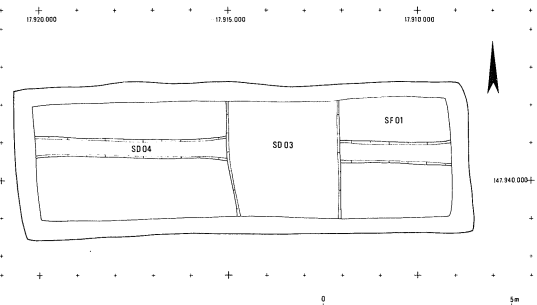
SA03 中央発掘区、建物SB07の東側柱列の南につづく南北方向の塀。1間(2.7m)を検出したが、建物SB07の南庇柱との間も2.7mを測り、建物SB07にとりついていたとも考えられる。

SE01 中央発掘区東南、建物SB04の東側で検出した方形掘形の井戸(一辺約1.5m、深さ約1m)である。井戸枠は遺存しておらず、遺物もほとんど出土しなかった。



第 3 図 中央発掘区南壁堆積土層図(1/80)

SK01 中央発掘区西北で検出した長方形の土塼（1.5m×1m、深さ約80cm）、中央に円形の土塼を二段掘りする。曲物を据えつけた井戸の可能性も考えられる。奈良時代の土師器が若干出土した。なお土塼としては他に、4ヶ所の方形の土塼（SK02～06）を検出したがいずれも出土遺物はほとんどない。



第4図 東発掘区検出遺構図（1/80）

SD01 中央発掘区で検出した斜行する流路（幅4～1m、深さ約80cm）。砂層が堆積し出土遺物もほとんどない。これに平行して検出した流路SD02と同じく、奈良時代以前の流路と考えられる。

SD03 東発掘区で検出した南北方向の溝（幅約3m、深さ約20cm）。位置関係から三坪～六坪間の小路西側溝と考えられ、奈良時代の土器が若干出土した。なおこれに直交して検出された溝SD04は、耕作に伴うものと考えられる。

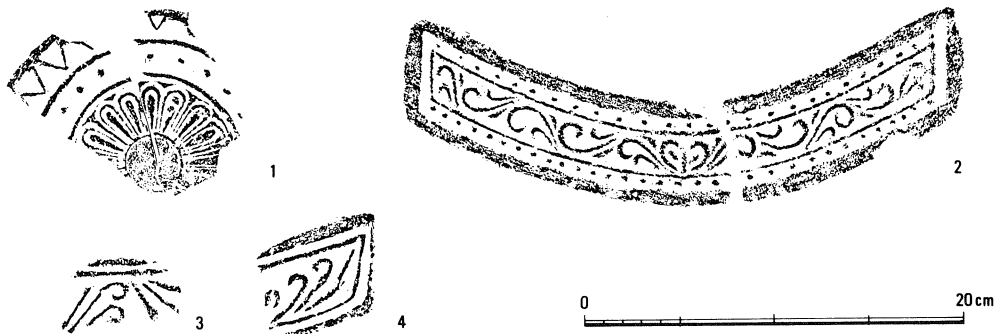
Ⅲ 出土遺物

出土遺物は少なく、そのほとんどが、遺構面を覆う淡黄褐色粘質土層より出土したものである。

1. 瓦類

瓦類は、丸瓦、平瓦の他、軒丸瓦1点、軒平瓦1点が出土した。

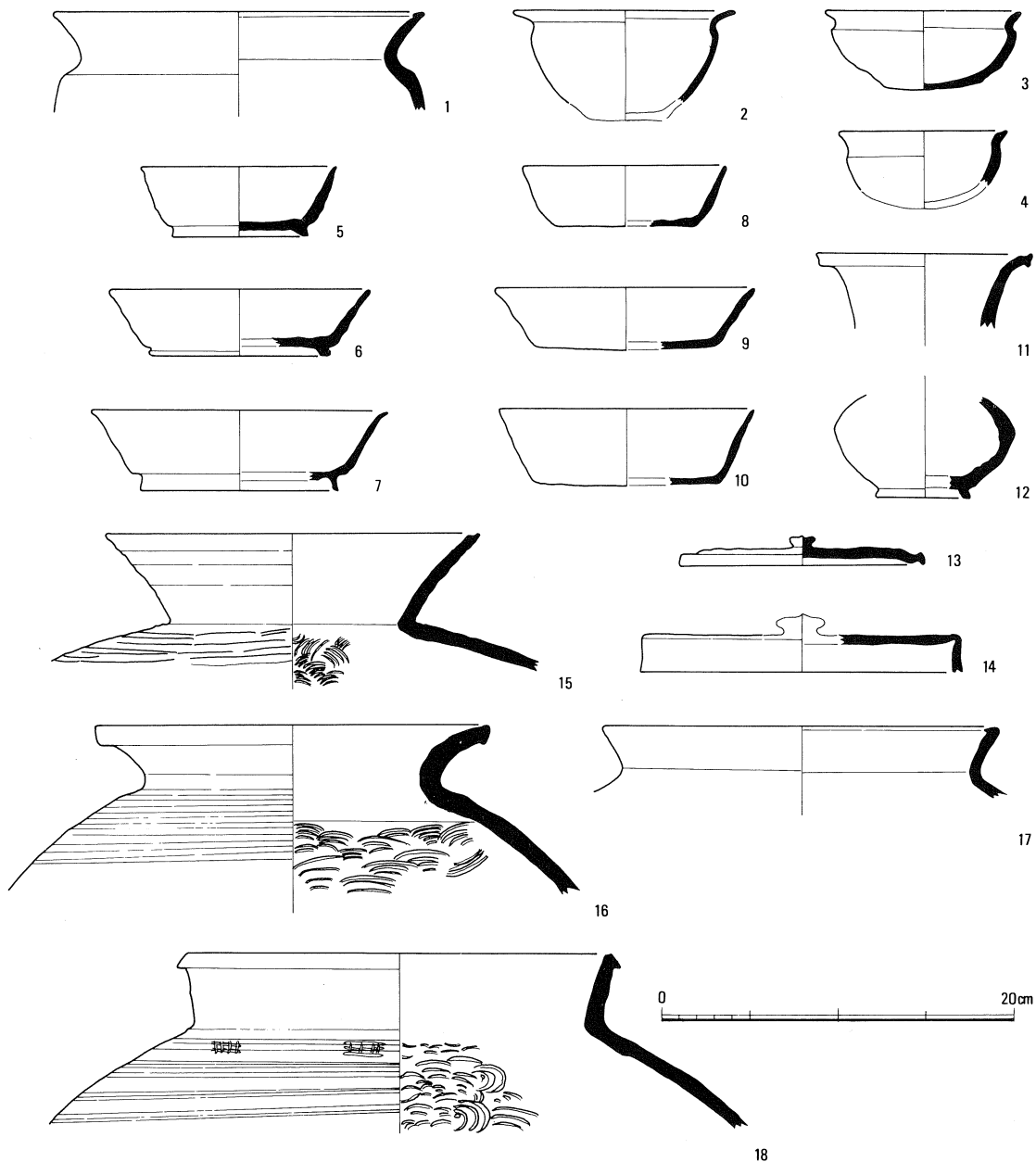
1は、内区に複弁8弁蓮華文をおく軒丸瓦（平城宮6285-A型式）であり、法華寺、歌姫西瓦窯の出土例が知られている。2は、均整唐草文軒平瓦（平城宮6721-D型式）であり、建物SB05柱穴内より出土した。5回反転する唐草文、上下外区の細かな珠文が特徴的である。3・4は、いずれも外区がなく、内区を画する界線の外に素文の外縁がつけられる。3は平城宮に出土例がみられる（平城宮6702-G型式）が、4は、第3単位となる文様が上向きに巻き込んでおり、出土例は知られていない。



第5図 出土軒丸瓦・軒平瓦拓影（1/4）

2. 土器類

土器類としては、土師器には、甕A（1・17）、壺B（2～4）がある。須恵器には杯B（5～7）杯A（8～10）、壺（11・12）、杯B蓋（13）、壺A蓋（14）、甕A（15・16・18）がある。ほとんどが包含層より出土したもので、遺構に伴う良好な資料は得られなかった。

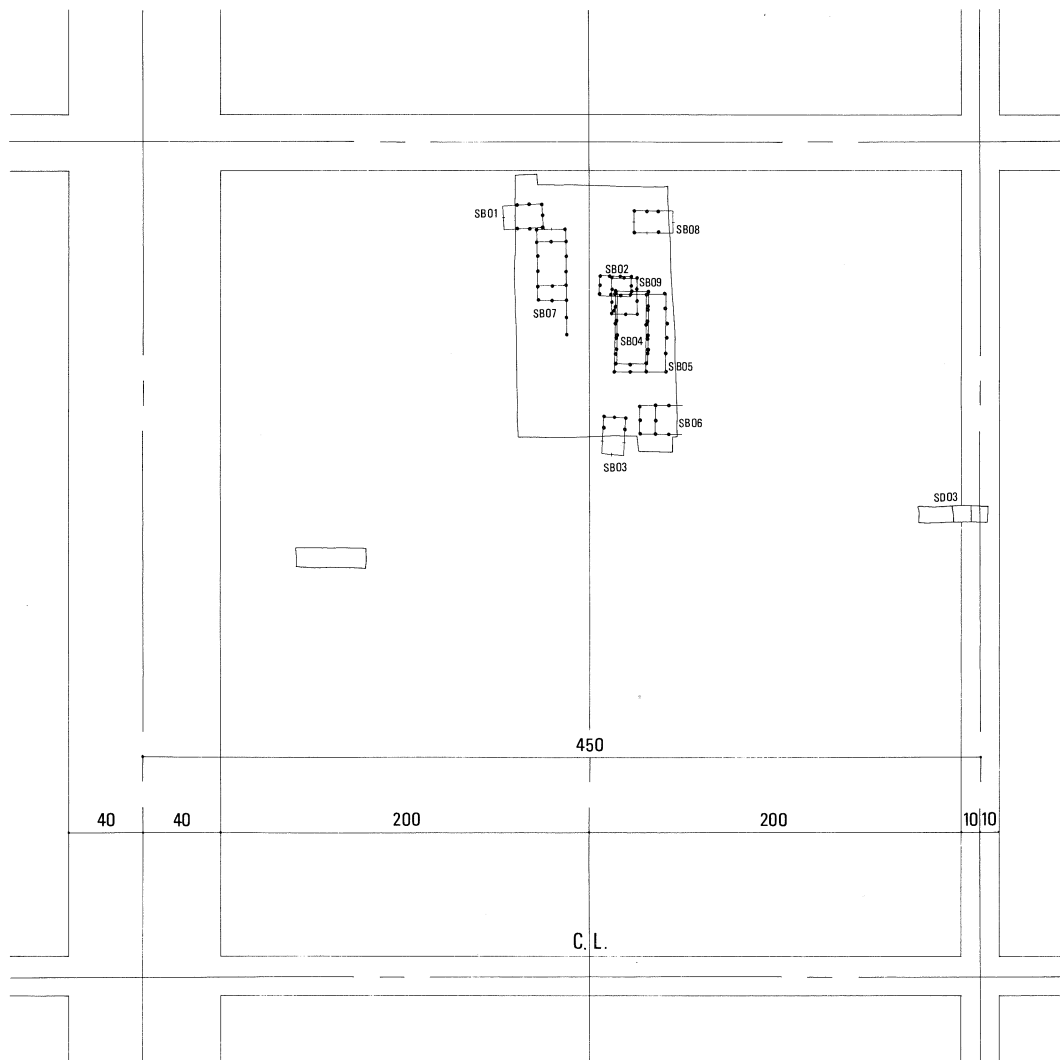


第 6 図 出土土器 (1/4)

IV ま と め

今回の調査で検出した遺構は、SD01・SD02を除き、奈良時代に属するものと考えられる。また建物の重複関係やその位置関係から少なくとも4期以上の区分が可能である。そこで、今回の調査区が三坪内に占める位置について検討を加えた上で、検出した遺構位置関係、時期についてふれまとめとする。

東発掘区で検出した溝SD03は三坪、六坪間の小路西側溝に相当し、その東側は小路路面SF01と考えられる。今回の調査ではその幅員を確認することはできなかったが、この小路は、左京三条二坊二坪、七坪間で検出されている。その小路心を使って朱雀大路で求められた平城京の造営



第 7 図 左京六条二坊三坪占地概念図

方位の振れN15'41"Wをとり、今回の調査区での推定小路心を求めると、この推定心から溝SD03心までの距離は約3.0mとなり、その倍数約6mが、小路側溝心々間の距離となる。この小路は左京三条二坊二坪、七坪間では、路面幅で20尺の幅員が確認されているが、今回の調査地六条二坊付近では、側溝心々間で20尺の規模をもっていたものと考えておきたい。また、平城宮朱雀門心と今回検出した小路西側溝心との東西距離は、南北条坊の振れの修正を加えると663.037mとなる。朱雀門心と二坊三坪、六坪間の小路心までの造営計画距離は1300尺（1坊幅）+450尺（1坪幅）=2250尺であり、さらに10尺（小路½幅）を減じた距離2240尺が朱雀門心と小路西側溝心の距離と考えられることから、この場合、0.2959mといった単位尺が求められる。

三坪の西辺の東一坊大路は、発掘調査によって側溝心々間80尺の幅員をもつことが明らかにされているが、北辺の六条条間路および南辺の三坪、四坪間の小路についてはその幅員を確定することができない。これまでの他の発掘調査の成果をもとに条間路幅員30尺、小路20尺と仮定し、三坪を囲む条坊路を復元すると、今回調査地区のうち中央発掘区は第6図に示すように三坪の北半中央に位置することがわかる。そこで中央発掘区を検出した遺構の位置関係をみると三坪の東西幅400尺を二等分する線は建物SB07とSB04（SB05）の間に位置する。この線上に、坪内を分割する塀、溝等の施設は検出できなかったが、その西側に建物SB07東側柱列と柱筋を揃える塀SA03が位置し、同じ宅地でありながらその利用において東西の二分を意識していたとも考えられなくはない。遺構の時期区分については、出土遺物が少なく、時期が限定される資料はないが、重複関係、配置状況から奈良時代については以下の4期に区分できよう。

A期 建物SB02など小規模な建物が営まれる時期、SB02のみがその重複関係より最も古いことがわかるが、他は時期を決定できない。しかしSB02は建物方位が北で東に振れ、同様の振れをもつ建物SB03が同じ時期に属するものと考えられる。

B1期 建物SB07・SB04などの時期、比較的大きな南北棟が出現するのが特徴的である。塀SA01～03が建物SB07と関連性をもってつくられる。

B2期 建物SB04が東面庇をもつ建物SB05に建て替えられる。またその南側に東西棟SB06が建てられる。

C期 B期の建物はとりこわされ、規模の小さな南北棟SB09のみがこの時期に属す。

以上にのべた建物の他に、建物SB01、SB08や、土塼、井戸などは奈良時代のものと考えられるが、出土遺物も少なく、重複関係もないことから、現状ではその時期区分は困難である。

地 点 名	X	Y	備 考
平城宮朱雀門心	-145,944.490	-18,586.310	平城宮16次調査
左京三条二坊二・七坪境小路心	-146,210.000	-17,919.325	平城宮112-3次調査
左京六条二坊三・六坪境小路西側溝心	-147,940.000	-17,914.390	今回の調査

注1) 奈良国立文化財研究所『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1979

注2) 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報1967』1967



发掘区全景航空写真

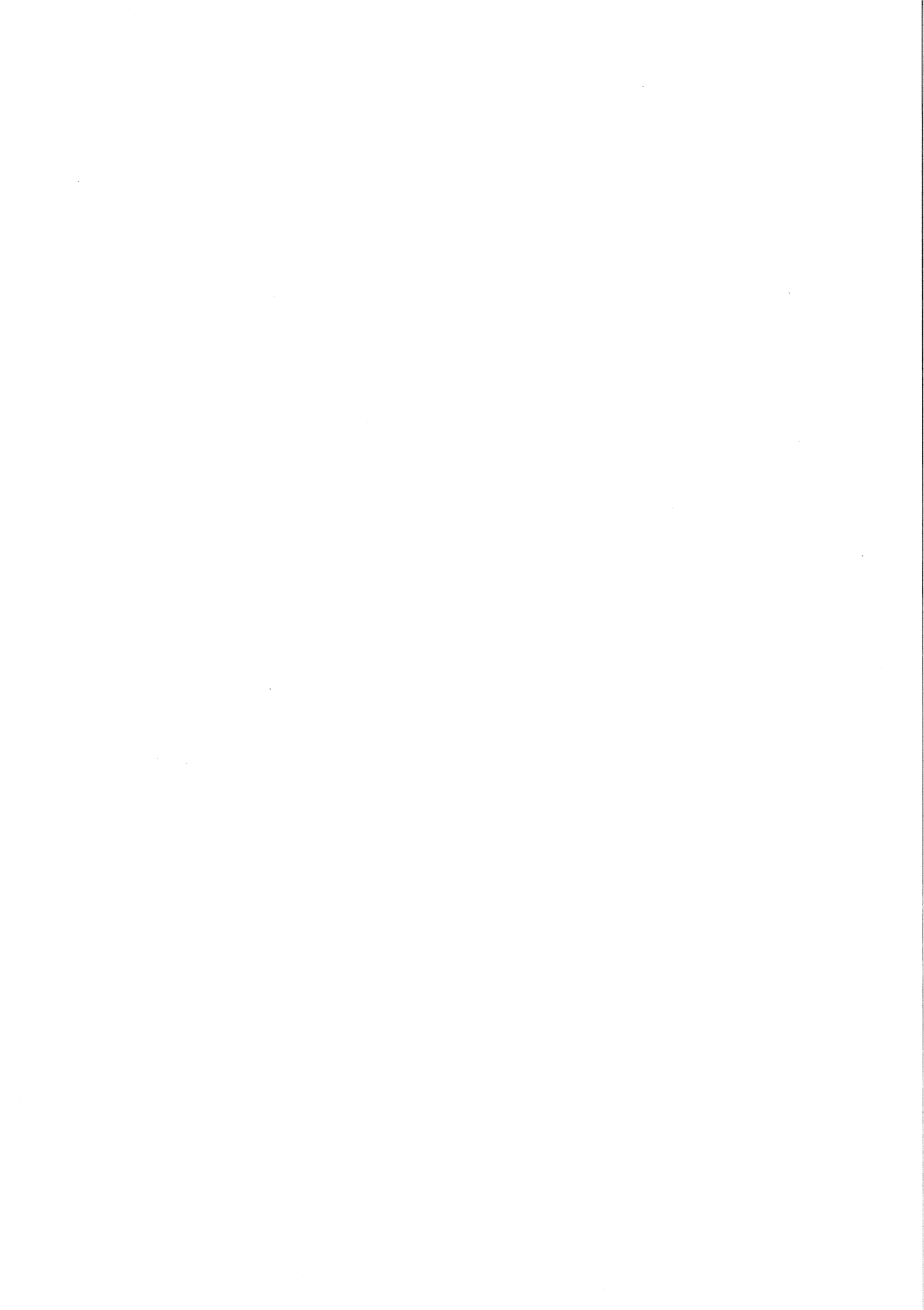




1. 中央発掘区全景（南から）

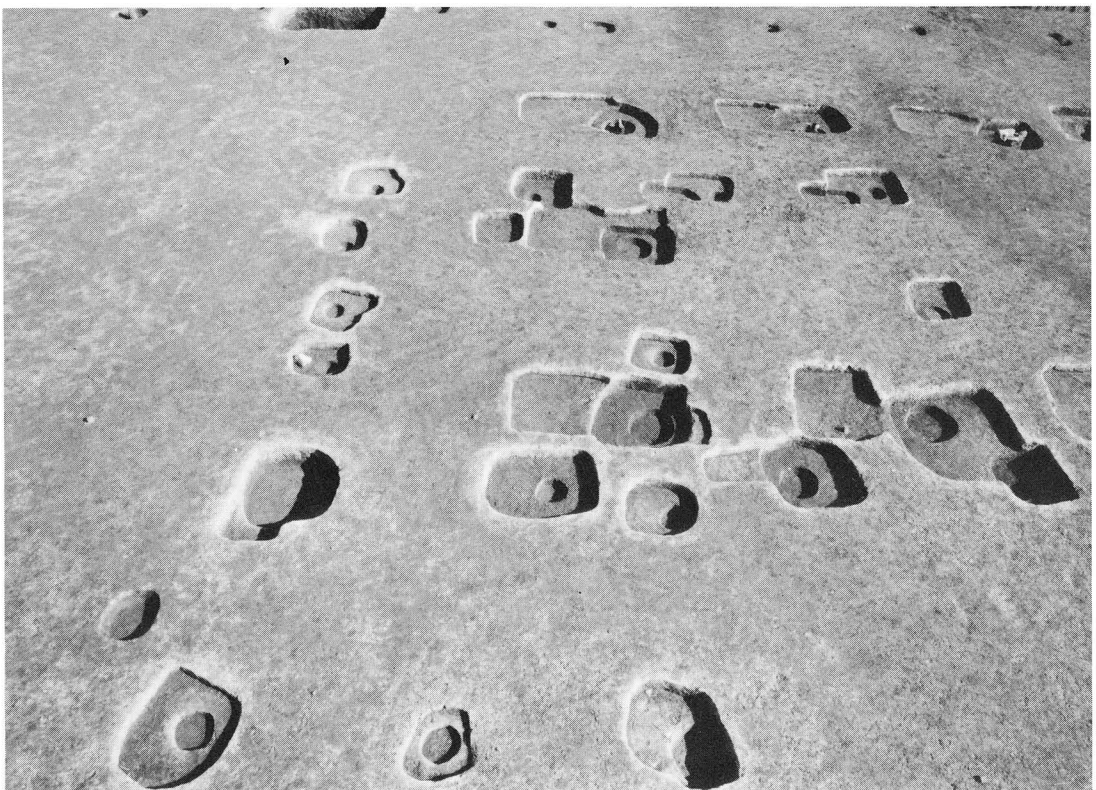


2. 建物S B04・S B05（北から）

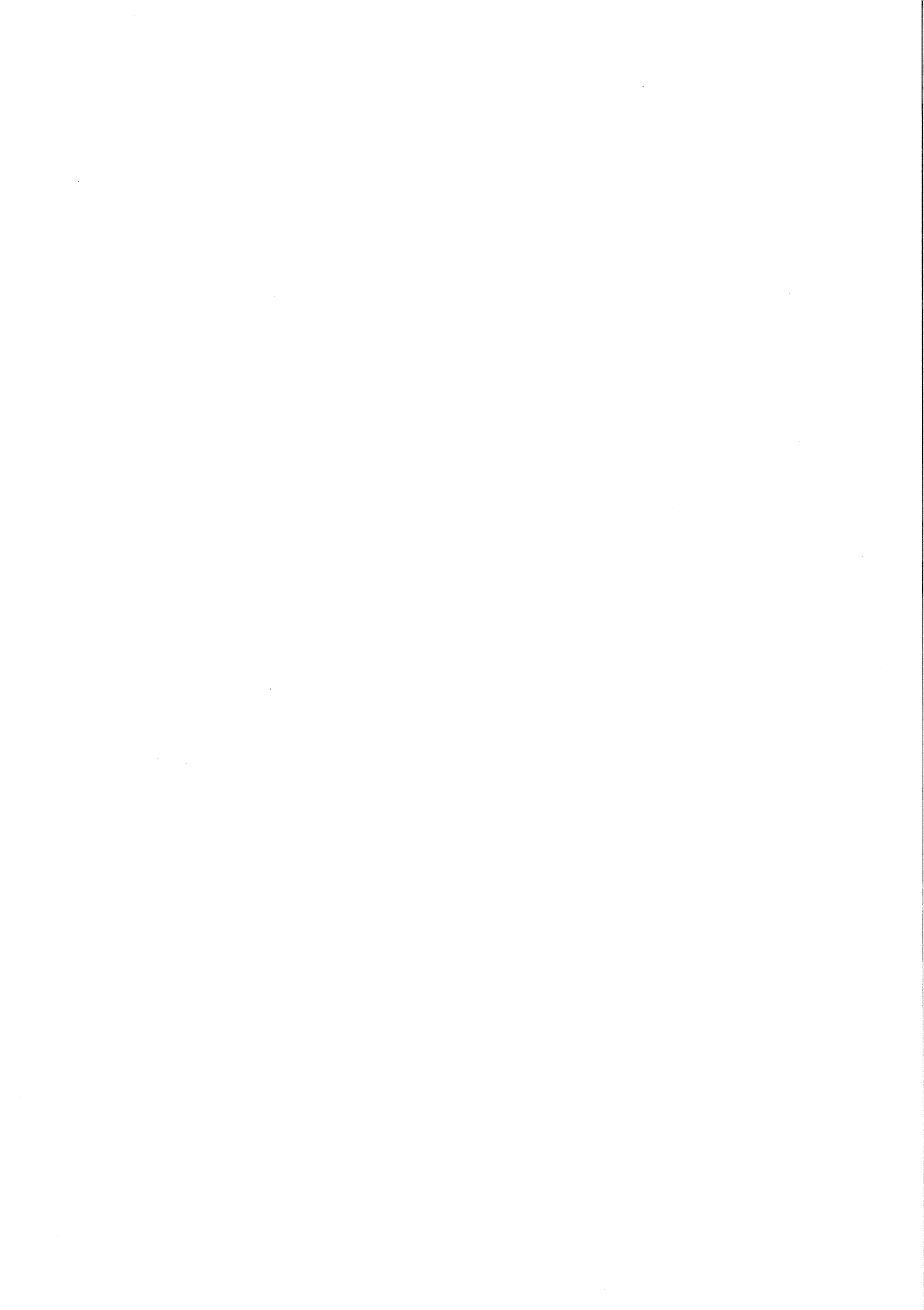


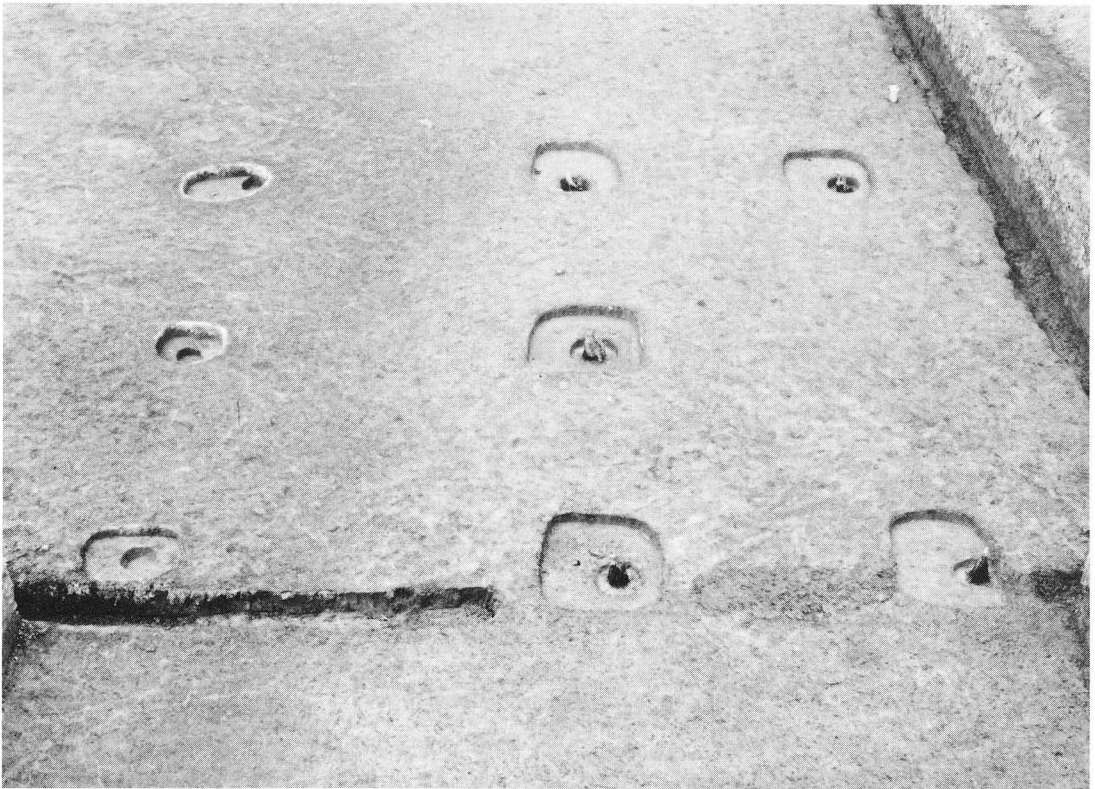


1. 建物SB07 (北から)

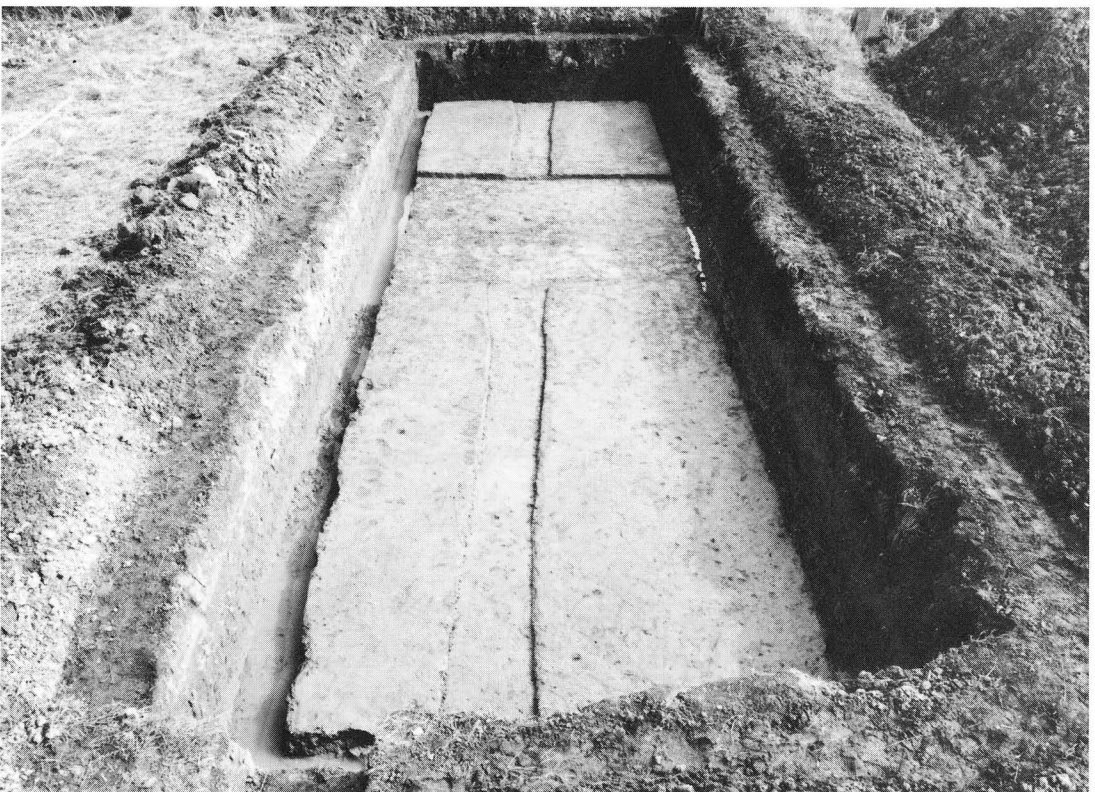


2. 建物SB02・SB09 (西から)

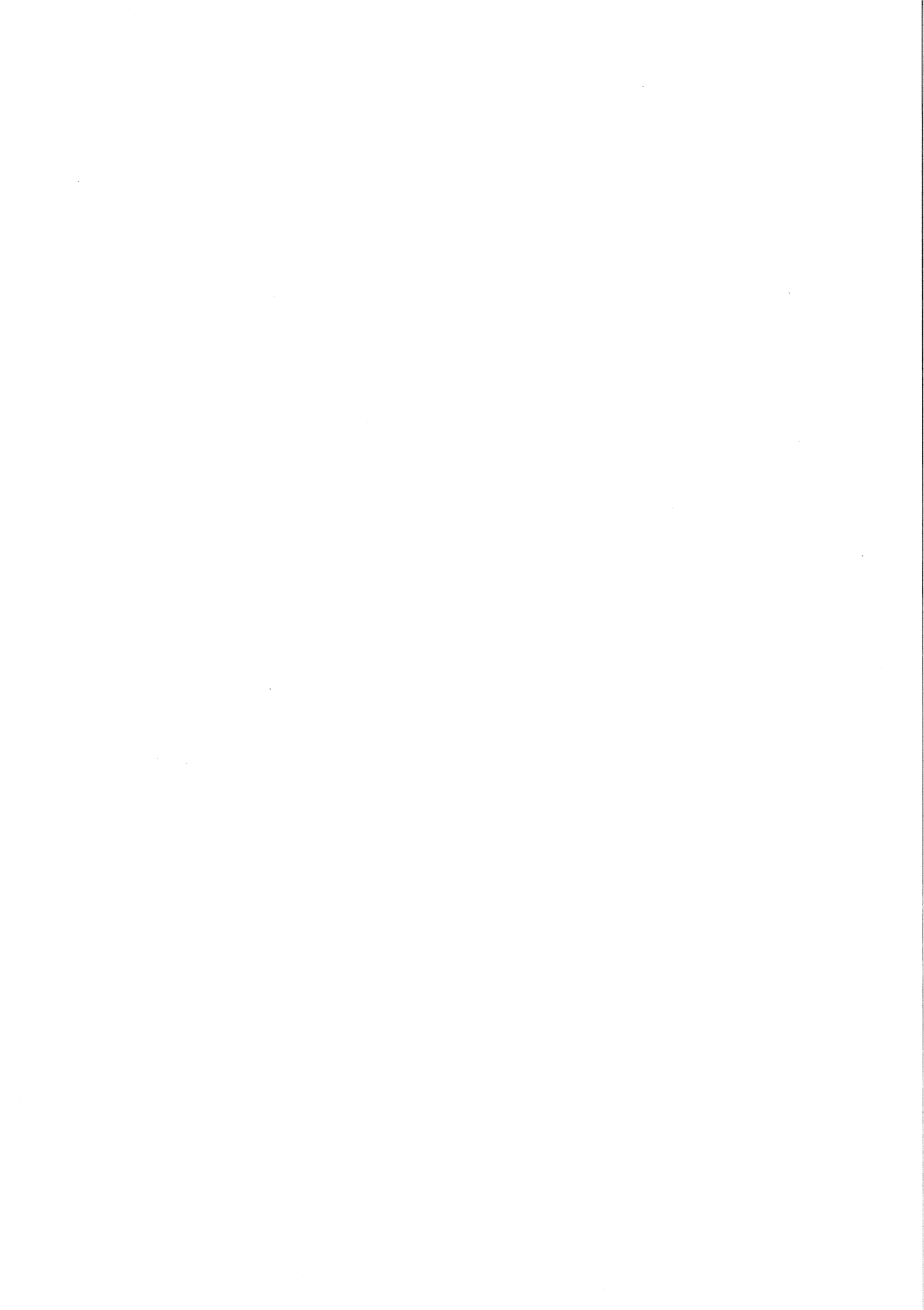




1. 建物SB06（南から）



2. 東発掘区全景（西から）



平城京左京八条二坊二・四坪

発掘調査報告

例 言

1. 本書は、同和対策事業として奈良市杏町地内の2箇所で計画された杏中町隣保館、杏南町隣保館建設に伴う事前発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は、杏中町隣保館建設予定地（奈良市杏中町401-1番地）が昭和56年7月11日から同年8月24日にかけて実施し、杏南町隣保館建設予定地（奈良市杏南町79-1、80-1番地）が昭和56年7月13日から同年8月26日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財課が行ない、担当者は目次に明らかにした。

なお調査補助員として奈良大学および花園大学学生諸氏の参加、協力があつた。

1. 発掘調査にあたっては、下記の方々により御指導、御協力を得た記して感謝したい。
花園大学・伊達宗泰 奈良国立文化財研究所・伊東太作
1. 本書の執筆は、調査担当者が分担して行ない、文積は目次に記した。また全体の編集は、担当者との討議をもとに西崎卓哉が行なつた。

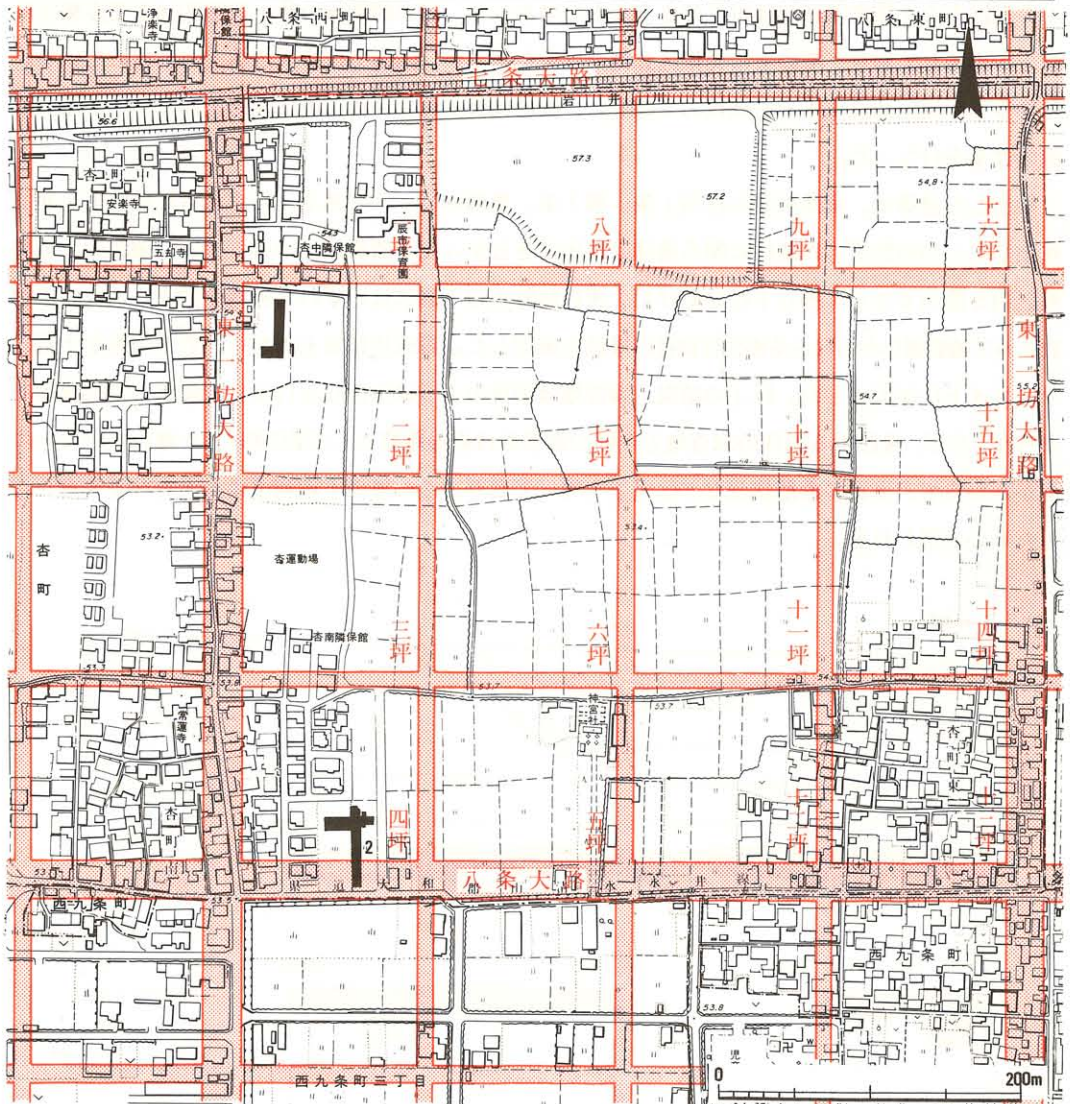
目 次

I はじめに	(篠原豊一) ... 63
II 平城京左京八条二坊二坪の調査	(森下恵介) ... 64
III 平城京左京八条二坊四坪の調査	(篠原豊一) ... 65

I はじめに

奈良市は、同和対策事業の一環として奈良市杏町地内に杏中町隣保館、杏南町隣保館の建設を計画した。建設予定地は平城京の条坊では、左京八条二坊に相当するが、そのうち杏中町隣保館は二坪に、杏南町隣保館は四坪に位置する。そのため奈良市教育委員会、同和対策課、建築課が協議を行った結果、奈良市教育委員会文化財課が事前発掘調査を実施することになった。

	名 称	調 査 地	調 査 期 間
1	杏中町隣保館建設予定地	奈良市杏中町 401-1 番地	昭和56年 7月11日～8月24日
2	杏南町隣保館建設予定地	奈良市杏南町79-1、80-1 番地	昭和56年 7月13日～8月26日



第 1 図 発掘区の位置と周辺の条坊 (1/5000)

II 平城京左京八条二坊二坪の調査

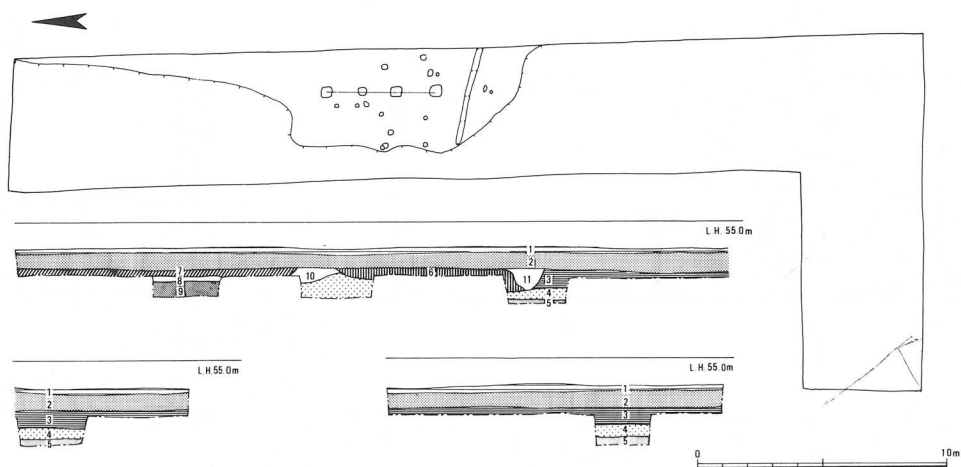
1 調査の契機と経過

今回の調査地は平城京の条坊復原によれば、左京八条二坊二坪の西北隅に相当し、調査地北端に一、二坪を画する小路の存在が推定された。調査は小路の確認と、坪内の様相を知ることを目的として、当初、東西5m、南北36mの発掘区を設定して行い、さらに東一坊大路の確認のためこの南端を西に6m拡張した。調査期間は昭和56年7月13日から同年8月24日までであった。

2 調査の内容

発掘区内の土層堆積状況は以下のようなものであった。厚さ約20cmの耕土以下60cmまで赤褐色粘質土が堆積しており、その下に発掘区北側では灰色粘土が、南側では青灰色粘土が堆積している。このうち赤褐色粘質土までを機械力で除去し、灰色粘質土および青灰色粘質土上面において遺構検出の作業を行なった。

検出した遺構は、南北に並ぶ柱列1条、溝1条、数個のピットである。いずれも灰色粘土上面で検出した。当初想定した条坊に関する遺構は検出できなかった。遺構検出の後、土層の確認のため発掘区内5箇所ですらに掘り下げを続けた。灰色粘質土の下層にはいずれも砂層が続き、地表面より約2mで植物遺体からなる茶褐色有機質の堆積を確認した。青灰色粘質土層から、若干の弥生土器、サヌカイト片が出土した。以上の結果、調査地は現状のように水田化されるまで滞水した低湿地であろう。ただ、後述する四坪の調査地と今回の調査地は直線距離にして約300mしか離れていないにもかかわらず、土層の堆積状況などは大きく異っており、その後の土地利用にも大きな差をもたらしたと思われる。



第 2 図 検出遺構坪面・堆積土層図 (1/300)

Ⅲ 平城京左京八条二坊四坪の調査

調査地は現状の行成区分では奈良市杏南町79-1、80-1番地であり、平城京左京八条二坊四坪のほぼ中央部分にあたる。調査地の南は八条大路に面していると推定された。調査は当初、東西5m、南北48mの発掘区を設定して行なったが、発掘区北部で奈良時代の井戸を検出したため、この部分で東西に発掘区を拡張した。調査面積は420㎡である。

1 検出遺構

今回の調査によって検出した遺構は柱列、建物、溝、井戸、落ち込みなどである。発掘区内の土層堆積状態は地表面から約30cmにわたって耕土である黒色土が堆積する。その下層に包含層である黄灰色砂質土が約40cmにわたって堆積する。地山は黄褐色粘質土である。今回の遺構はすべてこの地山面で検出した。

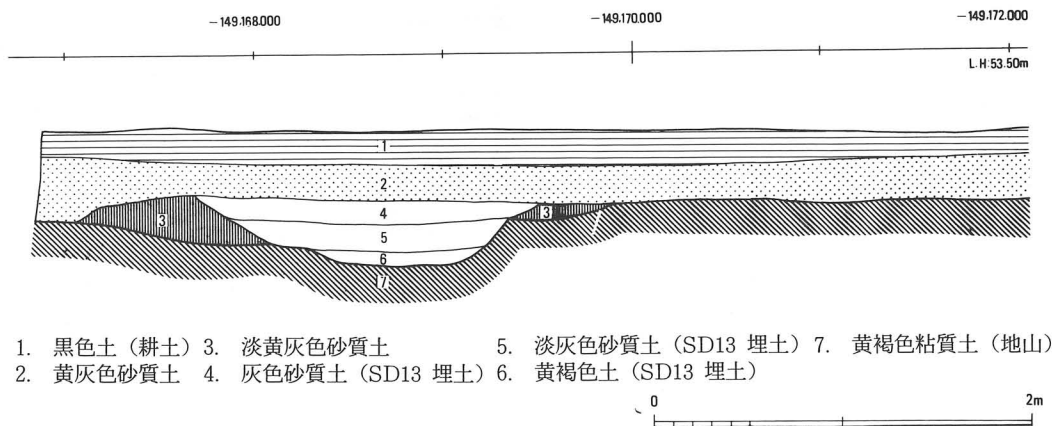
SA01 発掘区の北部で検出した全長5間(10.5m)の南北柱列で柱間寸法は2.1m等間である。

SB02 発掘区の東部で検出した掘立柱建物である。桁行3間以上(6.2m以上)、梁行2間(3.6m)の東西棟で柱間寸法は桁行2.4m(8尺)、梁行1.8m(6尺)である。柱穴掘形は一辺約1.0mの方形で中央に柱根を残す。

SB03 発掘区の西部で検出した東西1間以上(1.6m)、南北2間(4.2m)の掘立柱建物である。柱間寸法は東西1.6m、南北2.1mである。柱穴は径0.3m前後の円形掘形をもち、中央に径0.1m前後の柱痕跡を残す。SA01と柱筋を揃える。

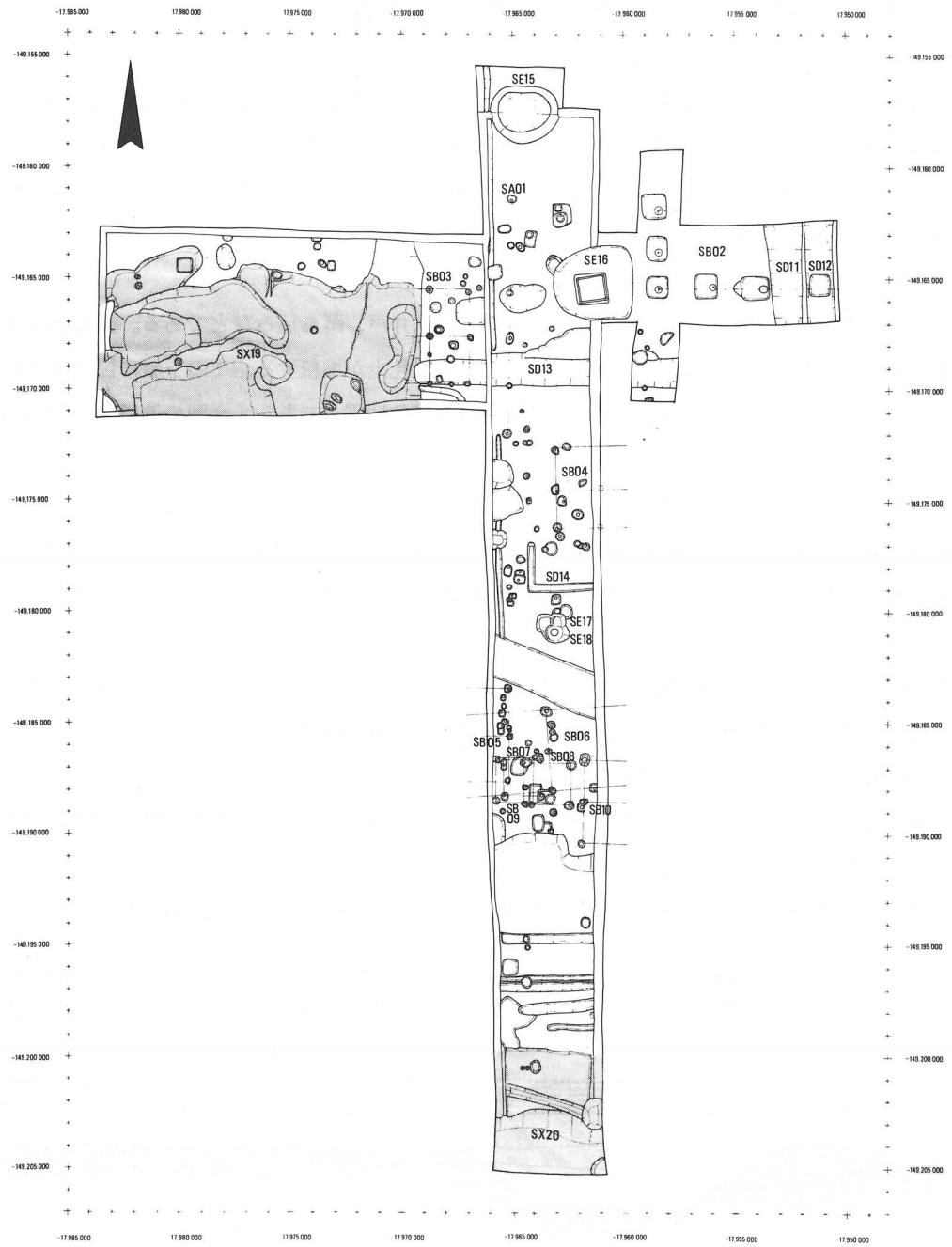
SB04 発掘区の中央で検出した東西1間以上(2.1m以上)、南北2間(4.2m)の掘立柱建物である。柱間寸法は東西2.1m、南北1.6mである。

SB05 発掘区の中央で検出した東西不明、南北2間(4.2m)の掘立柱建物である。柱間寸法



1. 黒色土(耕土) 3. 淡黄灰色砂質土 5. 淡灰色砂質土(SD13埋土) 7. 黄褐色粘質土(地山)
2. 黄灰色砂質土 4. 灰色砂質土(SD13埋土) 6. 黄褐色土(SD13埋土)

第3図 発掘区東壁堆積土層図(1/40)



第 4 図 発掘区検出遺構平面図 (1/250)

は南北2.1mである。

SB06 発掘区の中央で検出した東西2間以上(4.2m以上)、南北2間(3.2m)の掘立柱建物である。柱間寸法は東西2.1m、南北1.6mである。

SB07 発掘区の中央で検出した4本柱の掘立柱建物で柱間寸法は2.1m等間である。

SB08 発掘区の中央で検出した4本柱の掘立柱建物で柱間寸法は2.1m等間である。

SB09 発掘区の中央で検出した4本柱の掘立柱建物で柱間寸法は1.6m等間である。

SB10 発掘区の中央で検出した東西不明、南北2間(4.2m)の掘立柱建物である。柱間寸法は南北2.1mである。

SD11 発掘区の東部で検出した南北溝(幅1.2~1.5m、深さ0.5m)である。4.5m分を検出した。

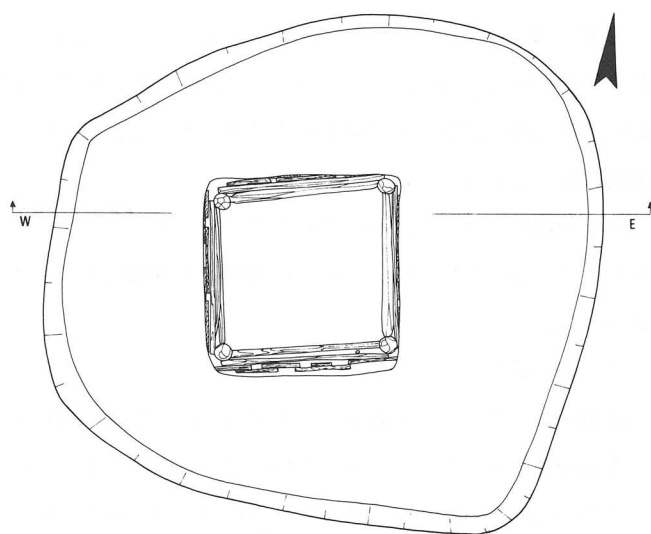
SD12 発掘区の東部で検出した南北溝(幅1.2m、深さ0.4m)である。4.5m分を検出した。

SD13 発掘区の北部で検出した東西溝(幅1.5m、深さ0.3m)である。11.5m分を検出した。

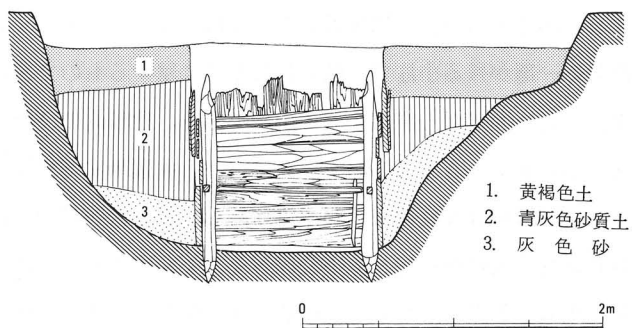
SD14 発掘区の中央で検出したL字状に曲る溝(幅0.5m、深さ0.5m)である。5m分を検出した。

SE15 発掘区の北部で検出した円形の掘り方(径約3.0m、深さ2.0m)をもつ井戸である。井戸枠は抜き取られており残存しない。

SE16 SB02の西側で検出した井戸。東西3.7m、南北3.3mの掘形をもち、深さ1.4mを測り、中央に内法1.2mの井戸枠をもつ。井戸枠は四本柱で、下半は横板組、上半は縦板組である。隅柱は断面八角形を呈し柱の先端を円錐形に削り地山に打ち込む。隅柱は2段の横棧で接合するが、横棧は下段が残るのみである。下半は横板を4段積み上げたもので、最下段の横板が他よりも幅、厚さ大きい。上半は三段目の横板裏から3~4枚の縦板を並べ、その隙間はいま一重の縦板をあて塞ぐ。



LH 5300m



1. 黄褐色土
2. 青灰色砂質土
3. 灰色砂

第5図 SE16平面図・立面図(1/50)

前面の縦板には扉材を転用する。南西隅柱には「富女」と書いた線刻がある。枠内から奈良時代末から平安時代初頭の遺物が出土。

SE17 発掘区中央で検出した。円形の掘方（径0.6m、深さ0.7m）の中に曲物の井戸杵をもつ井戸である。曲物は最下段の一部が残るのみである。切合関係からSE18より古い。

SE18 SE17の南で検出した。ほぼ円形の掘方（径0.9m、深さ1.2m）の中に曲物の井戸杵（径28cm）をもつ井戸である。底部を突孔した土師器羽釜を据え、その上に3段の曲物を乗せ井戸杵としている。曲物を塞ぐかたちで花文鬼板が出土。

SX19 発掘区の西部で検出した東西15.0m、南北6.0m、深さ0.3~0.4mの落ち込みである。

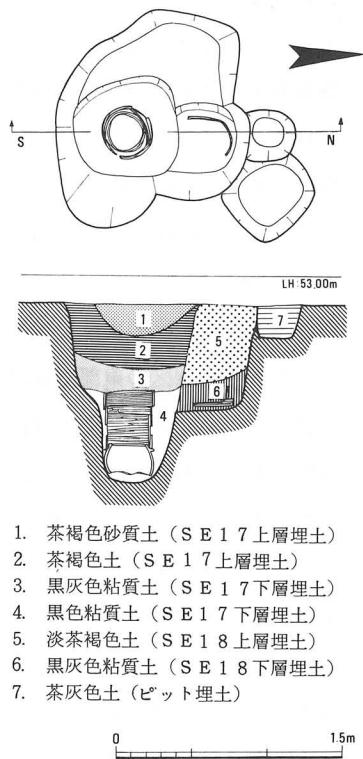
SX20 発掘区の南部で検出した東西4.5m南北5.0m、深さ0.7~0.8mの落ち込みである。この落ち込み部分は位置的に八条大路北側溝である可能性が考えられるが、奈良時代の遺物は出土しなかった。

以上の遺構の年代は、出土遺物からみてSB02、SD13、SE16は奈良時代末に、その他の遺構は平安時代末に求められる。

2 出土遺物

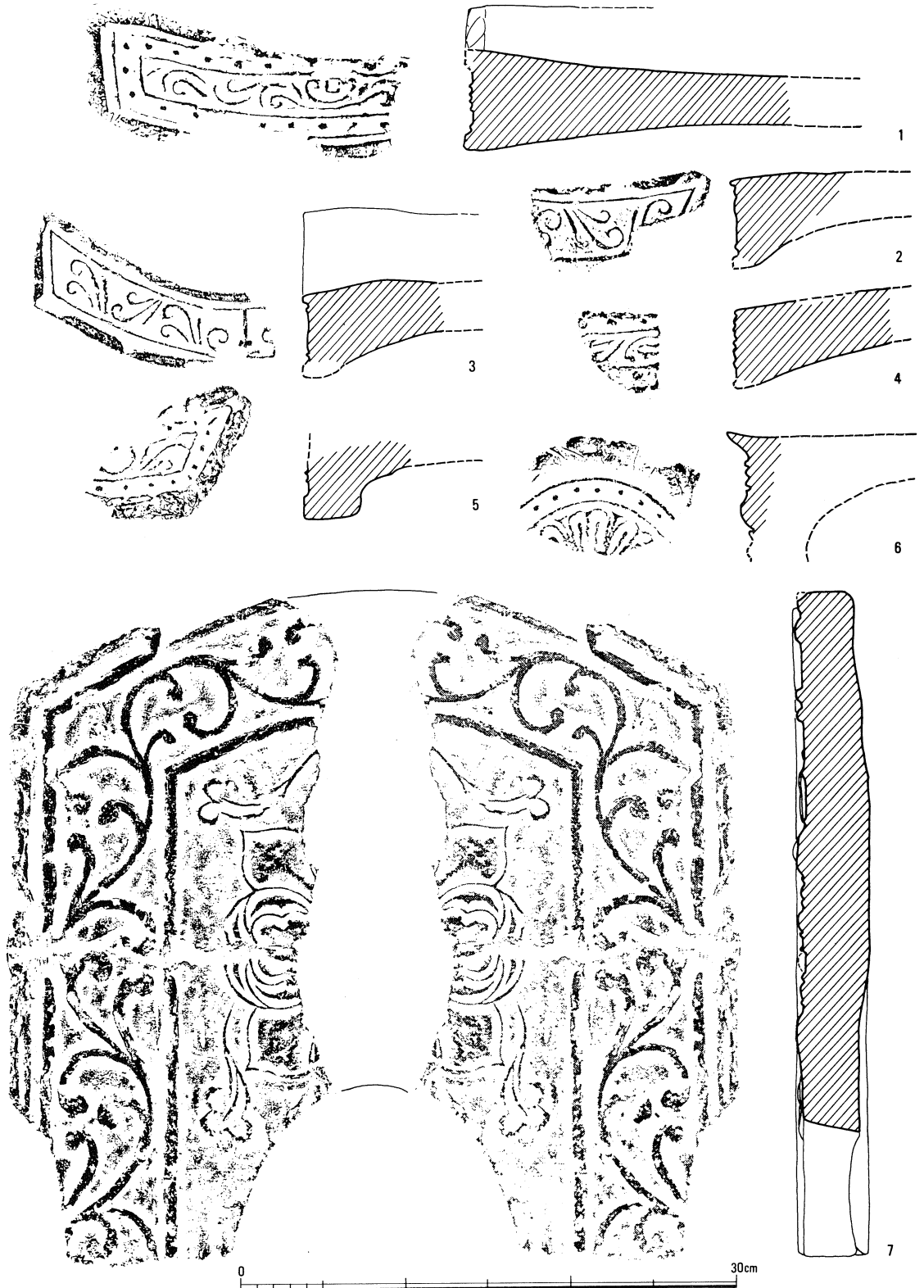
瓦類（第7図） 軒平瓦5点、軒丸瓦1点、鬼瓦1点がある。

1は均整唐草文軒平瓦。上方に開くC字状の中心葉内にU形の花頭を配した中心飾りを持ち、左右に3回反転する唐草文を飾る。外区には珠文を巡らせる。平安時代のものであろう。SE16出土。2・3は均整唐草文軒平瓦。中心飾りは上方に開いたC字状の中心葉に縦一条の基軸と左右に短く突出した端部とからなる花頭をもつ。左右に3回反転する唐草文を飾る。平城宮6702型式に属するものであろう。2はSX20、3はSX19出土。4も均整唐草文軒平瓦と考えられる。中心部分の一部が残る小片で平城宮1711型式に属するものであろう。SX20出土。5も均整唐草文軒平瓦。瓦当面对し左端を残す小片である。比較的のびのある唐草文を内区主文とし、外区には珠文を巡らせる。SX19出土。6は復弁8弁蓮華文軒丸瓦。珠文は、間弁の延長線上に割り付けられる。外縁には線鋸歯文がわずかに残る。平城宮6311型式に属するものであろう。包含層出土。7は花文を主文に飾る鬼瓦。中心部分を欠くために花文全体の形状は判然としない。また花文の上下にはそれぞれ対称をなす一對の流雲文を配する。太い圈線で区画された外区に左右両下端から頂部に向って6回反転する唐草文を対称形に飾る。外縁は一段高くつくる。下端の中央と両端には割り



1. 茶褐色砂質土（SE17上層埋土）
2. 茶褐色土（SE17上層埋土）
3. 黒灰色粘質土（SE17下層埋土）
4. 黒色粘質土（SE17下層埋土）
5. 淡茶褐色土（SE18上層埋土）
6. 黒灰色粘質土（SE18下層埋土）
7. 茶灰色土（ピット埋土）

第6図 SE17、18平面図・立面図
(1/50)



第 7 図 瓦 類 (1/4)

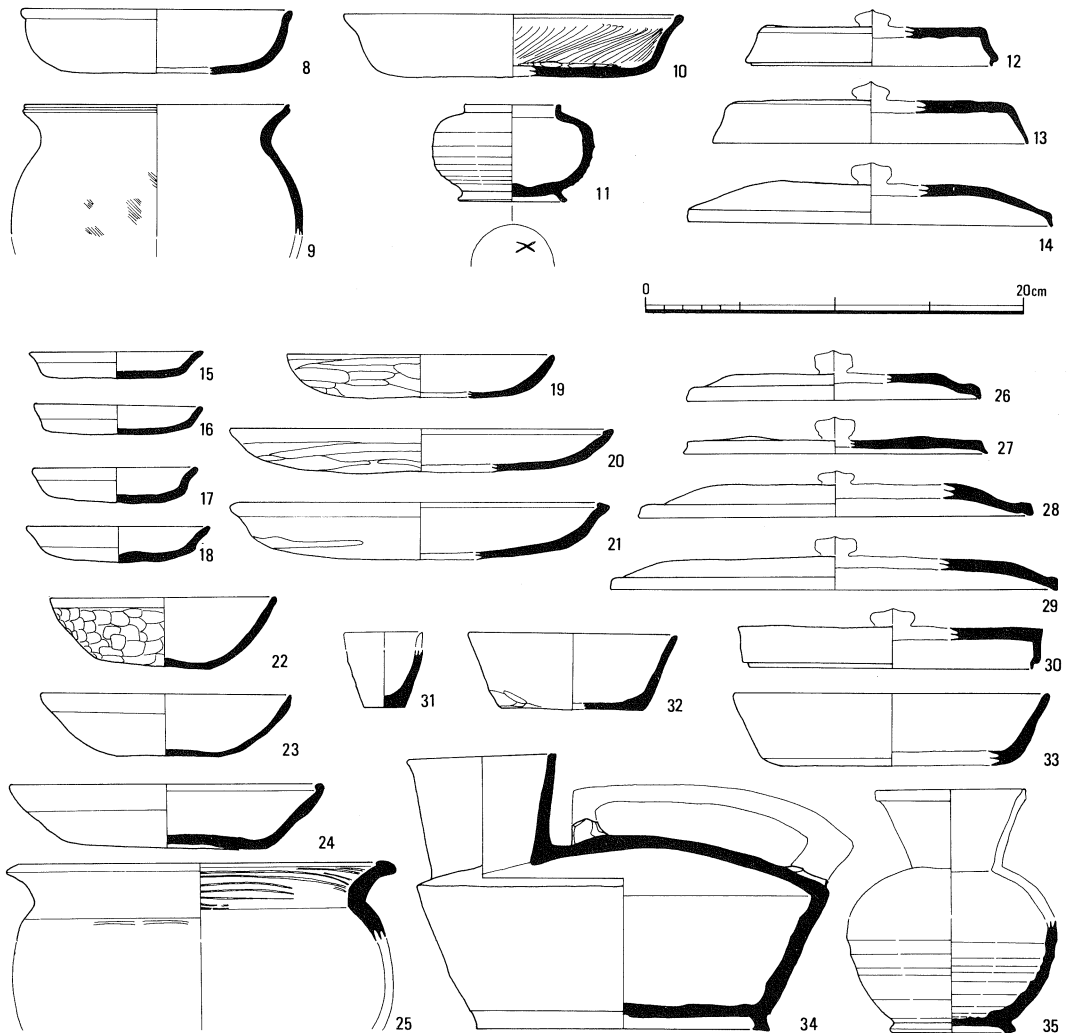
込みが施される。奈良時代から平安時代初頭の頃のものかと思われる。S E 18出土。

土器類 S D 13、S E 16から奈良時代末の土師器、須恵器が、S D 11、S E 17・18、S X 19・20からは平安時代末の土師器皿・羽釜、瓦器碗・皿、施釉陶器などが出土した。

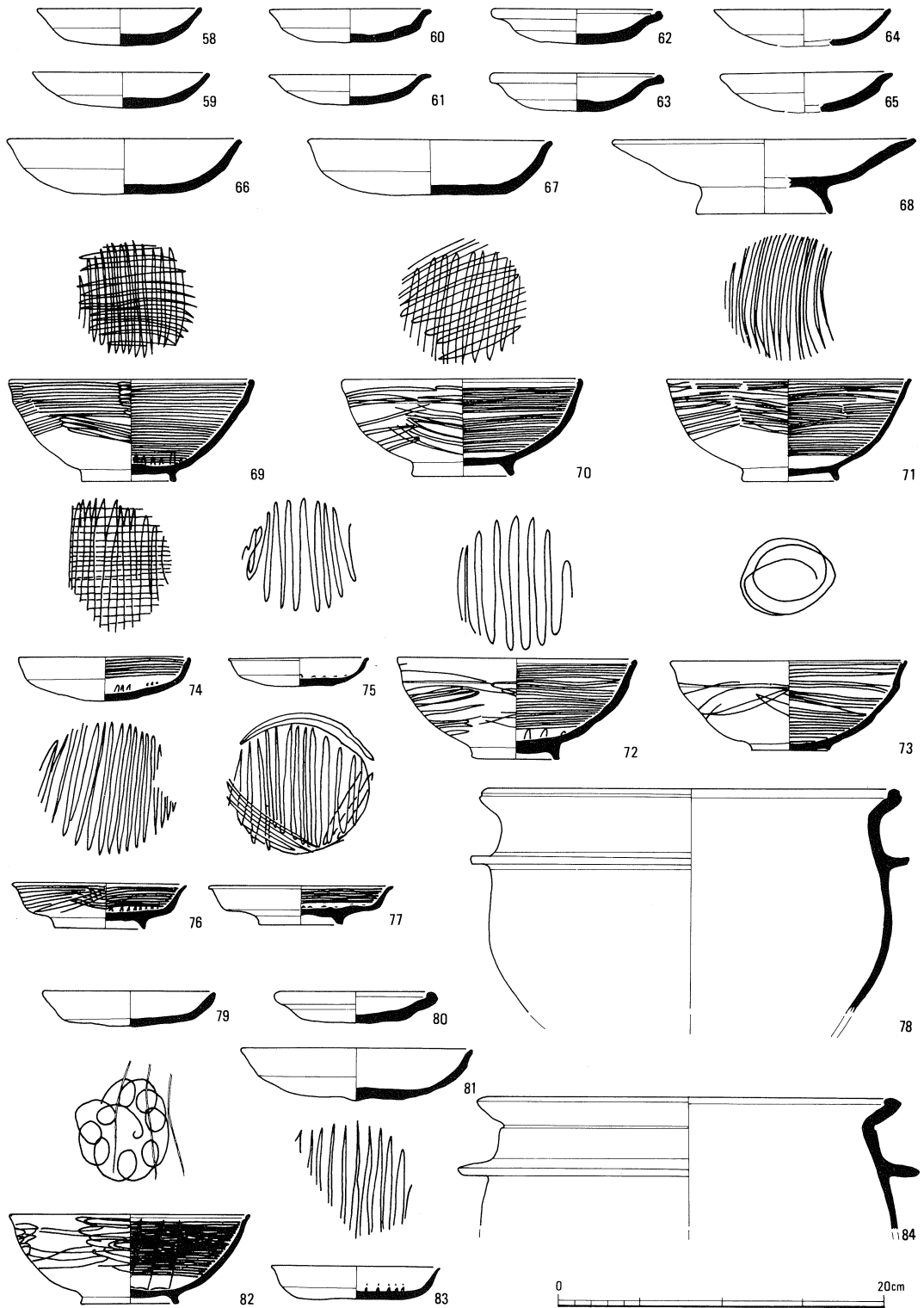
S D 13出土土器 (第8図) 土師器杯A (10)・杯C (8)・甕A (9)、須恵器壺C (11)・壺A蓋 (12・13)・皿B蓋 (14)、施釉陶器などが出土。

10は平底で、口縁部は外反し、端部は内側に丸く肥厚する。内面に斜放射・螺旋暗文を施す。11はやや丸みをおびた胴部と直立する短い口縁部からなる。高台がつき、底部外面に刻線を施す。

S E 16出土土器 (第8図) 土師器皿A (19~21)・皿C (15~18)・碗A (22)・碗D (23)・杯A (24)・甕A (25)、須恵器杯A (32・33)・杯B蓋 (26~29)・壺A蓋 (30)・碗X (31)・平瓶 (34)・壺L (36)などが出土。



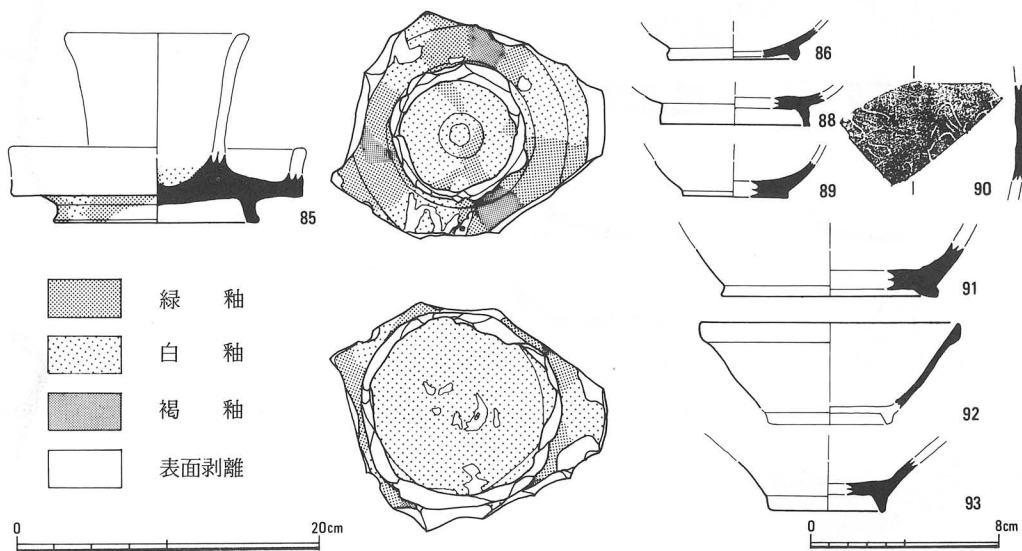
第 8 図 S D 13、S E 16出土土器 (1/4)



第 9 图 S X 19、S X 20 出土土器 (1/4)

S X 19・20出土土器（第9図） 土師器皿（58～68・79～81）、土師器羽釜（78・84）、瓦器碗（69～73・82）、瓦器皿（74～77・83）、須恵器鉢、施釉陶器、白磁碗、土馬などがある。53～78はS X 19、79～84はS X 20出土。

土師器皿は小皿（58～65・79・80）、大皿（66・67・81）、台付皿（68）にわかれる。小皿は口径9.8～10.8cm、器高1.6～2.3cmを測る。やや丸底ぎみの底部をもち、口縁部は外反する。口縁部の形態で、端部を丸くおさめるもの（58・59・64・79）、端部を外側に肥厚させるもの（60・61・65）、口縁部上半を外折させ端部を上方に肥厚させるもの（62・63・80）に区分できる。67・68は底部を穿孔する。大皿は口径13.0～16.1cm、器高2.4～3.7cmを測る。平底で口縁部を外反させ、端部は外側に肥厚させる。皿は内面と口縁部外面上半までよこなで調整する。色調は乳灰色か黄灰色を呈し、胎土中に砂粒を含む。羽釜は口径26cmを測る。胴部は内彎しながら頸部を内傾させ、口縁部はくの字状に外折する。口縁端部を上方に肥厚させるものと内折するものがある。口縁部内外面はよこなで調整する。色調は茶褐色を呈し、胎土中に砂粒を含む。胴部外面には炭化物が付着する。瓦器碗は口径14.4～15.4cm、器高43～6.8cmを測り、形態と調整の違いによって区分できる。碗の高台が断面逆台形で、口縁部内外面ともていねいなへら磨きを施し、見込みにはこまかい格子状、ジグザグ状、連結輪状の暗文を施すもの（69～72・82）と、高台が断面三角形で、口縁部内外面に粗いへら磨きを施し、見込みには粗い連結輪状、渦巻状の暗文を施すもの（73）にわかれる。また底部外面に線刻や墨書を施すものもある。瓦器皿は底部がやや丸底ぎみで、口縁部を外反させ端部は丸くおさめる。口縁部内外面はていねいなへら磨きを、見込みには格子状かジグザグ状の暗文を施すもの（74）と、底部は平底で口縁部は外反し端部は外側に肥厚させ、口縁部内外面には粗いへら磨き、見込みに粗い6～7条の暗文を施すもの（75）にわかれる。



第10図 施釉陶器・磁器（85：1/2、86～93：1/4）

土師器皿Aは平底で、外反する口縁部をもつ。20・21の口縁端部は外側に肥厚する。19・20はCo手法、21はbo手法である。土師器皿Cは口径8.8～9.6cmを測る。平底で、口縁部を外反させ端部は丸くおさめる。Eo手法である。17は内外面とも黒色を呈する。土師器椀Aは丸底ぎみの底部と外反する口縁部からなり、端部は丸くおさめる。Co手法である。土師器椀Dは椀Aよりやや浅く、口縁端部は尖ぎみにおさめる。Eo手法である。土師器杯Aは平底で、口縁部を外反させ端部は内側に肥厚する。Eo手法である。奈良時代末から平安時代初頭の土器である。

S D 11出土土器（第11図） 土師器皿（36～43）、須恵器壺（44）、瓦器椀（45・46）、瓦器皿（47）などが出土。

土師器皿は小皿（36～42）と大皿（43）に区分できる。小皿は口径9.0～10.5cm、器高1.8～2.0cm、大皿は口径13.4cm、器高1.3cmを測る。皿は口縁部を外反させ、端部を丸くおさめるもの（36・37）と、外側に肥厚するもの（39～43）にわかれる。色調は乳灰色か黄灰色を呈し、胎土中に砂粒を含む。瓦器椀は口径15.5cm、器高5.7cmを測る。底部外面には断面逆台形の高台がつく。口縁端部内面には一条の沈線を施す。内面と端部外面にはよこなで調整、外面には3分割のへら磨きを施す。口縁部内面はていねいにへら磨き、見込みには10回前後のジグザグ状の暗文を施す。瓦器皿は口径9.8cm、器高2.2cmを測る。平底で、口縁部を外反させ端部は外側に肥厚する。内面と口縁部外面はよこなで調整、口縁部内面はへら磨き、見込みにはジグザグ状の暗文を施す。

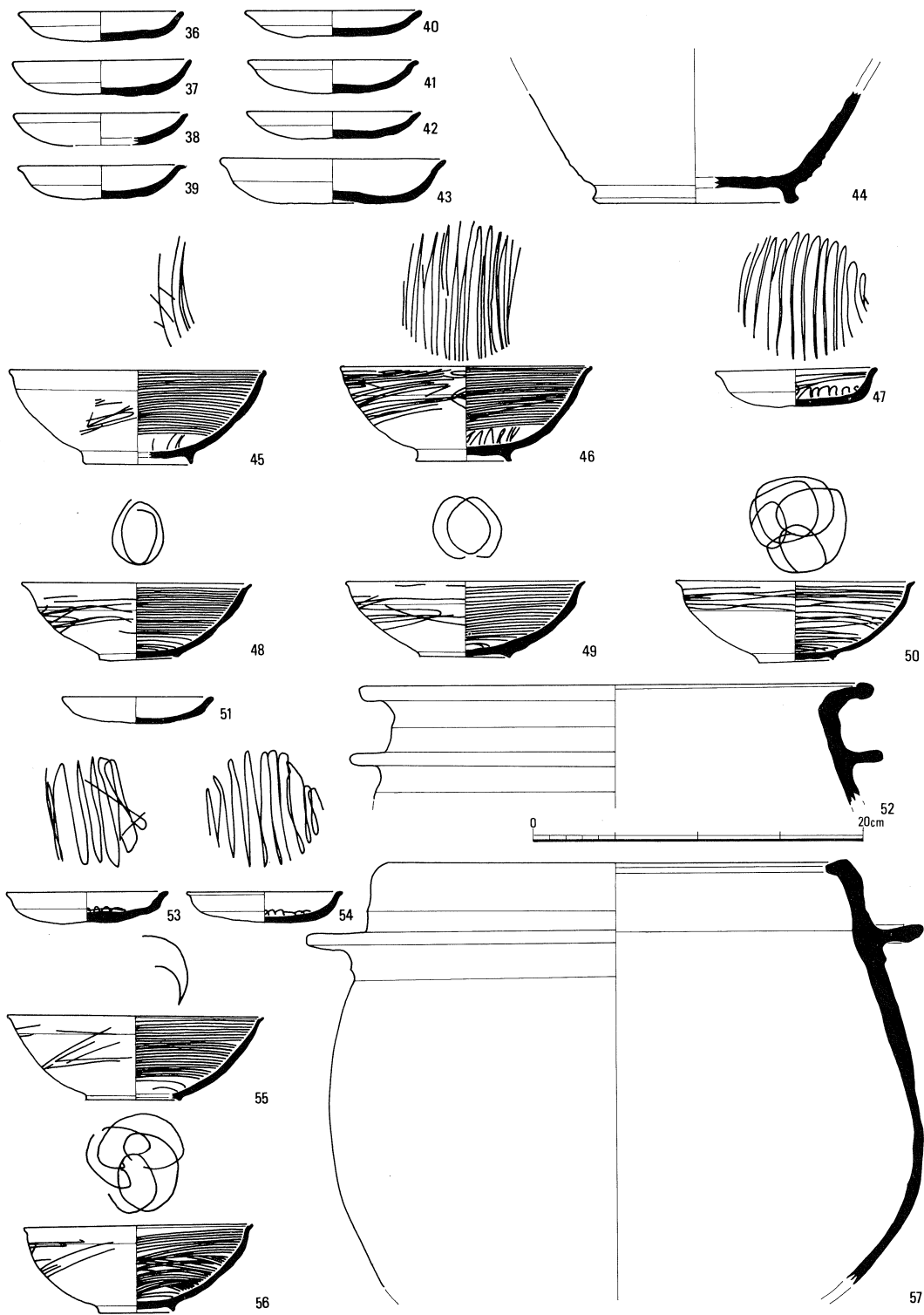
S E 15出土土器（第11図） 土師器皿（51）、土師器羽釜（52）、瓦器椀（48～50）が出土。

瓦器椀は口径13.9～14.5cm、器高4.6～の.9cmを測る。底部には断面三角形の高台がつく。口縁端部は外側に肥厚させ、内面に一条の沈線を施す。内面と端部外面はよこなで調整する。口縁部外面には6～8条の粗いへら磨き、見込みには渦巻状か連結輪状の暗文を施す。土師器羽釜は口径31cmを測る。頸部を内傾させ、口縁部でくの字状に外折する。口縁端部は内折し上方に肥厚する。色調は淡茶灰色を呈し、胎土中に砂粒を含む、胴部外面には炭化物が付着する。

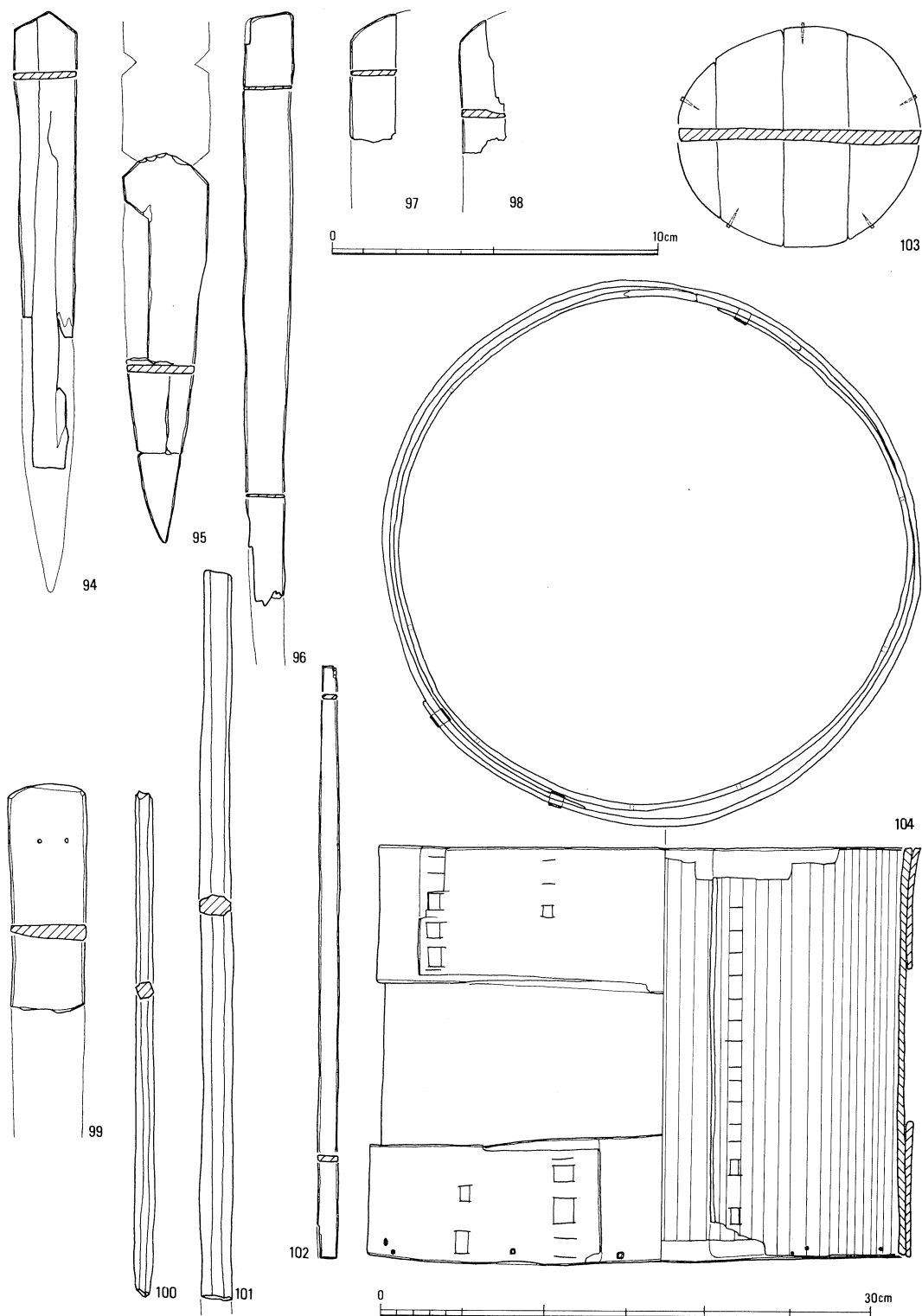
S E 18出土土器（第11図） 土師器羽釜（57）、瓦器椀（55・56）、瓦器皿（53・54）が出土。

土師器羽釜は底部を打ち欠き井戸枠として用いられたもの。口径は30cmを測る。胴部は内彎しながら上半を内傾させ、頸部は直立する。口縁部はやや内傾しながら端部を内側に肥厚させる。口縁部内外面はよこなで調整する。色調は暗茶灰色を呈し、胎土中に砂粒を含む。胴部外面には炭化物が付着する。瓦器椀は口径14.8～15.5cm、器高5.1～5.2cmを測る。底部はやや丸底ぎみで、断面三角形の高台がつく。口縁端部は外側に肥厚させ内面に一条の沈線を施す。内面と端部外面はよこなで調整する。口縁部外面には6～7条の粗いへら磨き、内面はやや粗いへら磨きを施す。見込みは連結輪状の暗文を施す。瓦器皿は口径9.4～9.8cm、器高1.8～1.9cmを測る。平底で口縁部を外反させ、端部は外側に肥厚する。内面と口縁部外面はよこなで調整する。底部外面は指押え痕跡が残る。見込みにはジグザグ状の暗文を施す。

注）土器の器種名および調整手法は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』に準拠した。



第 11 图 SD11、SE15·18出土土器 (1/4)



第 12 図 SE 16・18 出土木製品 (94~101 : 1/2, 102~104 : 1/4)

施釉陶器（第10図） 奈良三彩托（85）、緑釉陶器（86～89）、灰釉陶器（90・91）白磁碗（92・93）、青磁碗などがある。

三彩托は筒状の受部を欠損する。皿部の口径は7.7cmを測り、底部外面には高台がつく。皿部は3分割して施釉される。胎土は細く、色調は乳灰色を呈すことから奈良三彩と考えられる。S D 14出土。緑釉陶器は硬質で器面に淡い黄緑色の釉を施す。88の底部には糸切り痕跡が残る。90の器面にはヘラ描きの花卉文が残る、白磁碗は口縁部が外反し、端部は外側に大きく肥厚する。胎土は灰白色で釉の発色は青みをおびた灰色を呈する。88はS D 11出土。90・92はS X 19出土。

S E 16・18出土木製品（第12図） 削りかけ（95）、桧扇（96～98）、曲物底板（103）、曲物側板（10）などが出土。93～101はS E 11出土。102～104はS E 18出土。

94は柎目の薄板で上端を三角に削ったもの。95は柎目の薄板、下半を剣先状に削り、頂部の両端には切り込みをもつ。中央部分を欠損する。96・97は柎目の薄板で桧扇の上端と考えられる。98は柎目の板材で下半を欠損する。上部に2ヶ所の穿孔が残る。99は長さ15.4cmを測り、断面六角形の棒状を呈する。104は径約15cmの正円で、側面を直に削る。側面には側板を固定した木釘孔が5孔あり、木釘をとどめているものもある。104は底板をはずして井戸枠としたもの。柎目の薄板で口径33cm、器高25.5cm、厚さ0.4cmを測る。内面には木埋に直交する刻目を施し、両端に綴穴をあけて、桜皮でとじあわせ、円筒形につくる。円筒形の上端と下端は幅7.6cmの薄板をタガ状にまわし、2ヶ所の綴穴でとじあわせる。下端側縁には底板を固定した木釘穴の痕跡が残る。

3. まとめ

最後に調査地の性格について若干の検討を加えてまとめてする。今回の調査では、建物、井戸、溝などを検出した。検出した遺構は大きく、奈良時代から平安時代初頭にかけてのものと、平安時代末から鎌倉時代初頭にかけてのものに区分できる。また出土遺物の中で特筆すべきものとして花文鬼瓦や奈良三彩託があり、他に中世の日用雑器である瓦器碗、土師器皿が多量に出土した。これらことから調査地の性格を二つにわけて考えてみる。

平城京のモデルになったとされる唐の長安城には「杏園」と呼ばれる施設がみられる。長安城の杏園の場所に相当するのが平城京では左京八条二坊周辺にあたるが、現代調査地周辺の地名は「杏」（からもも）と呼ばれており、その相似点が指摘できる。杏園は当時科挙に合格した学士たちが園会を催した所として知られており、花文鬼瓦や奈良三彩託との関連が注地されよう。また、平安時代になっても奈良時代の東市が続き、「辰市」として営まれていたことが知られている。調査地の小字名は「戒」（えびす）であること、当時の日常雑器が多量に出土したことから辰市がこの周辺にあったのではないかと推察できる。しかし、遺構の上からこれらの存在を証明するには至っていない。

なお、今回検出した奈良時代の遺構は杏南隣保館に一部復原展示している。

注）平岡武夫編 「唐代の長安と洛陽 資料編、地図編」『唐代研究のしおり』1977



1. 発掘区全景（南から）



2. 西発掘区全景（東から）

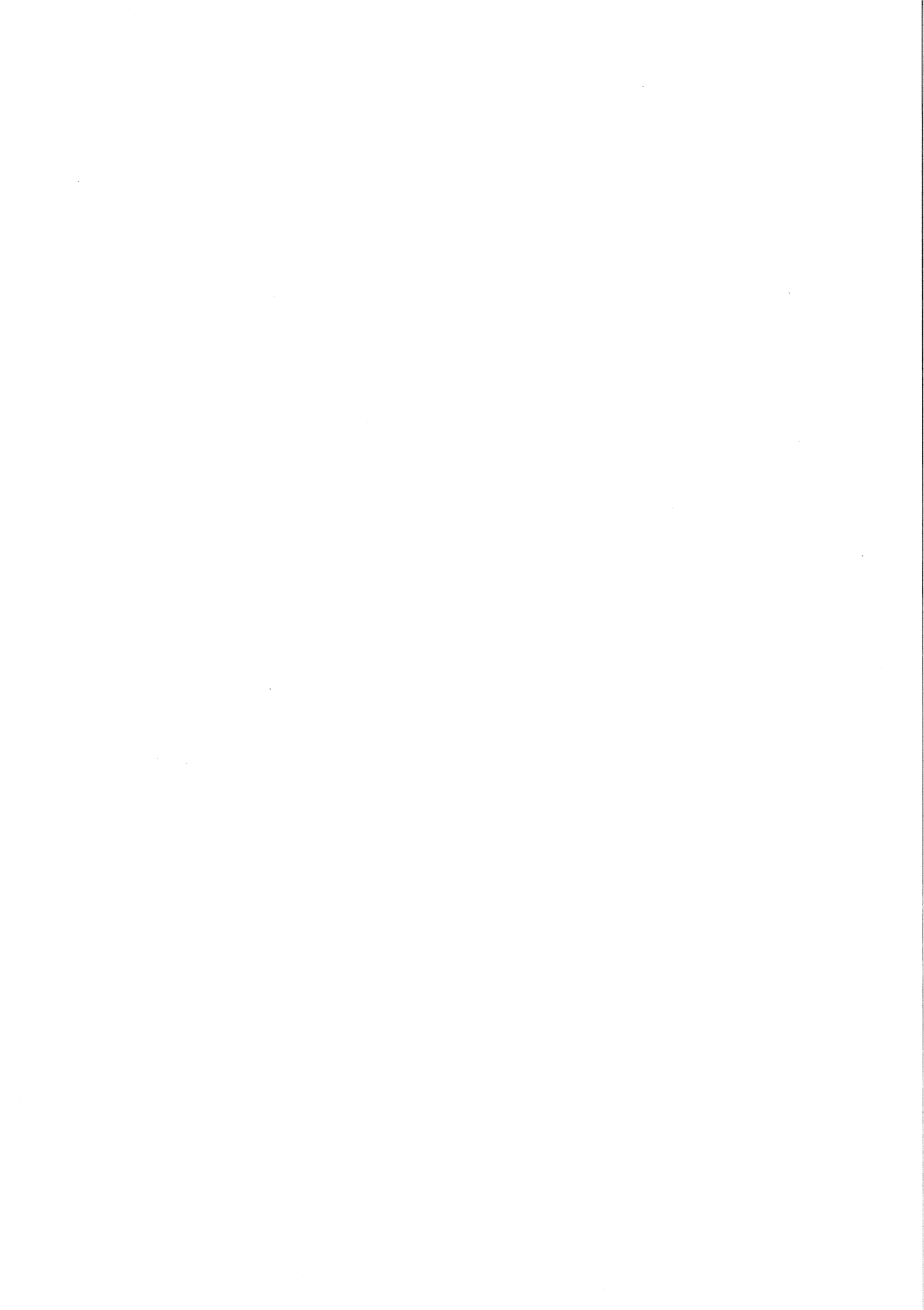




1. 発掘区全景（南から）



2. 発掘区全景（北から）

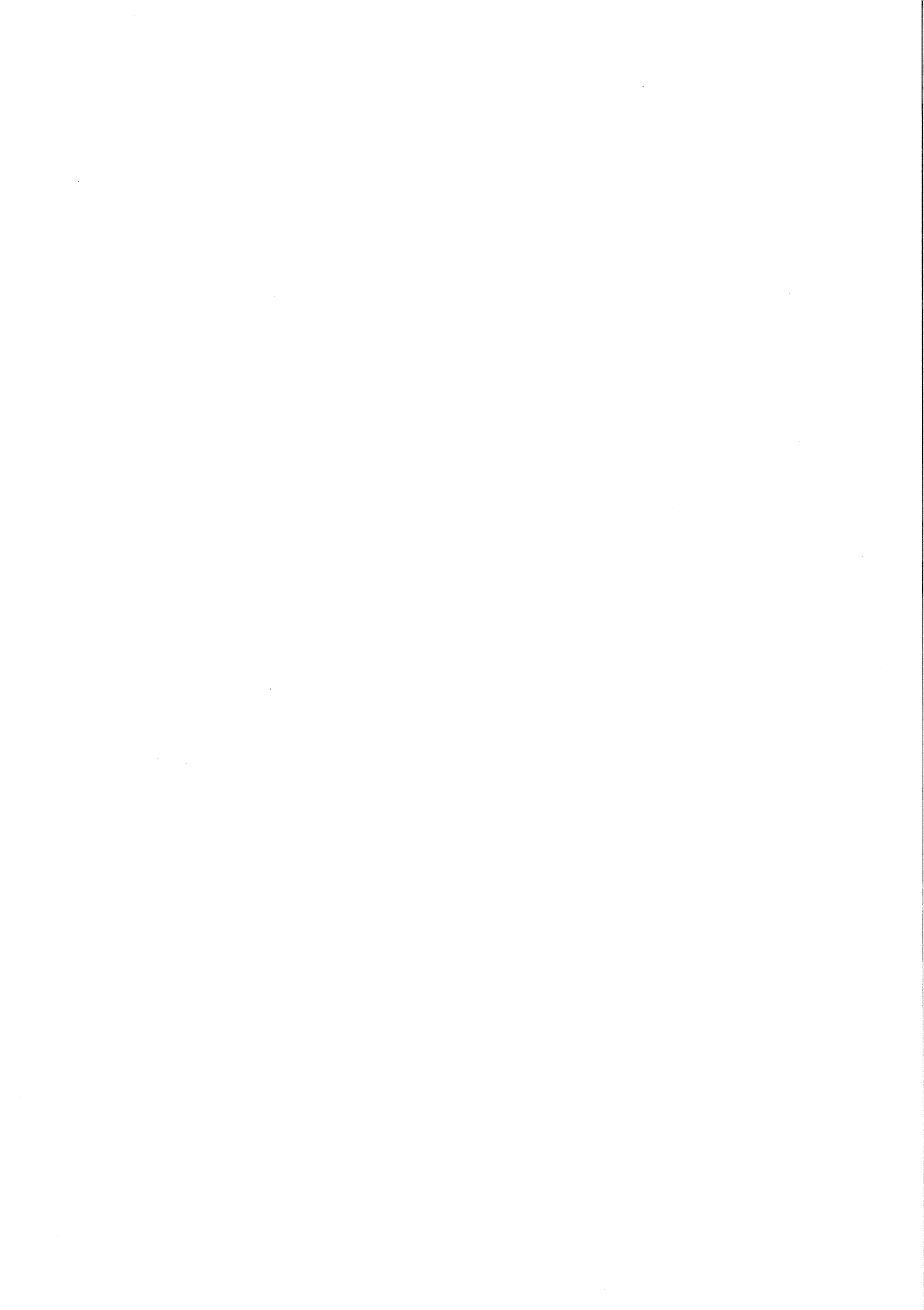




1. 東拡張区（北から）



2. 西拡張区（東から）

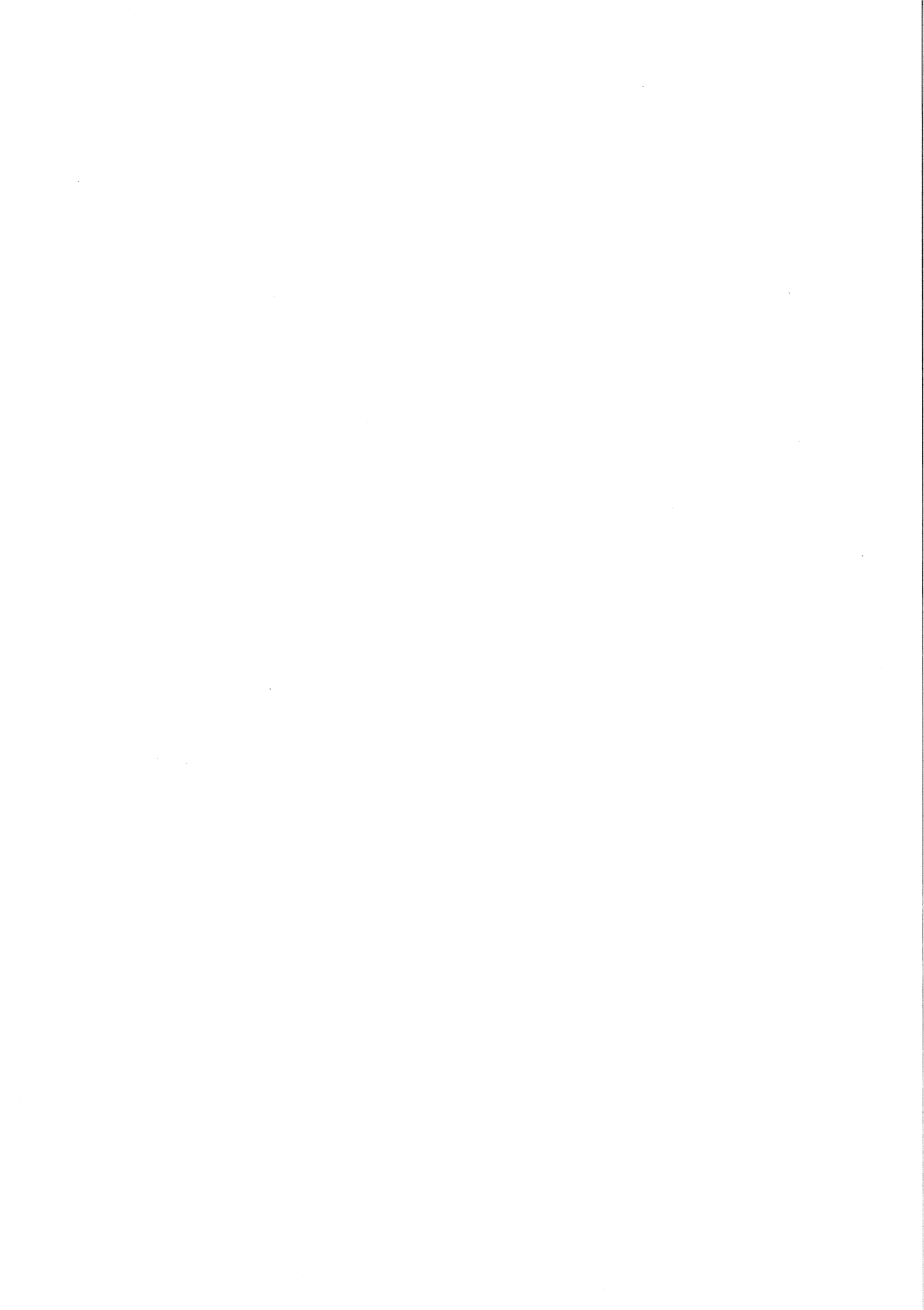




1. SB05・06・07・08・09・10(西から)



2. SE15(南から)

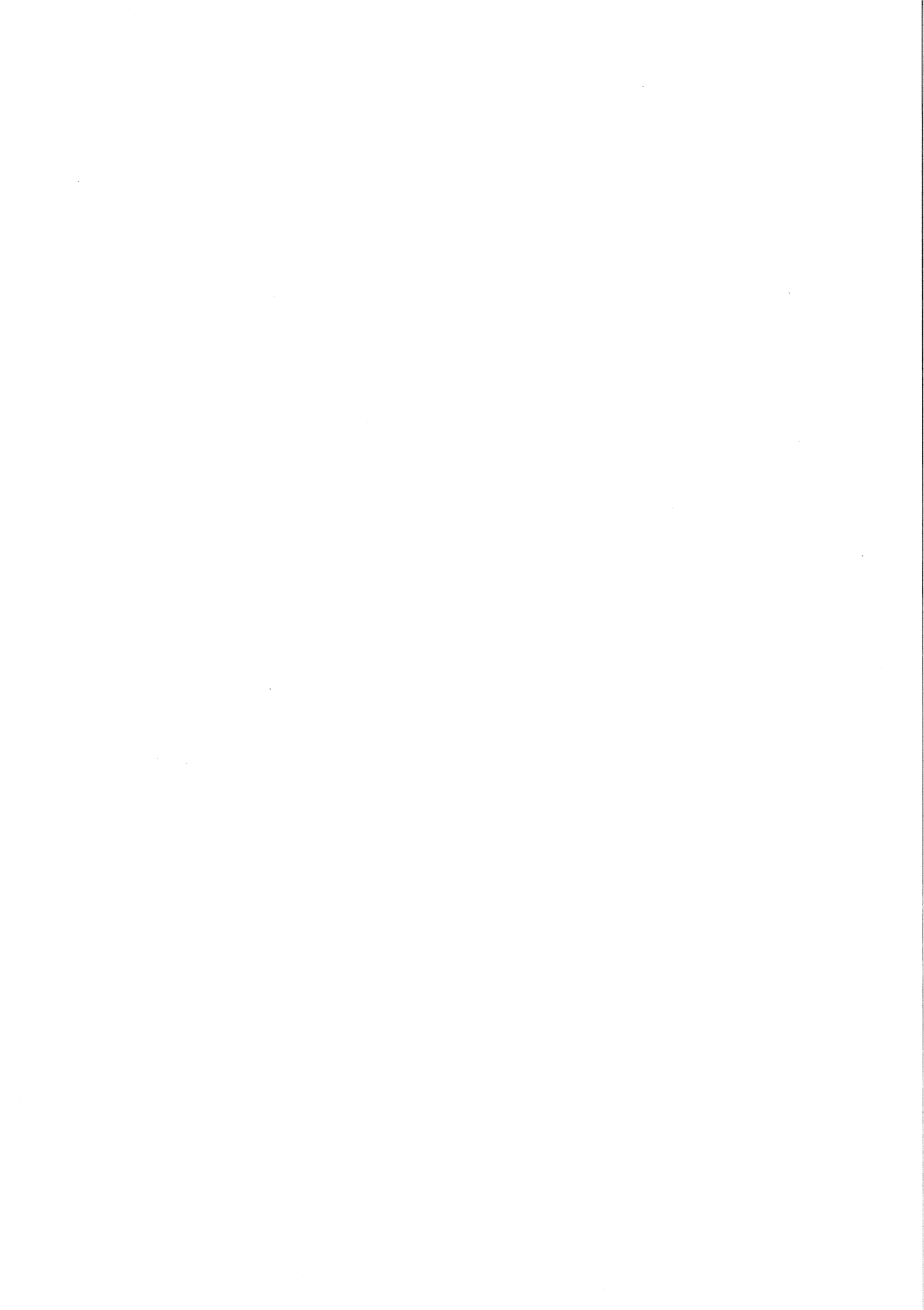




1. SE16(西から)



2. SE16(南から)

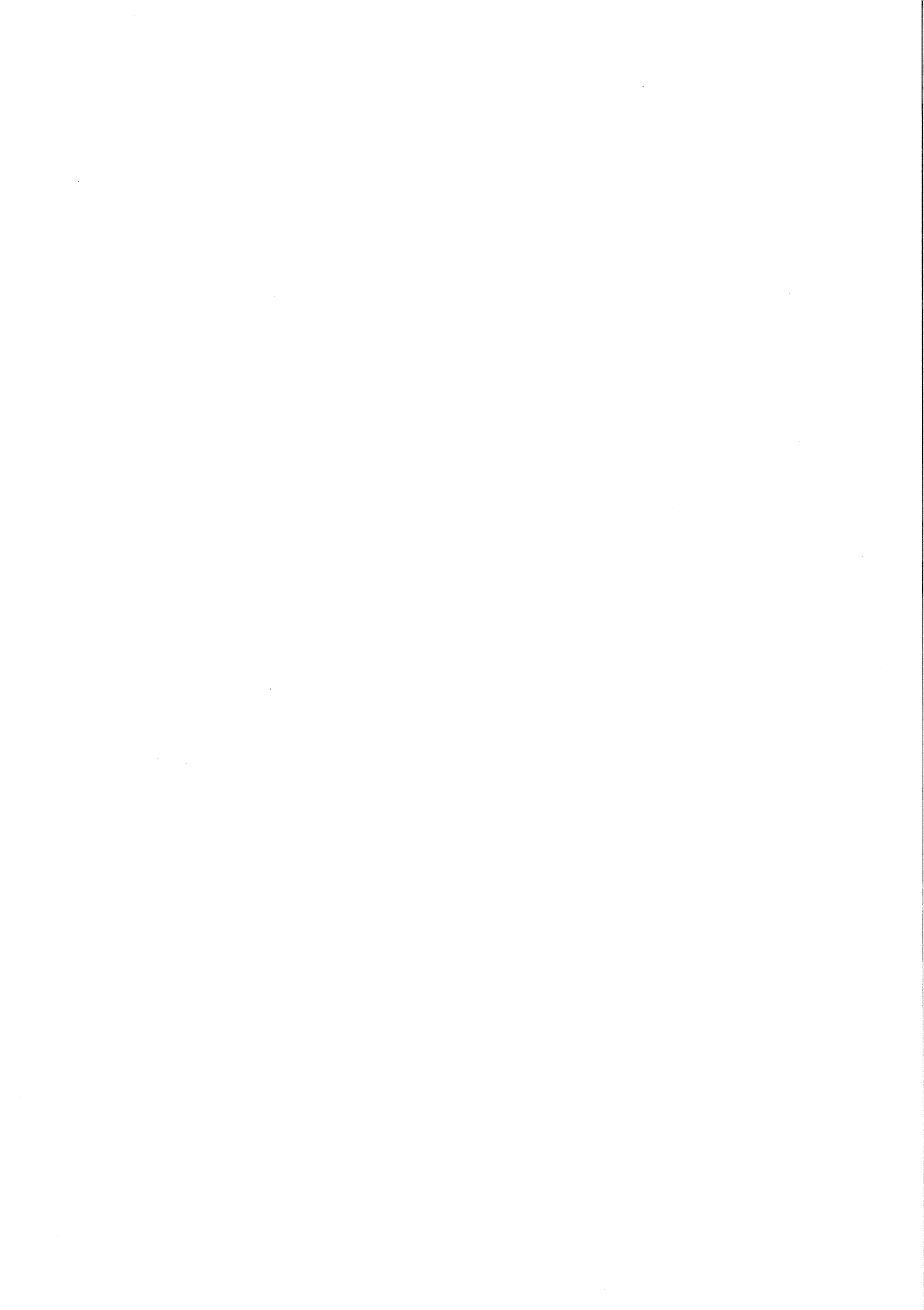




1. SE17・18 (東から)



2. SE18 (北から)



平城京左京(外京)四条六坊十四坪

発掘調査概要報告

例 言

1. 本書は都市計画道路杉ヶ町・高畑線の建設に伴い、奈良市脇戸町、東城戸町において行った事前発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は昭和56年6月9日から同年7月16日にかけて行った。
1. 発掘調査は奈良市教育委員会社会教育部文化財課が行い、西崎卓哉が現地を担当した。
なお、調査補助員として奈良大学及び花園大学文学部学生諸氏の参加があった。
1. 本書の作成に伴う遺物整理にあたっては、行天優貴子（四天王寺女子大学卒業生）奈良美穂、飯野公子、田原栄子、山本恵美子はじめ奈良大学文学部学生諸氏の協力があった。
1. 本書の執筆、編集は西崎卓哉が行った。

目 次

I はじめに	91
II 検出遺構	92
III 出土遺物	94
IV まとめ	96

I はじめに

奈良市では、旧奈良市街区を横断する都市計画道路杉ケ町・高畑線の建設を計画している。この路線のうち一部(杉ケ町・馬場町間)はすでに完成し道路として使用が開始されており、残りの計画区間も年度を追って買収、着工する計画が提示されている。今回の調査は、計画路線のうち昭和56年度買収地を対象に、事前発掘調査として実施した。

調査は昭和56年6月9日に重機を使用して表土を除去することから開始し、同年7月16日に現地での日程を終了した。既存の民家を買収、解体した後調査に着手するという経過から、発掘区の設定には大きな制約を受け、調査面積は東発掘区140㎡、西発掘区55㎡にとどまった。調査地は、平城京の条坊では左京(外京)四条六坊十四坪とその南を限る小路に相当する。また、それ以後興福寺などの大寺院の周辺に発展する中・近世奈良町の実態を知る上においても重要な地域である。これまでのところ、旧奈良市街区において中・近世奈良町を対象として行われた調査の例は少なく、今回の調査はその意味からも良好な資料となると考えられた。



第 1 図 発掘区の位置と周辺の条坊 (1/5000)